

船 橋 遺 跡

1994年3月

柏原市教育委員会

序 文

古代日本を中心地たる大和と河内を直接結ぶルートのうち、水路としての大和川の占める位置は重要であり、その河内側の玄関口ともいえる場所に、縄文時代から中世にかけての大複合遺跡である船橋遺跡は存在します。船橋遺跡は、1704年の大和川付け替えにより、河床となり、本流は遺跡の上面を洗い、しだいに侵食していきました。その結果、各時代の遺構や遺物が侵食崖や河原に見受けられ、古くより人々の注目するところがありました。船橋遺跡とは別に「大和川河床遺跡」と呼ばれる所以です。

本書でも触れますように、1950年代後半から数度実施された範囲確認調査や、侵食崖や河原に露出した遺構、遺物が研究の対象となり、数々の成果を上げてきました。その論文、報告等を上げれば、枚挙にいとまはありません。縄文土器には「船橋式」と呼ぶ土器様式があり、また土師器の好資料が多く出土するなど、土器研究の分野において看過できない遺跡です。しかし、自然の力により遺跡が日夜破壊され、保護対策が叫ばれ続けていたものの、河川敷という遺跡の立地から関係法令の規制を受け、規模の大きな調査は実施されることはありませんでした。今回の調査により、過去に実施された範囲確認調査で知りえなかった、現存する船橋遺跡の内容の概略を把握できたものと思われます。また浄化施設設置により、従前より最も懸念され続けてきた侵食の進行はひとまず避けられることとなり、保護対策の面でも一つの成果を得たものと考えています。

調査に際して、ご協力、ご努力頂いた関係各方面の皆様に厚くお礼申し上げます。

1994年3月

柏原市教育委員会

教育長 堀 刀 和 秀

例　　言

1. 本書は柏原市教育委員会が1993年度に実施した、船橋（ふなはし）遺跡93-1次の発掘調査概要報告書である。

2. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史、石田成年が担当した。

3. 本書は安村、石田、松尾が執筆し、安村が編集した。

4. 調査、報告書作成に際し、次記の諸氏の参加、協力があった。（順不同・敬称略）

津田美智子　　阪口文子　　松尾洋平　　酒井英利香

有江マスミ　　乃一敏恵　　村口ゆき子

5. 調査に際し、次記の関係各位には格別のご配慮、ご尽力を賜った。記して謝意を表します。

建設省近畿地方建設局大和川工事事務所　　津田建設株式会社　　株式会社島田組

6. 調査及び報告書作成に際し、多数の方にご教示、ご助言を賜った。また八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏には出土土器の胎土観察についての玉稿を賜った。記して謝意を表します。

7. 特に注記のない限り、本書図中の方位は磁北、標高はT.P.で表示した。

8. 本書の一部で用いた色調の表現は『新版標準土色帖』12版（1992）による。

9. 調査に際し、写真、カラースライド、実測図を記録として残した。また出土遺物は成果品と共に柏原市教育委員会にて保管している。

10. 本書において、各々の調査区で構造、遺物の番号表記が異なる。これは担当者が各々の方法に運用上の長所を見出していることに起因する。本来、同一の調査、報告であることから表記は統一することが鉄則である。しかし、本調査のみならず、本市における資料管理の方法にも関わる問題として、鋭意検討中である。混乱が生じかねないことは明白であるが、暫定措置として本調査においては担当者独自の表記方法を踏襲することにした。今後、更に熟考を重ね、よりよい方法を採用したい。

目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 調査の経過.....	(石田)	1
第2章 船橋遺跡の研究史.....	(松尾)	3
1. 諸説の展開.....		3
2. 各報告書の成果.....		10
3. その他の参考文献.....		14
第3章 I区の調査.....	(安村)	16
1. 概要.....		16
2. 遺構.....		21
3. 遺物.....		39
第4章 II区の調査.....	(石田)	76
1. 概要.....		76
2. 遺構.....		76
3. 遺物.....		80
第5章 表採遺物.....	(安村・松尾)	83
第6章 船橋遺跡出土土器の砂礫.....	(奥田 尚)	90
1. はじめに.....		90
2. 含有砂礫とその特徴.....		90
3. 砂礫種構成による区分.....		91
4. 遺跡付近の砂礫種構成と土器の砂礫種構成.....		93
5. 土器の搬入傾向.....		95
第7章 まとめ.....	(安村)	100
1. 遺構について.....		100
2. 井戸—3~6出土土器について.....		102
3. 出土土器の胎土と搬入について.....		111
4. 今後に向けて.....		113

挿 図 目 次

図-1 対象地位置図	2
図-2 船橋遺跡「諸説」の概略図	5
図-3 船橋遺跡の変遷	8
図-4 船橋遺跡の変遷	9
図-5 1区遺構平面図・土層図①	17
図-6 I区遺構平面図・土層図②	19
図-7 壺穴住居-3	21
図-8 壺穴住居-4	22
図-9 壺穴住居-5・7	23
図-10 壺穴住居-6	24
図-11 壺穴住居-8	25
図-12 井戸-3	26
図-13 井戸-4	27
図-14 井戸-5	29
図-15 井戸-6	30
図-16 壺穴住居-1	31
図-17 壺穴住居-2	32
図-18 土坑-3	33
図-19 土坑-5	33
図-20 挖立柱建物-4・ピット断面図	34
図-21 土坑-6	34
図-22 溝-1	35
図-23 井戸-1	36
図-24 井戸-2	38
図-25 弥生土器	40
図-26 石製品	41
図-27 壺穴住居-3～8出土遺物	42
図-28 井戸-3出土遺物	44
図-29 井戸-3出土遺物	45
図-30 井戸-4出土遺物	48
図-31 井戸-4出土遺物	49

図-32 井戸-4出土遺物	50
図-33 井戸-4出土遺物	51
図-34 井戸-5出土遺物	55
図-35 井戸-5出土遺物	56
図-36 井戸-5出土遺物	57
図-37 井戸-5出土遺物	58
図-38 井戸-5出土遺物	59
図-39 井戸-5出土遺物	60
図-40 井戸-5出土遺物	61
図-41 井戸-6出土遺物	63
図-42 井戸-6出土遺物	64
図-43 土鍤	65
図-44 穫穴住居-2出土遺物	66
図-45 ビット出土遺物	66
図-46 土坑出土遺物	67
図-47 包含層出土遺物	68
図-48 溝-1出土遺物	69
図-49 軒瓦	70
図-50 丸瓦	71
図-51 平瓦	72
図-52 平瓦・埠	73
図-53 中近世の遺物	74
図-54 中近世の遺物	75
図-55 II区遺構平面図	77
図-56 II区主要遺構断面図	79
図-57 079土坑	79
図-58 079土坑出土遺物	81
図-59 II区出土遺物	82
図-60 表採遺物(1)	84
図-61 表採遺物(2)	85
図-62 表採遺物(3)	86
図-63 表採縄文土器	87
図-64 縄文土器絵画展開図	88

図-65 井戸-3～6出土甕の消長	102
図-66 井戸-5出土主要土器	107
図-67 井戸-3～6出土土器編年図	109
図-68 出土土器の搬入先	111

挿 表 目 次

表-1 研究資料(Ⅱ)	10
表-2 土器の砂礫構成	96
表-3 土器砂礫の類型と器種	99
表-4 土器出土遺構と搬入先	99
表-5 井戸-3～6出土土器器種構成	103
表-6 井戸-3～6出土甕	103

図 版 目 次

図版1 航空写真
図版2 航空写真
図版3 調査前風景
図版4 I区全景
図版5 I区全景
図版6 壊穴住居-3～7
図版7 壊穴住居-5
図版8 壊穴住居-5・7
図版9 壊穴住居-8
図版10 井戸-3
図版11 井戸-3
図版12 井戸-4
図版13 井戸-4
図版14 井戸-5
図版15 井戸-5
図版16 井戸-5
図版17 井戸-6

- 図版18 壺穴住居－1・2
- 図版19 挖立柱建物－3・4
- 図版20 土坑－1・3
- 図版21 溝－1・柵－1
- 図版22 井戸－1・2
- 図版23 井戸－1
- 図版24 井戸－1
- 図版25 井戸－1
- 図版26 井戸－2
- 図版27 井戸－2
- 図版28 井戸－2
- 図版29 弥生土器・石製品・壺穴住居出土遺物
- 図版30 井戸－3 出土遺物
- 図版31 井戸－4 出土遺物
- 図版32 井戸－4 出土遺物
- 図版33 井戸－5 出土遺物
- 図版34 井戸－5 出土遺物
- 図版35 井戸－5 出土遺物
- 図版36 井戸－6 出土遺物
- 図版37 土錐・壺穴住居－2・ピット－35出土遺物
- 図版38 土坑－3・溝－1 出土遺物・瓦
- 図版39 II区
- 図版40 II区
- 図版41 108壺穴住居
- 図版42 090溝
- 図版43 079土坑
- 図版44 II区出土遺物
- 図版45 II区出土遺物
- 図版46 II区出土遺物
- 図版47 表採繩文土器
- 図版48 増水時の調査区

第1章 調査の経過

本調査は建設省近畿地方建設局大和川工事事務所による河川浄化施設工事に伴う船橋遺跡の発掘調査である。船橋遺跡は羽曳野丘陵の最北端、大和川と石川の合流点の西方に位置する。1704年の大和川付け替えにより、河床となり、水流は遺跡の上面を洗い、しだいに浸食していく。その結果、各時代の遺構や遺物が浸食崖や河原に見受けられ、古くより人々の注目するところであった。船橋遺跡とは別に大和川河床遺跡と呼ばれる所以である。

同工事は2期に亘って計画され、各々文化財保護法57条の3の通知が提出された。まず、堰堤から本調査のI区の東側までの2800m²を1期工事分の対象地として1992年10月8日付けで通知された。試掘調査は同年12月4日に石田を担当者として実施、対象地に4箇所の調査区（総面積49m²）を設定し掘削したが、従前より知れる遺構、遺物は認められなかった。これは「第3章 I区の調査」でもふれるように、一時期大和川が右岸に沿って流れしており、それによって地形の変更を受けていたことに起因するものである。続いて、1期工事からさらに西へ拡張された3500m²を対象として、同年12月25日付けで2期工事分の通知がなされた。そして1993年1月13日に安村を担当者として試掘調査を実施した。2箇所の調査区を設定し、各々で遺物包含層を確認し、一部では遺構も検出した。2期工事については掘削範囲が遺構面まで及ぶことから、工事対象地全域の発掘調査を要するものと判断し、数度の協議を経た上で、同年3月29日に本調査に着手した。

工事予定箇所の位置により2箇所の調査区を設定し、東側をI区、西側をII区とした。河川敷きに堆積する砂を重機により除去し、現地表下70~100cmで遺構群を検出した。1950年代まで、水流は堰堤から南北の堤防に沿うように二分し、中央に中州を形成していた。対象地はその中州の東寄り北岸にある。総じて遺構は古墳時代に属するものが多く、遺物は縄文土器から中世の瓦器、土師器に至るまで、各時代を通して出土した。コンテナに換算して約120箱である。

5月22日には現地説明会を実施し、強い雨の中、100余人の市民の参加があった。調査期間中には豪雨増水による一部遺構の流失や、河川法の規定による調査期間の限定等、多種多様な問題に直面したが、5月31日を以て本調査を終了した。

調査終了後も、地元住民から、30數年前に拾得したという船橋廃寺の礎石の寄贈を受けたり、またII区隣接地から豪雨増水により縄文線刻絵画土器が出土し、これもまた一般市民により発見されるなど多くの話題を提供することとなった。

古代日本の中心地たる大和と河内を直接結ぶルートのうち、水路としての大和川の占める位置は重要であり、その河内側の玄関口にある船橋遺跡の存在は大きい。1979年に大阪府教育委

員会が柏原警察署敷地内で実施した調査により、遺跡がさらに北に広がることが確認されるなど、堤防以北では大小の調査により貴重な見知りが日々蓄えられているが、前述のような事情から河川敷での面としての調査は、稀有である。900m²という面積で充分かどうかは別にして、既往の範囲確認調査で知りえなかった、「大和川河床遺跡」としての船橋遺跡の実態および遺存状況を把握できたと思われる。また今回の浄化施設設置により從前より最も懸念され続けてきた年間2m前後にも及ぶ川岸の浸食は、ひとまず避けられることとなった。（石田）



図-1 対象位置図 (S=1/80000、大阪府文化財分布図に加筆)

第2章 船橋遺跡の研究史

本年度の調査は、当遺跡の研究史においてもたいへん意義深い調査であった。船橋遺跡は昭和20年代後半頃から現在に至るまでの間に、膨大な量の遺物と特異な遺構群が河流によって露出する所となり、複合遺跡という性格からも重要な遺跡である事を認知せしめた。当然、各分野の研究者間においても注目されるようになり、様々な視点から遺跡について考察がなされ、遺跡の性格や立地、考古学的環境等と結び付いて多岐に渡る諸説が展開されるようになった。

しかし、現在では諸説が提出されたままでほとんど定説を得ておらず、研究史をまとめたものすらごく僅かでしかない〔研究資料（I）の①〕。果たして、この様な状況の中で、年々増加している発掘調査に対応して行く事が出来るのか、又、船橋遺跡の正確な遺跡像を攢んで行く事が出来るのか甚だ疑問である。

船橋遺跡河床地区は、絶えず包含層と遺構面が露出しているので調査の対象に取り上げられる事が多く、その便宜を計る為にも調査区が設定されている。又、そこでは遺構毎に個々の繋がりが考えられるので将来的にはそうした調査成果の積み重ねによって船橋遺跡を解明していく事になるであろうし、諸説についても一層具体的な根拠を得る事が出来るであろう。それは、本年度の調査からも言える事で、「溝ー！」の存在が諸説に一石を投ずる事になる。

こうした観点からすれば、この時点で一度、船橋遺跡の研究史を整理する必要があろう。

以下、研究史を述べるに当って便宜上、1、諸説の展開、2、各報告書の成果、という2点に絞って考察し、3、では主に表採資料を考察した参考文献を紹介しておく。

1. 諸説の展開

まず、「船橋遺跡論争」について述べる。船橋遺跡は1948年に山本博氏によって発見された。研究資料<（I）の①>は（以下番号で記す。）船橋遺跡研究の出発点であり、<①>によって、窯址説、廐寺説、鑄造関連遺物が登場する事になった。その報告では、「遺跡のいちじるしい特徴は多数の窯址の発見」であり、型的には「隅丸型」と「隅角型」に分類出来る窯址があったという。その両者とも「煙道と焚き口の確認できないもので底の浅い構造」であったと述べられており、窯址説の初まりとなる。廐寺説の契機は、遺跡の中央に「寺院礎石と認むべき巨石が20余箇残存」しており、その中に円形柱座が造り出されたものや、柄孔を持つ礎石が含まれていた事による。又、特殊な遺物として和同開珎が取り上げられている。

<①>の成果を受けて<②>では、「窯址」の実態解明に向けて発掘調査が行われた。調査結果は「窯の内部からは、土器その他の出土遺物を見なかった。（中略）窯と遺物との関係を強調する資料は得られなかった。」とあるように消極的な成果を示した。そして、様々な試行

錯誤の中から、山本氏は「発見窯址の大多数は窯壁の上部が火熱のため緑色に変じて硬度を加えていたことから、かかる平面形がほぼ現形である。」と「窯址」を肯定しながらも、「焚口と煙道との該当する機能部の問題は、（中略）未だ解決の明確な手がかりは得ていない。」と問題を残している。

<③>では、「窯址」について更に論考が進み「隅丸型」の窯は寺院以前のもので、土師器窯であったとしている。そして、その操業期間を飛鳥初期より「更に古い頃から使用されていて、爾後奈良時代に及んでいた」と考えた。一方の「隅角型」は、神功開宝や元豐通宝が「隅角型」の付近で出土している事より、寺院よりも新しく天平中期から平安中期頃まで操業されていたとする。船橋廃寺については、調査結果から「創建が7世紀初頭、消滅が8世紀中頃とし前後約130年間存在していた」と推測し、「寺域は必ずしも明瞭ではないが、20数間四方にその痕跡があり、内に土壇を持つ建物があった。」と報告した。

窯址説に限っていえば、<③>と同年に第20回日本考古学協会総会において窯址説に対する否定的な見解が発表された。即ち<④>であるが、その報告によると「從来土師窯であるとされていた掘穴については、それらが窯とすべきものではないことを確認」したという。翌年、この動きに注目したマスコミも両説の対峙を「船橋遺跡論争」と称して新聞紙上に書き立てたので、両説の対峙は公然たるものに発展した。今一度、その内容を見てみる。

（原口氏は）カマ址がそんなに多数にあるのは変だと疑問から調査を続け山本説にたいし宝永初年の大和川改修工事のさい、堤防用の土砂をとるために掘った穴だと主張、考古学界に新しい論争を巻き起こしているものだが昨32年度、平安高校教諭丹信実氏らが、赤かっ色層の化学検査や流域の地質調査を行い、1大和川上流域が火成岩質であること、川床地盤が青緑色粘土層であることなどが、酸化鉄の沈殿に適した条件を与えている。2焼けたものなら壁や底面にアブク状の粒子やガラス質が生じるのに、それらが発見できないなどの事実をつきとめ、学界でも原口説をより科学的であるとして支持するものが多い。時折しも、この年は<研究資料（Ⅱ）のa>が、刊行された年であった。その中で、担当者の原口氏は、調査区に「長方形ないし不整形の土掘穴がほとんど全面に分布」する事から、特に、V地区調査の目的を「ここに群在する土掘穴が土師器の窯址であろう」という推定によって、それを確認すること、分布範囲を計測することであると述べ、「この土掘穴は、從来、土師器窯址と称されていたが窯址とは連続しない。」と結論付けた。

1962年は、「船橋遺跡論争」にとって非常に重要な年であった。<⑥>の執筆者、坪井氏は、1956年の調査成果の一つに、<研究資料（Ⅱ）のaに対応>

V地区の土師器窯跡群と称されてきた多数の掘穴は、その窯跡といわれる部分に火熱のくわえられた形跡の認められず、たんに鉄分の沈着したものであることがたしかめられ、それらは現大和川つけ替え以降の土取り工事にともなって形成されたものであること、また

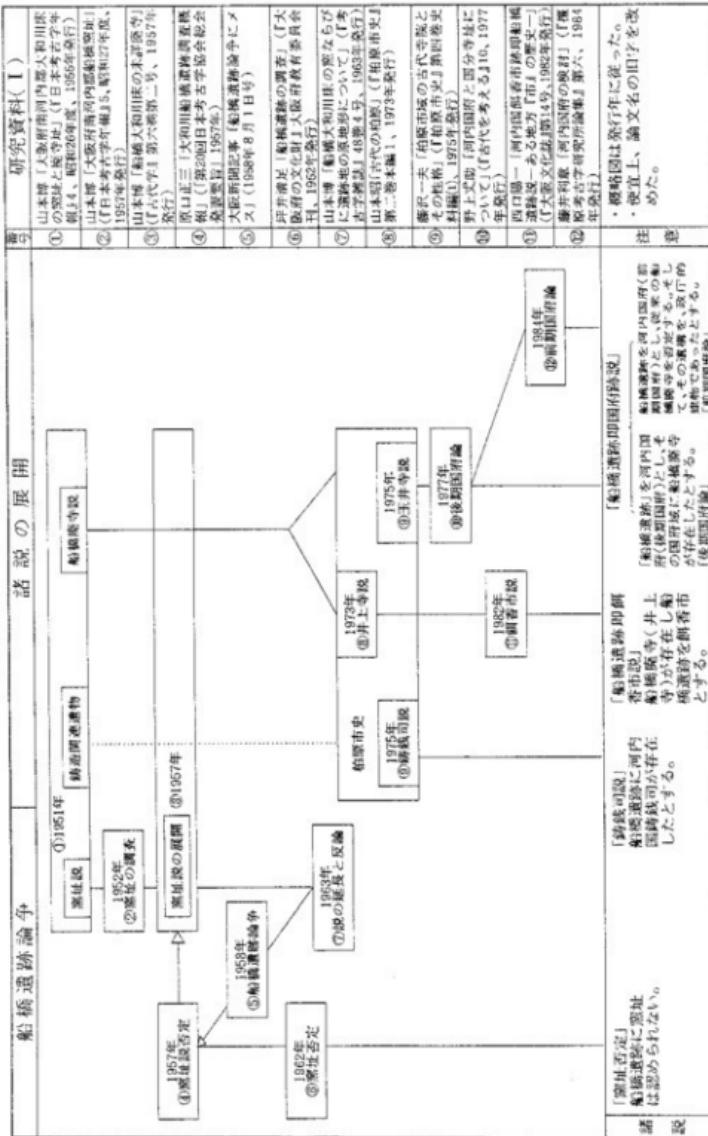


図-2 総経済計「新規」の概念図

窯の種道といわれた細溝列は、河川改修に用いられたドレッジャーによって跡づけられたものであることが判明した。

と述べて、「船橋遺跡論争」に結着をつけた。一方の山本氏は翌年、自説の延長と窯址否定説に反駁する為、<⑦>を執筆したが、その中において「（窯址は）どれ一つとして上部構造を残していなかった。しかし、これらが窯として用いられた証拠は窯壁や底部に焼痕があり、煙道も残存していることから否定できない。」と反論した。

しかし、現時点から以上のような論争史を省みれば、皮肉な事にも山本氏自らが担当された1952年の発掘調査以来、窯址説は窯址となり得る有力な資料を得られぬまま、次第に説得力を無くして行ったように思われる。そして、<⑦>以来、窯址説は相争われた痕跡もなく影を秘めて行き、現在山本氏の言う船橋遺跡窯址説は否定されている。

次に「諸説の展開」に移る。船橋遺跡の諸説について、全ての問題点を内包していたのが『柏原市史』であったと言える。鑄造関連遺物については、表採資料からも度々紹介されている所であるが、<⑨>において初めて論考がなされた。<⑨>の執筆者藤沢氏は、船橋遺跡から銀錢の和同開珎を始めとする皇朝十二錢のほとんどが多量に発見されている事や、石造錢范の出土が伝えられている事から、吹子羽口、銅滓等の出土している事実と相俟って、船橋遺跡に「河内国銭司司」が設置されていたと述べている。（銭司説）

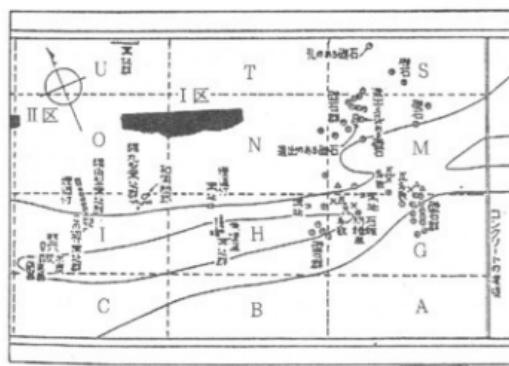
『柏原市史』では、船橋廃寺について<⑩>の「井上寺説」と<⑪>の「玉井寺説」が提示された。<⑩>の考察では、山本昭氏が「船橋廃寺のある川床は志紀郡内」で、その中の井於郷が船橋遺跡に当る事から船橋廃寺を、井上寺であると考えた。その井上寺は『元享釈書』によると高句麗系渡来氏族の僧慧灌が創建した寺で、『日本靈界記下巻第五』原山廃寺の段に「返于河内市ノ辺井上寺之里云々」とある事からも、井上寺と「餌香市」は近接していたとする。（井上寺説） ただ、先に見た<③>では、「隅丸型」窯址の創業期間の根拠に、船橋廃寺と船橋遺跡から南方500mに所在する衣縫廃寺との関係を考えており、衣縫廃寺を井上寺としている。<⑪>では、<⑩>で述べられた「餌香市説」が、具体的な検証を経て登場する事になった。ここでは、西口氏がまとめられた船橋遺跡の研究史から「遺跡の性格に関し、藤岡謙二郎・山本昭氏の提唱する船橋遺跡即餌香市説と、藤沢一夫・野上丈助氏の提唱する船橋遺跡即國府跡説とが並び登場する事になった。」と通観し、西口氏自身は「餌香市説」の立場から「前説こそが正しい」と考え、船橋廃寺を「井上寺」であると述べた。そして、船橋遺跡の地理的環境に類似する大和国海石榴市と比較しながら餌香市を復元して行くが、「奈良後期、あんなに多量に出土した土器も、平安時代になるとほとんど出土しなくなる」事や、「奈良後期の層上には、厚い粘土や砂が堆積し、幾多の洪水を受けたことが判明」している事からも、餌香市は奈良時代末期には衰退したと考えた。又、船橋遺跡から「和同開珎を始め、多数の錢貨が出土」しているのは、これらの錢貨が餌香市に関連する遺物であったからだと推測している。

(船橋遺跡即頃香市説)

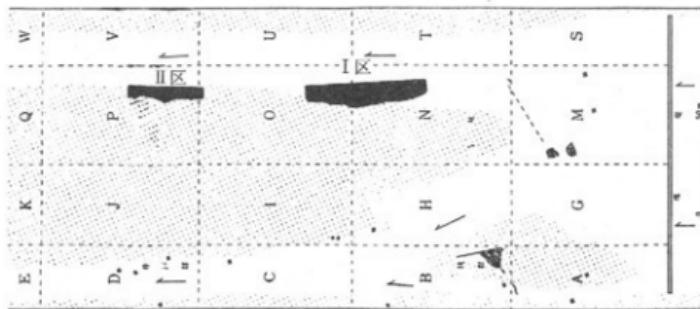
一方、<⑨>の考察からは、大和川の堰堤から下流に旧川筋が検出され（注1）、「その北側の広大な屋敷には掘立柱の建築が連なり南北の旧川筋西側に接して四天王寺式配置を思わせる伽藍跡」が存在していたという。その屋敷地からは「玉井家」「大家」という墨書き土器が出土しており、特に後者は「おうやけ」と訓まれる。この事から藤沢氏は、この地に公的施設があったと考え、「玉井家」と結び付けてその施設を「玉の井のみやけ」と考えた。更に、船橋廃寺は「玉井家」の西側に建立されたもので、飛鳥寺と同様の百濟系式無子葉弁文端丸瓦と、豈浦寺と同様ではないかと思われる有稜線弁文の高句麗系式が出土している事等から、「蘇我氏勢力下の国家的管掌の結果建立された寺院である。」（<⑩>から引用）と述べた。そして、船橋廃寺が「飛鳥時代前期に、日本最古の大和飛鳥寺と前後して創立せられ、室町時代までも存続」していたと考え、『拾遺往生伝』沙門清海の伝を引く。そこには、「河内国玉井寺」という記載がある事より船橋廃寺を当て、「玉井家の管掌豪族の氏族寺院として建立された」寺であると述べられている。（玉井寺説）この後を受けて<⑪>では、船橋遺跡を含む一帯に「河内国府」を推定している。ここでは様々な考察の中から河内国の「前期国府」を「はさみ山遺跡」と想定し、船橋遺跡を大津道と南海道の交流路、大和川の水運といった立地条件から「後期国府」であると考える。更に、国府と街道との関係を重視し、「大津道に南面する、いわゆる『御門』を中心とする八町域というものを想定した場合に、船橋遺跡もすっぽりとおさまるというような」国府域の中に船橋廃寺が存在したと述べられている。（船橋遺跡即国府跡説後期国府論 注2）

<⑫>では、「船橋遺跡即国府跡説」の立場から考察を進め、<③>の考察で山本博氏が、礎石を持ち規格性に富む建物を寺院跡と推定した事に対し、藤井氏は、基壇部分が「礎石で、屋根には瓦葺きとする建物は、やはり大団の国府跡に通有的に造営された」建物だったと述べ、それをむしろ、政庁的な建物と考える。出土遺物の面からは、七世紀第Ⅳ四半期から八世紀の中頃までに位置する土師器、須恵器が多く、古瓦もやはり飛鳥時代から奈良時代に至るものであるから、船橋遺跡を河内国府と考えた場合、その存続期間は七世紀中頃から八世紀中頃までと推測する。そして、平安時代に入ると出土遺物が激減する事から河内国府が、国府台地に「二回あるいは三回遷国府した可能性が出てきた。」と述べて、「北条、船橋地区に造営された飛鳥時代～奈良時代前半を中心とする遺構を前期国府跡とみなし、奈良時代後半～平安時代の間は何らかの理由で国府地区に遷国府した結果、後期河内国府跡とみる案」と、「北条、船橋地区で飛鳥時代に創建された河内国府は奈良時代前半まで続き、次に奈良時代を中心とした時期には大井地区、平安時代には国府地区へと遷国府した」という二案を提示した。

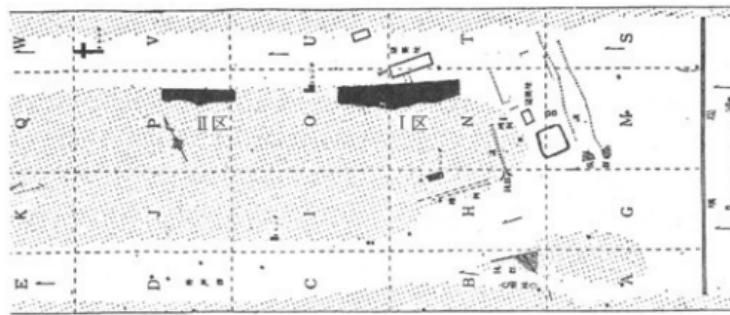
尚、藤井氏自身は、「北条、船橋、国府地区での今までの検出遺構、出土遺物、地名等を勘案」して、前案に分があると考えている。（船橋遺跡即国府跡説前期国府論）



1図

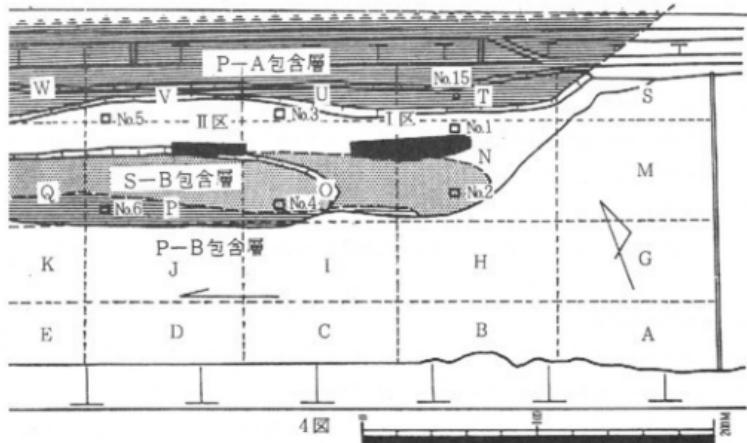


2図

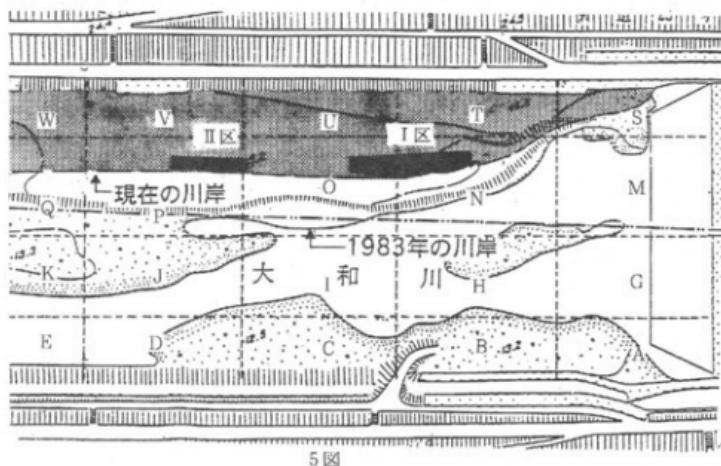


3図

図-3 船橋遺跡の変遷



4図



5図

- 注)
 1図(Ⅰ)の③
 2図(Ⅱ)のa
 3図(Ⅱ)のb
 4図(Ⅱ)のd
 5図柏原市教育委員会「船橋遺跡現地説明会資料」(1993.5.22.)
 以上より転載し加筆した。

図-4 船橋遺跡の変遷

以上、「諸説の展開」を述べたが、最後に現在提出されている諸説をまとめておく。

- 船橋遺跡に窯址は認められない。
- 「鉄銭司説」—船橋遺跡に「河内国鉄銭司」が存在する。
- 「船橋遺跡即飼香市説」—船橋廢寺（井上寺）が存在し、船橋遺跡が飼香市であった。
- 「船橋遺跡即国府跡説後期国府論」—船橋遺跡を河内国府（後期国府）と考え、その国府域に船橋廢寺が存在した。
- 「船橋遺跡即国府跡説前期国府論」—船橋遺跡を河内国府（前期国府）と考え、従来から述べられている船橋廢寺を否定し、その建物遺構を河内国府の政的建物だったとする。

2. 各報告書の成果

図-3・4は、河川の影響によって船橋遺跡河床地区にどのような変遷が観察されるか。又、本年度の調査区が従来の調査区の中で、どの様な位置を占めているのかを知る為に作成したものである。ただ、国面上で注意しなければならないのは、各図毎の縮尺に合わせると、それぞれ川幅等に大きなズレを生じ、遺跡の面積自体にも大きな誤差を生む結果となったので、各図毎の縮尺を無視し、南北の川幅を基にして縮尺を統一した。そして、便宜上、2図の地区割を用いて1・4・5図に各地区を割り振った。従って、各図毎の距離、地区割、黒塗りで示した調査区自体も本来の縮尺に合わせていない為正確ではないが、川の流れの変化や各遺構の存在、包含層の位置、又はI・II区のおおよその位置を確認して頂ければ、その目的は達成される。以上のことを考慮して各図毎の変遷を見れば、遺構面と共に包含層が徐々に侵食、後退し、やがて消滅していく様子が看取出来よう。本年度の調査もI区において、激しい擾乱が行われているが、その理由は、2・3図から大和川の分流によって破壊された事がわかる。

a	1958年	大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究（Ⅰ）』（『船橋（Ⅰ、Ⅱ合冊）』所収、平安学園考古クラブ、昭和47年）
b	1962年	大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究（Ⅱ）』（同上）
c	1972年	「船橋遺跡井戸発掘調査概要」（『大阪府文化財調査速報、第・春・仙』第21号、大阪府教育委員会）
d	1976年	『大和川環境整備事業柏原地区高水敷修正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書』（財團法人大阪文化財センター）
e	1980年	『船橋遺跡発掘調査概要－藤井寺市船橋、柏原市古町所在－』（大阪府教育委員会）
f	1993年	『寝屋川南部流域下水道事業に伴う池島条里遺構他発掘調査概要』（大阪府教育委員会）

表-1 研究資料（II）

調査研究では、上記したものが主な報告書であるが、周知の通り船橋遺跡は柏原市と藤井寺市に跨る遺跡なので、その全てを述べる事は既に限界がある。よって、ここでは本年度の調査成果と過去の調査成果を結び付ける目的から、船橋遺跡でも河床地区と行政区域の柏原市側に

ついて述べる事とする。

<研究資料（Ⅱ）のa>（以下、記号で記す。）では、船橋遺跡河床地区において、初めてA～Xの24地区に地区割が行われ、各種遺構の分布が知らされた。それは、「GH、MN、ST地区内に寺址の存す」事、「A～D、G～J、M地区に井戸遺構の分布する」事で、この調査では特にB地区・V地区が発掘の対象に上げられた。B地区では「多数の杭群からなる遺構」があり、その付近に「黒色の腐食土が15m四方」に広がっていたという。調査結果からすると、この包含層は「当初溝様の落込みがあって、これに下層が堆積し、次に杭が打ち込まれた後、上層が堆積した」と考えられ、「杭列が土留めの役割を果たした。」と述べられている。しかし、断面の観察からは、「砂層の堆積状態、および遺物の出土状況から判断して、下層も本来二次的堆積物を含む層であって、上層はさらに下層上部を搅乱して形成された擾乱層」とする。V地区については、1で述べた通りなので省略する。

では、古墳時代の遺物を中心に船橋遺跡の編年作業が行われた。その基になったのが、O、K、I、H、Vの各地区において実施された試掘調査であった。O地区的トレンチでは、「遺構の存在は認められず、主として土師器、須恵器を含む包含層が5層、厚さ1.3m前後にわたって堆積していることが確認」され、「純粋な包含層」である事がわかった。しかし、本年度の調査からすれば、遺構面は地表からおよそ80～100cmで検出されており、包含層自体もO地区のように「1.3m前後」に渡るものではない。従って、O地区的包含層が「純粋な包含層」であるならば、何らかの遺構内を調査した事になりトレンチ内から遺構の存在が認められなかつたという事も理解出来る。K地区的包含層は河砂層、礫層に統いて「深さ約1mのピット状の落ち込み」があり、上層では少数の須恵器と多数の土師器を、下層では土師器のみが検出された。I地区は、土師器のみを採集した。H地区では、周囲に遺構が認められるのでトレンチ内にも「何らかの遺構が存在する」と予想されていたが、「単なる包含層であることが確認」され、包含層自体も「自然層位的な差異は認められなかった」と述べられている。しかし、「上下の遺物群には明瞭な形態上の差異が認められ、上群は須恵器、土師器、織錦式土器よりなり、下群は土師器のみから」形成されていたという。V地区では、最上層に「比較的少量の弥生式土器と土師器」が、その下層には、炭化物と共に「晩期繩文式土器」が最も多く発見されている。

以上<a>が、遺物中心に考察されたものに対して、<研究資料（Ⅰ）の⑥>は、各種遺構を中心考察されたものである。又、それは、大阪府教育委員会が昭和31年から35年に継続して行った調査の総括である。

主な遺構について述べると、まず、昭和32年度の調査は寺院跡と予想されるM・N地区に対して行われた。かつて存在したといわれる礫石群（1図参照）は、「調査時にはすでに河流によって侵蝕されて痕跡をとどめていなかった。しかし、調査の結果、埠を二列にならべて作っ

た（中略）溝状遺構が3mにわたって検出され、ここにある種の建物の存在する事が確認された。H地区では「下層から東西に100mわたって連なる二重の列柵が検出され、M地区西部からN地区東部にかけて、一辺13mの方形の溝をめぐらした建物の地形とみられるものや、掘立柱の建物四戸以上の存在した」事が確認されたという。この二つの調査成果から「礎石を使用した遺構の作られる以前に同じ場所に、柵をめぐらした大規模な遺構があり、その内部に掘立柱の建物が多数に建造されていたことが」判明した。昭和33年度の調査では、「北部のT地区において、桁行九間、梁間三間の建物の存在」が明らかにされ、「この建物の平面形が、かつて法隆寺東院の地下で検出された斑鳩宮の掘立柱の建物と類似することは、とくに注目すべき点だった」と坪井氏は述べている。又、S地区では、「四壁に寺院の扉を転用した一枚板を用いた井戸遺構」が検出された。

調査研究の上からすると過去に調査された遺構が、本年度に再度調査されるという興味深い箇所もあった。それは、<c>の事で、ここで調査された井戸遺構は、本年度調査区Ⅰ区の（井戸ー1）（井戸ー2）に相当する。<c>で言う所の「西側の井戸」＝（井戸ー2）は、当時、台風の余波を受けた出水により「圧迫されて井戸枠が扁平になり、元来の構造をとどめて」いなかったという。「東側の井戸」＝（井戸ー1）は、「遺構の上面および井戸枠内から屋瓦が出土」しており、掘方の範囲内に径10数cmの4本柱の痕跡をとどめていた事から「折損した上端の柱には、長さ約20cm角枘を造り出し、桁をうけることを期しているようである。」と述べられている。そして、「東側の井戸」が、「瓦屋根をもつ稀有な遺例である」とし、井戸枠内から出土した遺物によって「室町時代でも西暦15世紀のうちにその使用年代をもとめることが可能」であると考察されている。本年度の調査では両井戸とも完掘され、その実態が判明し、（井戸ー1）の掘方内からは4本柱の内1本が確認された。

<d>は、（4図参照）「従来の調査及び遺物の表面採集で確認されている河内橋以東に於ける包含層の正確な把握（中略）と、河内橋以西に於ける遺跡の拡がり」を確認する為、調査が行われた。特に、Ⅰ・Ⅱ区と接するNo.1～No.6、No.15の各トレンチを見て行くと、「No.1トレーニチ、No.3トレーニチ、No.5トレーニチを設定した湿地帯は、河水の一時的な増水による浸蝕を受けて遺物包含層及び遺構は完全に失われてしまい、極小量検出した遺物も全て第2次堆積の砂層中に含まれたもの」であった。No.2、4、6の各トレンチは中洲状の微高地に位置しており、No.6のトレーニチでは「破壊からまぬがれた包含層をわずかに確認したのみで、その他のトレーニチでは河水の増水及び後世の人為的な破壊等により、すでにプライマリーな包含層は失なわれていることが判明した。ただし、この中洲状微高地の現河流に面した崖面にはNo.4トレーニチの東側からNo.6トレーニチの西側の間にかけてプライマリーな包含層の分布が観察されることから単にNo.6トレーニチ周辺のみではなく、No.6トレーニチを中心細長くプライマリーな包含層が残っている」事が確認された。No.15トレーニチは、「プライマリーな包含層を検出し（中

略) 北側は当時存在したであろう船橋遺跡の集落が、そのままの形で残っている可能性を示唆している」と述べ、遺物においても「瓦と奈良時代の土器が圧倒的に多いことは、やはり船橋廃寺跡に一番近いトレンチである為」と推測している。

4図を見る限り、本年度の調査区は「S-B包含層」(注3)に含まれており、「一概に2次堆積物であることのみで捨て去ることは出来ない」という中西氏の見解は、今回の発掘調査によって証明された。しかし、その「S-B包含層」「P-B包含層」も現在では、かなり消滅している事がわかる。

<e>は、現在の柏原警察署敷地内で実施された調査で、I区から北へおよそ150mの地点に位置しており、河床地区外となっている。ここで調査成果は、まず船橋遺跡が「旧大和川及び石川によって形成された自然堤防上に存在」する遺跡で、「沖積地の微高地」という立地から「洪水に対して不安定な立地基盤にあった」事がわかり、庄内式土器が大量に検出された事であった。奈良時代の遺構面からは、磁北を指し「桁間が三間、もしくはそれ以上で、梁間は不明の建物遺構」が検出された。そこからは、<研究資料(I)>にも見える『玉井家』『大家』の墨書き器に統いて、7世紀末~8世紀前半の時期を示す蓋杯に「北家」「土」と記された墨書き器が検出された。この事から西口氏は「あたかもその立地と建物の配置に合致するかの如くであり、いよいよその建物址の性格なり機構なりを明らかにするまでの可能性」を秘めていると見解を述べている。そして、<d>のNo.15トレンチで述べられていたように、「P-A包含層が」実際に北側へ広がっている事が、この調査で明らかにされた。

<f>の調査区も河床地区外で、柏原市上市一丁目に所在する。「第一調査区」は、船橋遺跡の東端に接し「つけ替え以前の大和川の河川堆積地の中央」に設定された為、遺跡の痕跡はないと予想されていた。しかし、包含層は上層に奈良~平安時代にかけての遺物を、中層は古墳時代後期の遺物を含む二次堆積層が見られ、その下層からは、一括遺物として「積極的に評価できる」庄内式期の遺物が大量に検出された。「第二調査区」も同じく「つけ替え以前の大和川による河川堆積地」に位置し、「第一調査区」の南150mに設定される。包含層は「第一調査区」に見られる2次堆積層の一つであって、積極的な調査成果は得られなかった。ただ、注目される遺物に韓式系土器1点を紹介している。

従来、船橋遺跡の東限は確認されていなかったが、<f>の「第一調査区」から一括遺物と考えられる大量の庄内式土器が出土している事より、少なくともこの時期には、旧大和川のすぐ西側付近にまで遺跡が広がっていた事を窺わせる。しかも、庄内式土器の検出深度から言えば、本年度の調査でおよそT.P.15.5~16.0m、<e>では、およそT.P.13.0~13.5m、<f>の「第一調査区」では、およそT.P.13.0mである。この事からすると、河床地区が丘陵上の張り出し部に当たり、北、東へ行くほど順次下っていく事が理解出来る。そして、他の遺物と比較してもこの三地点で大量の庄内式土器が検出されていることは、船橋遺跡における庄内式期の

集落像を考える上で興味深い。

- 最後に、各報告書の成果と本年度の調査成果から言える事をまとめておく。
- I区における、搅乱は大和川の分流によって破壊された事がわかった。
 - で述べられている、O地区的トレンチは、何らかの遺構内を調査したと考えられ、本年度の調査結果から、1.3m前後に及ぶ包含層は、遺構以外に存在しない。
 - <研究資料（I）の⑥>から、「礎石を使用した遺構の作られる以前に同じ場所に、柵をめぐらした大規模な遺構があり、その内部に掘立柱の建物が多数に建造されていたことが」判明した。
 - <c>で調査された二ヶ所の井戸遺構は、本年度の調査で完掘されその実態が明らかとなつたので復元的考察が容易になった。
 - <d>で述べられている「S-B包含層」は、「一概に2次堆積物であることのみで捨て去ることは出来ない」層である事が本年度の調査で証明された。又、No.15トレンチで述べられている「P-A包含層」は、<e>の調査結果によって実際に北側へ広がっている事が確認された。
 - <e>では、船橋遺跡が旧大和川及び石川によって形成された沖積地で、微高地でもあった事から洪水に対して不安定な立地基盤にあった事が判明した。
 - <e><f>の調査結果から、河床地区以外でも庄内式土器が大量に出土する事がわかり、庄内式期における集落の広がりと、その東限が推定出来た。

注）1. 図-3の3図を見れば、S、M区に渡る溝の事であろう。

2. 船橋遺跡即国府跡説の中でも二通りの説く研究資料（I）の⑩、⑫>があるので、末尾に「論」を付し区別した。
3. 「S-B包含層」は、「層位的には乱れを示しているが、かなりまとまった遺物が検出されており、これらの遺物群を一概に2次堆積物であることのみで捨て去ることは出来ない。」と述べられている。
「P-A包含層」は、「プライマリーな包含層」で北側に遺跡が広がっている事を示唆している。
「P-B包含層」は、「中洲状微高地の現河流に面した崖面に（中略）No. 6 トレンチを中心に細長くプライマリーな包含層が残っている。」と述べられている。

3. その他の参考文献

- 藤井直正「飾紋に『西寺』の文字を配する端丸瓦—河内船橋廢寺跡発見の遺例—」（『史述と美術』第25輯ノ9、1955年9月）

- 藤井直正「陶質円面硯資料——河内船橋・攝津杉本町採集——」（『古代学研究』第13号、1956年）
- 北野耕平「船橋遺跡出土の歴史時代土器」（『古代学研究』第15・16号、1956年）
- 森浩一「大和川々底出土の古銭」（同上）
- 森浩一「大阪府船橋遺跡出土の繩文土器」（『古代学研究』第18号、1958年1月）
- 森浩一「大阪府大和川々底出土の石器」（『古代学研究』第19号、1958年8月）
- 辻合喜代太郎「船橋遺跡出土の梯子及び木器について」（『河内文化』第9号、1963年5月）
- 辻合喜代太郎「大和川船橋遺跡出土土器の図様」（『史迹と美術』第34輯ノ5、1964年）
- 辻合喜代太郎「大和川遺跡出土の陶硯」（『河内文化』第11号、1964年5月）
- 辻合喜代太郎「大和川遺跡出土土器の鋸齒文と記号」（『河内文化』第15号、1966年7月）
- 森浩一「大阪府船橋出土の弥生式土器の絵画」（『古代学研究』第45号、1966年）
- 佐原真『弥生式土器集成』本編2（東京堂出版、1968年）
- 山尾富美男「船橋遺跡の礎石」（『大阪文化誌』第1巻、1974年1月）
- 塩見勇、福岡澄男「柏原市船橋遺跡採集の石器」（『大阪文化誌』第10巻、1977年）
- 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1982年度』（1983年3月）
- 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1983年度』（1984年3月）
- 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1985年度』（1986年3月）
- 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1986年度』（1987年3月）
- 大阪府立泉北考古資料館『船橋遺跡出土優品展』（泉北考古資料館だよりNo.30、1987年8月）
- 大阪府立弥生文化博物館図録『船橋展——多彩なる遺物の群像——』（大阪府立弥生文化博物館、1992年2月）

（松尾）

第3章 I区の調査

1. 概要

I区は、調査対象地の東側、すなわち大和川の右岸上流部に設定した調査区である。調査区は、長さ60m、幅が8~14mを測り、西端で最も幅が狭く、中央付近で最も幅が広くなる。方向は、東南東から西北西を指す細長い調査区である。

調査区南側は、過去の増水のたびに流水によって抉られ、2m前後の崖面を呈している。この崖面から多量の遺物が採集され、一部では遺構も確認され、今日に至っている。近年では、年間1~2mのペースで河岸が水流によって削られている。すなわち、この崖面が後退しているのである。

調査区北東部には、大きく、深い掻乱がみられる。掻乱土には現代の品物が含まれており、その時期が新しいことがわかる。しかし、この部分は、過去に流路の一部であった位置にあたり、掻乱が流路に平行して長くのびていること、また、その崖面に人工的な掘削の状況が認められないことから、かつての流路の一部であると判断される。埋土の状況から、数回の増水によって抉られ、砂が運び込まれ、その後に周囲の土砂によって埋められ、整地されたものと考えられる。

以上のような状況から判断すると、I区周辺では、北側が過去の流水によって、そして南側が現在の流水によって大きく損なわれており、今回の調査地部分のみが、細長く残存したものと判断される。これまで本格的な調査が実施されることなく、失われた部分の大きさを考えると、胸が痛む思いである。

現地表面の標高は、T.P.16~16.6mを測る。西端で最も高く、東端で最も低くなる。この面が現在の河岸面となり、通常の大和川流水面は、T.P.14m前後である。遺構は黄褐色粘質土上面で確認されたが、その識別には苦慮した。そのため、黄褐色粘質土上層をやや掘り下げた後に初めて確認できた遺構も少なくなかった。遺構は弥生時代後期から奈良時代までのものが確認され、崖面に位置する井戸ー1・2のみ中・近世の遺構である。黄褐色粘質土上層からは、弥生時代前~中期の遺物も少量出土しているが、顕著な遺構は確認できなかった。II区の状況から考えると、更にこの下層に縄文時代晚期の土層が存在すると予想されるが、部分的な掘り下げではこの層は確認できず、また、縄文時代の遺物が全く出土していないことから、縄文時代の包含層はI区付近には及んでいないと考えられる。更に、今回の調査結果から、縄文時代晚期の遺物と弥生時代前期の遺物が共存しないことが確認できた。

I区では、遺構面直上まで現代の埋土で覆われており、遺構面上には流路に平行する多数の細い流水跡が確認され、過去の増水の激しさをうかがわせるものである。

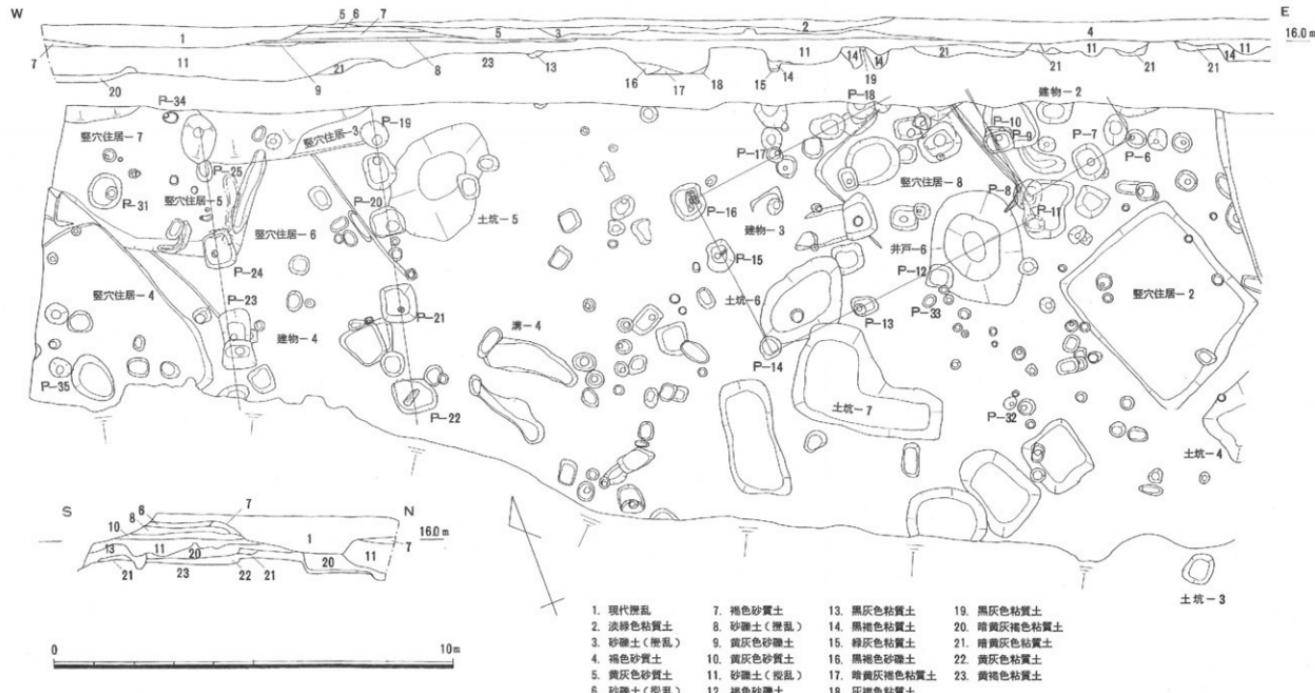


図-5 I区遺構平面図・土層図①

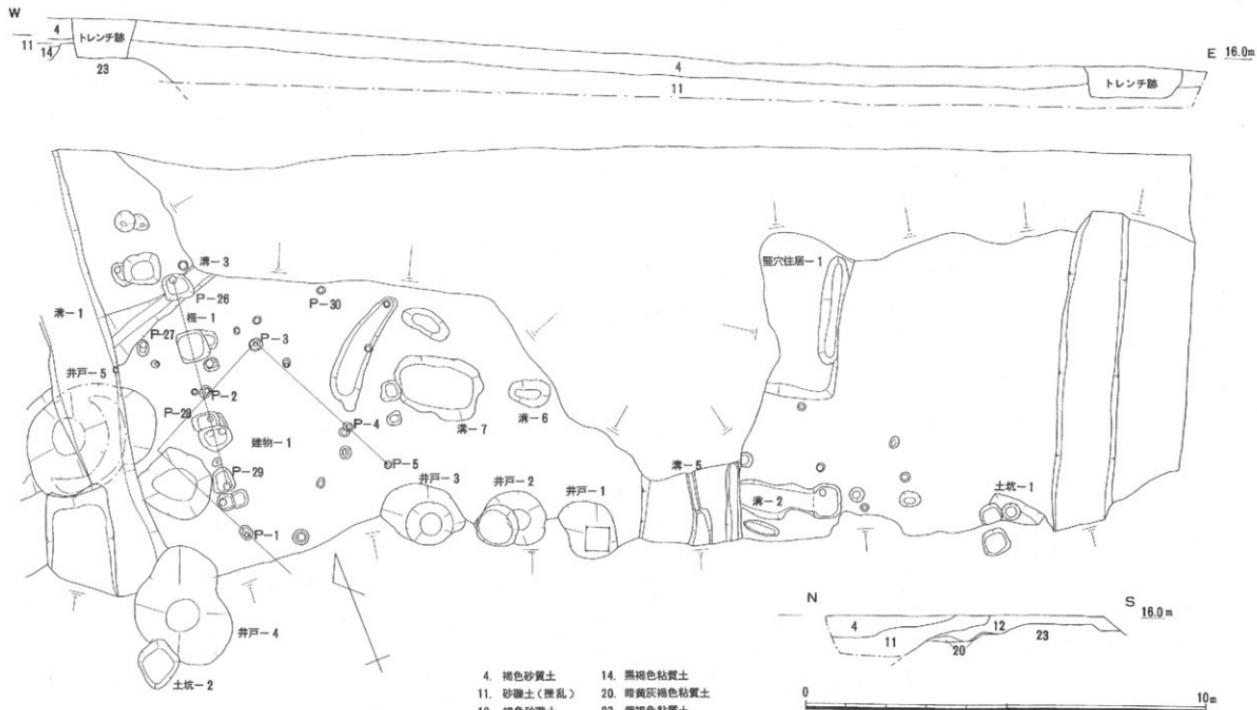


図 - 6 I 区遺構平面図・土層図②

2. 遺構（図-5・6）

遺構は、堅穴住居8軒、掘立柱建物4棟、柵1列、これ以外の柱穴と考えられるピット209個、井戸6基、土坑19基、溝17条が確認された。前述のように遺構の判別が困難であったことと、過去の増水時に遺構面がかなり削られていることから、遺構の残存状況は良好とは言い難い。遺構の時期は、弥生時代後期、弥生時代末から古墳時代初頭の庄内式土器を中心とした時期（以下庄内期）、古墳時代中～後期、飛鳥～奈良時代、中～近世の5時期に大別される。以下、この順に時期別に遺構の記述をすすめる。

①弥生時代後期

確実に弥生時代後期と確認できる遺構は溝-4のみである。溝-4からは、長頸壺や器台（図25-11～13）などが出土している。長さは240cm、幅は80cmを測り、深さは最も深い部分で60cm前後となる断面U字状の溝である。これ以外にも弥生時代の遺物のみを出土する溝が3条確認できる（溝-5～7）が、遺物量が少なく、断定できるものではない。また、ピット-30から梗の底部（図25-14）が出土しており、これ以外にも弥生土器のみを出土するピットが4個みられるが、いずれも弥生時代の遺構と断定できるものではない。

②庄内期

庄内期の遺構としては、堅穴住居-3～8、井戸-3～6、溝-2・3がみられ、これ以外にピット-31～33などからも庄内期の遺物が出土しているが、これらのピットが庄内期の遺構であるかどうかは断定しかねる。

堅穴住居-3

I区北西部で検出され、調査区外へ続いている。長さ196cm以上にわたって直線的にのびる壁面を確認できているのみで、他の部分は不明である。しかし、この堅穴住居を切っている攪乱の肩部が、西側へ直線的に続いているので、本来の壁面に相当する部分と考えられる。東西の壁面はピットや攪乱で削られており、不明である。深さは8cmを残すのみ。埋土は暗黃灰色粘質土、主軸はN-81°-Wである。

出土遺物は、二重口縁の壺・鉢（図27-1・2）を始め、庄内期の土師器が出土している。切り合いから、堅穴住居-5～7より新しい住居である。

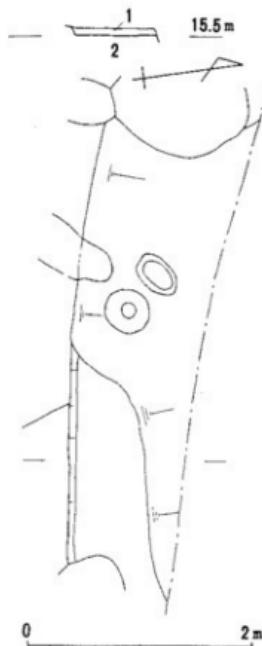


図-7 堅穴住居-3

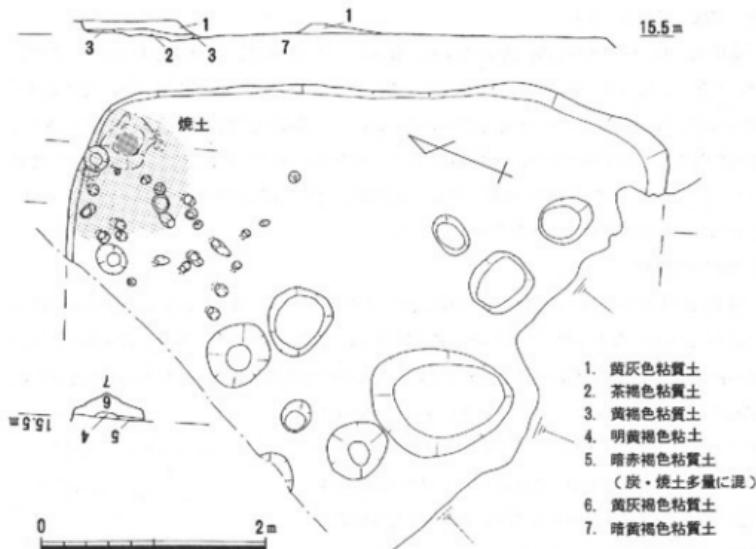


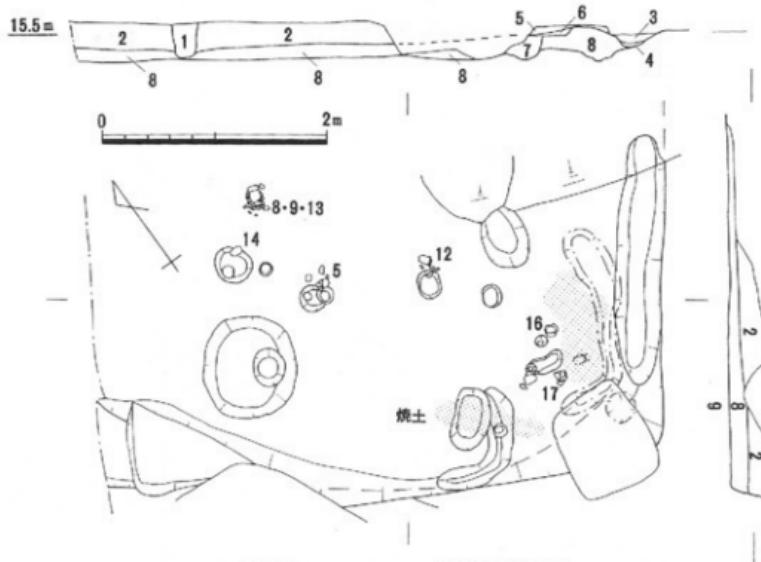
図-8 壺穴住居-4

壺穴住居-4

調査地南西部に位置し、一部は調査区外へ、また一部は過去の流水によって削られている。規模は527cm×160cm以上を測る隅丸方形平面を呈する。深さは10cm前後を残すにすぎない。壺穴住居内にはピットが数個認められるが、壺穴住居に伴うと考えられるピットは確認できなかつた。壺穴住居の北東部には焼土がかなり認められた。(図中網目部分)そして、北東隅部には良質の明黄褐色粘土(第4層・濃い網目部分)が散在しており、カマド状の施設が存在したものと推定される。明黄褐色粘土は、一辺40~50cm、深さ22cmのピット上層にみられる。除湿のためのピットであろうか。また、焼土の周囲には直径5cm前後の杭を打ち込んだ跡が確認できる。大半は斜めに杭が打ち込まれたものであり、その埋土にも焼土が含まれている。カマド状の施設に関連するものであろうか。

埋土は黄灰色粘質土を中心とし、小型の器台(図27-3)を始め庄内期の遺物が出土している。壺穴住居-4が埋没した上層には厚い包含層がみられ、庄内~古墳時代後期の遺物が出土している。また、切り合ひ関係から、壺穴住居-5・7より新しいことがわかる。

主軸はN-21°-W。おそらく南北方向に長い壺穴住居であろう。



- | | | |
|------------|------------------|------------|
| 1. 黄黒褐色粘質土 | 4. 茶褐色粘質土 | 7. 黄灰褐色粘質土 |
| 2. 暗黄灰色粘質土 | 5. 灰色粘質土 | 8. 暗黄褐色粘質土 |
| 3. 黄灰色粘質土 | 6. 赤褐色粘質土(燒土・炭混) | 9. 黄褐色粘質土 |

図-9 壺穴住居-5・7

壺穴住居-5

調査区北西部に位置する壺穴住居であり、壺穴住居-7と重複している。検出状況から考えると、壺穴住居-7を拡張したものではないかと思える。規模は東西500cm以上、南北300cm以上を測る。壺穴住居-7の埋土第8層暗黄褐色粘質土上面を床面とし、深さは最も良好な部分で26cmを測る。東辺には壁溝が長さ223cmにわたって確認できる。幅は40cm以下、深さは15cm以下である。

壁溝の西側には、L字状に広がる焼土がみられる。壺穴住居-4と同様に、床面隅角部にカマド状の施設が存在したのであろう。

埋土は暗黄灰色粘質土であり、比較的良好な遺物が出土している。直口壺・甕・鉢・小型丸底壺(図27-4~17)など、いずれも庄内期の遺物であり、その大半は床面から出土している。

主軸はN-63°-W。切り合い関係から、壺穴住居-5・6より新しく、壺穴住居-3・4より古いことがわかる。

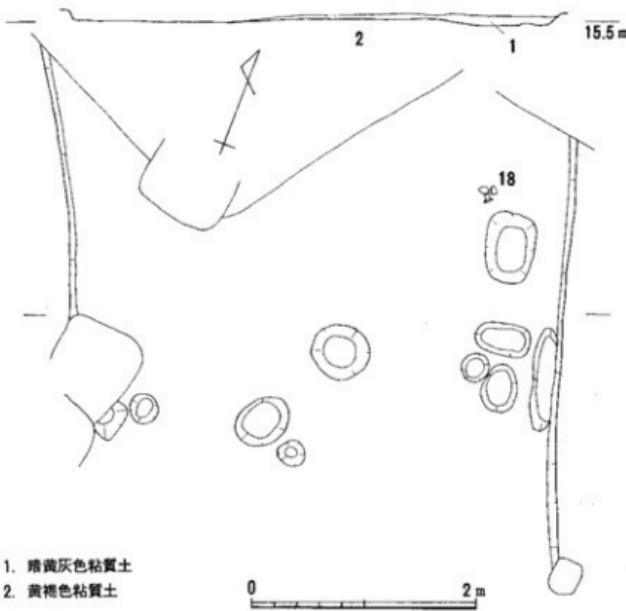


図-10 壺穴住居-6

壺穴住居-6

壺穴住居-3・5・7に切られる壺穴住居であり、残存状況は悪い。東西440cm～460cm、南北460cm以上を測り、深さは良好な部分でも10cmを残すにすぎない。埋土は暗黄灰色粘質土。高杯の脚部（図27-18）などが出土しているが、遺物量は少ない。主軸はN-20°-W。

壺穴住居-7

壺穴住居-5下層に位置する。東西450cm以上、南北250cm以上を測り、深さは最も良好な部分で30cmを残す。東辺から南辺にかけては、幅30cm前後、深さ5cm前後の壁溝があげぐる。

埋土は暗黄褐色粘質土。少量の遺物が出土しているのみである。

主軸はN-44°-Wと推定されるが、平面形がやや不整形となるため確かなものではない。

壺穴住居-6より新しく、壺穴住居-3・4・7より古いことが切り合い関係から確認できる。

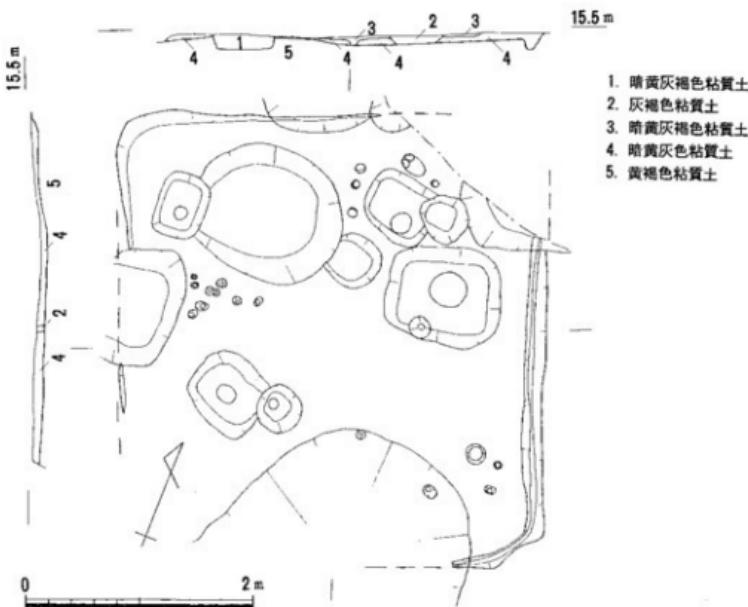


図-11 壺穴住居-8

壺穴住居-8

調査区中央北寄りに位置し、北東隅部は調査区外へ続いている。規模は東西380cm、南北400cmの正方形に近い隅丸方形平面を呈する。南西部は後世に削平されて不明。深さは10cm前後にすぎない。東辺から南辺にかけては幅15cm、深さ15cm前後を測る壁溝がめぐっている。この壁溝は、本来四辺をめぐっていたものと思われる。住居に伴う柱穴は確認できていない。

埋土は暗黄灰色粘質土、高杯杯部、砾石（図27-19・20）など少量の遺物が出土しているのみで時期は確認できない。主軸はN-19°-Wとなり、壺穴住居-2と主軸が近似し、近接することから、庄内期ではなく、古墳時代中～後期にまで時期が下る可能性も十分に考えられる。

壺穴住居-3～7は、その切り合い関係から、壺穴住居-6、壺穴住居-7、壺穴住居-5、壺穴住居-3または4の順に建てられたと考えられる。そして、その時期はいずれも庄内期、その中でも比較的新しい時期に位置づけることができ、短期間のうちに次々と建て替えられたものと考えられる。

井戸-3

調査区の東側、井戸-1・2の西側に接して位置する。流水による崩壊面に位置し、南側半分は流水によって半壊している。上面では直径200cm前後の円形平面を呈すると考えられ、深さは180cmを測る。

最下層には、青灰色粘土、黄灰色砂質土が堆積し、その上面から壺・甕（図28-1～4）が出土している。3・4の甕はほぼ完形で、3の体部には穿孔がみられる。

その上層には第5～7層が10cm前後の厚さで堆積し、第5層上面、すなわち第3層灰色シルトから多量の遺物が出土している。遺物出土状況図は第3層中位と第5層上面の2面を図示したが、この両面で多くの遺物が接合でき、層位的には第3層出土遺物として一括できる。第3層からは、壺・甕・鉢・器台・蓋（図28・29-5～28）などが出土している。第3層出土遺物のはうが、第8層上面出土遺物より若干新しい傾向がみられる。

井戸-4

井戸-3の西側約6mに位置する直径210cm前後の円形平面を呈する井戸である。ほぼ垂直に掘り込まれた後、二段掘り状に更に掘り込まれている。やはり流水による崩壊面に位置するため、南側上半部が半壊している。上面はT.P.15.8mを測り、底はT.P.13.1mを測る。すなわち270cmの深さを有することになる。

埋土は、最下層に第9層青褐色粘質土がみられ、甕・直口壺（図30-1～4）などが出土している。

その上層には第8～6層が順次堆積し、第6層を再度掘り込んでいることが土層から確認できる。その際には、西側の壁面を緩やかに、東側の壁面を垂直に近く

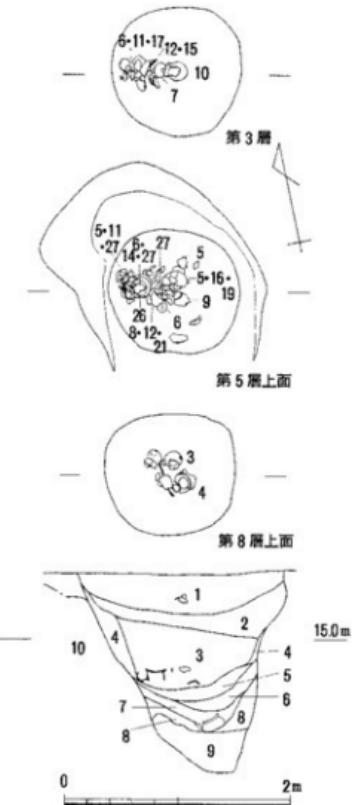
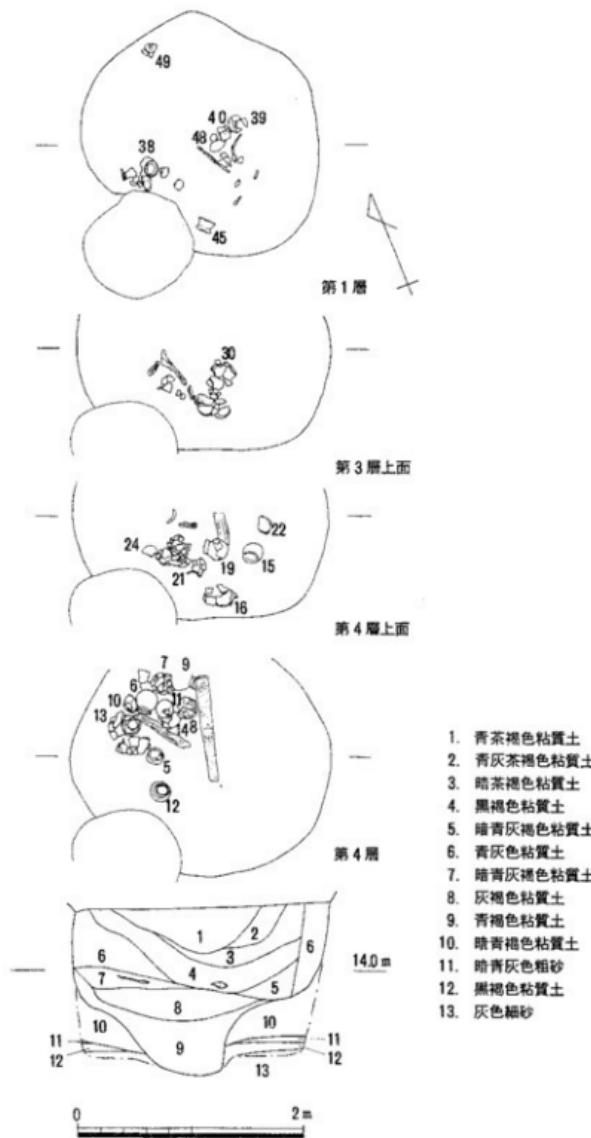


図-12 井戸-3



1. 青茶褐色粘質土
2. 青灰茶褐色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土
4. 黑褐色粘質土
5. 暗青灰褐色粘質土
6. 青灰色粘質土
7. 暗青灰褐色粘質土
8. 灰褐色粘質土
9. 青褐色粘質土
10. 暗青褐色粘質土
11. 暗青灰色粗砂
12. 黑褐色粘質土
13. 灰色細砂

図-13 井戸-4

掘り込んでいる。その後、第5～1層が順次堆積していくが、この間からは多量の遺物が出土している。

第4層からは、甕・直口壺・二重口縁壺（図30－5～10、図31－11～14）などが板材と共に出土しており、出土状況から一括遺物として扱うことのできるものである。

第4層上面、および第3層からは、甕・二重口縁壺・鉢・小型丸底壺・器台（図31－15～18、図32－19～27）などが出土している。第3層上面、および第2層からは、甕・小型丸底壺（図32－28～31）などが出土している。第1層からは、甕・直口壺・二重口縁壺・小型丸底壺・高杯（図33－32～49）などが出土している。

甕を中心に層位的にみていくと、第9層はV様式系の甕を一部含み、庄内甕を中心とする。第4層は庄内甕を中心とするが、7のように体部が球形化し、内底面に指頭痕の残る甕もみられる。また、吉備系の甕（8）が併出している。第3層は庄内甕（15）もみられるが、新しい傾向のものであり、口縁部や体部の形態からは、布留系の甕が多くなる。また、撒入品と考えられるV様式系の甕（22）、山陰系と考えられる甕（23）が併出している。第2層は布留系の甕が多くなり、庄内甕も含んでいる。第1層は残存状態の良好な甕は布留系甕によって構成され、庄内甕は小片に限られる。41～44は撒入土器であろう。

その他の器種も、やはり上層にくらべて新しい傾向を示しており、層位的な前後関係を認めてよいであろう。庄内期の新しい時期の井戸と考えられる。

井戸－5

井戸－5は井戸－4の北側4mに位置し、上面は古墳時代の土坑、および飛鳥時代の溝－1によって削平されている。上面での平面形は円形を呈し、直径は320cm前後を測る。壁面は一部でオーバーハングしており、底面は二段掘りの形態を呈する。暗黄褐色粘質土上面から握り込まれているが、下層では暗青灰色シルト、黒褐色粘質土、灰色細砂と続き、灰色細砂から湧水が認められる点は井戸－4と同じである。底面の標高はT.P.13.3m、井戸－4底面より約20cm高い。井戸－5検出面の標高はT.P.15.9mであり、深さは260cmを測る。

埋土は最下層が無遺物の第6層黒灰色砂質土であり、第5層青灰色粘土からは、甕・直口壺・二重口縁壺・鉢・器台・高杯（図34－1～16、図35－17～34）など多量の遺物が出土している。その上層の第4層暗灰褐色粘質土、および第3層灰褐色粘質土からは、甕・直口壺・二重口縁壺・鉢・器台（図36－35～51）などが出土している。また、第3層下部から大形の樹木が出土している。一部には加工を施したような部分もみられるが、自然木か否か判断がつかない。形状からは、船の船首の未製品のようにも思われる。一端は折られて破損している。

第3層上面からは、多量の遺物が一括で出土している。甕・直口壺・小型丸底壺・高杯・鉢（図37－52～62）などがみられる。

第2層黄褐色粘質土からは、甕・直口壺・鉢・器台・高杯（図38－63～85）などが出土して

いる。

第1層暗黄灰色粘質土からは、甕・直口甕・二重口縁甕・鉢・器台・高杯（図39-86～106、図40-107～122）などが出土している。

甕を中心に層位的にみていくと、第9層ではV様式系の甕を主体とし、庄内系の甕を一部伴っている。第3・4層でもこの傾向は変わらないが、内面にヘラケズリを施す甕が主体となってくる。第2層でもV様式系の甕が認められるが、庄内系の甕が多くなり、典型的な庄内甕（71・72）もみられるようになる。第1層にもV様式系の甕は認められるが、典型的な庄内甕が半数近くを占めるようになる。また、搬入土器（100～106）が多くみられる。このように、下層では崖かであった庄内甕が上層へいくにつれてその比率を増していくことを指摘できる。

井戸-5は、庄内期の古い段階に位置付けることができる。

井戸-6

井戸-5の北西約10mに位置する。上面では長径300cm、短径230cmの楕円形平面を呈し、深さ80cmまでは緩やかな傾斜で下った後、オーバーハングし、直径100cm前後の円形を呈する。最下層の第8層青灰色シルトは無遺物であり、第7層暗灰色粘土からは出土状況図に示したように良好な状況で一括の遺物が出土している。遺物は大半が甕（図41-1～6、図42-7～11）であり、完形品が多いことから、意識的に甕のみを埋納したものと考えられる。第6層黒灰色粘土からは、あまり遺物が出土していない。

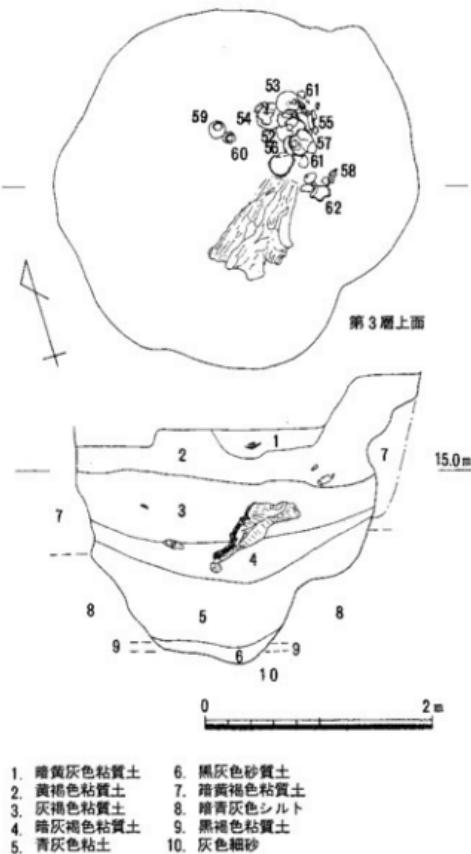


図-14 井戸-5

第6層の堆積後、上部のみを拡張していることも考えられる。第1～5層からは遺物の出土をみるが、小片が多く、良好な遺物は少ない。甕・鉢・高杯（図42-12～17）などが出土している。

上・下層とともに、庄内系の甕と布留系の甕が約半数ずつを占める。庄内系の甕は、内面頭部の屈曲が緩やかになり、内底面に指頭痕を残す新しい段階のものである。5・6・14などは布留式土器と考えてもよいであろう。また、良好な残存状態を示す吉備系の甕(7)が併出している。

井戸-6は、庄内期の新しい段階から布留期の古い段階にかけての時期と考えられる。

三一

調査区東部に位置する溝で、南東から北西方向に流れていたようであるが

西端は搅乱によって切られている。長さ120cm以上、幅30cm、深さは10cm前後である。遺物は、少量の庄内期の土器が出土している。埋土は黄灰色粘土で、断面U字状を呈する。

- 33 -

調査区中央部に位置する東西方向の溝であり、底面は西から東へと下がっている。東側は搅乱に、西側は溝-1に切られており、その全形は不明であるが、東端では28cmの幅が西端では60cmになっていること、その延長上西側に溝-3の続きが認められないことから考えると、井戸-5に取り付いていた可能性が高いのではないかと考える。

現存長170cm、西端での深さ31cm、東端での深さ45cmを測り、西端と東端の底面比高差は45cmである。井戸一五のオーバーフローした水を排水するための溝ではないかと考えられる。埋土は、下層から淡黒褐色粘質土、暗黄灰色粘質土、黒褐色粘質土、黄灰色粘質土となり、流水を示すような土層はみられず、いずれも自然堆積と考えられる。断面は逆台形状を呈する。埋土から弥生土器の壺口縁部(図25-9)ほか少量の弥生土器と、多数の庄内期の土器が出土しているが、良好な遺物は少ない。

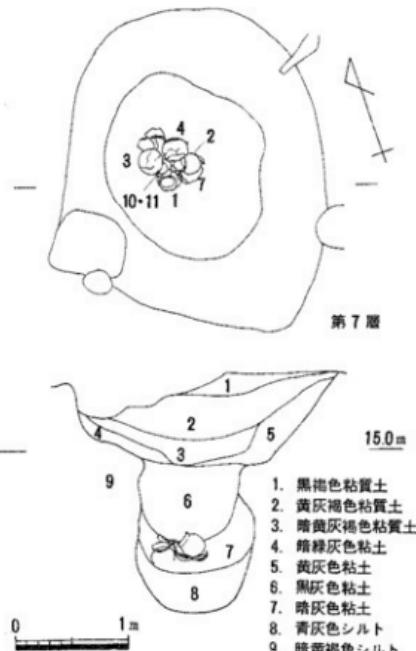


圖-15 井貢-6

③古墳時代中～後期

古墳時代中～後期の遺構として、竪穴住居2軒、掘立柱建物3棟、土坑7基、溝5条などのほか、多数のピットが検出されている。この中で、主要な遺構について、以下に紹介する。

竪穴住居-1

調査区東部に位置し、北側と西側は搅乱で切られており、全容は不明である。東辺は長さ180cm以上、南辺は長さ90cm以上を測る。床面東辺には、幅25cm前後、長さ135cmの壁溝がみられる。深さは最も良好な部分で23cmを測る。埋土は暗黄褐色粘質土、弥生土器、土師器、須恵器が出土しているが、いずれも小片であり、時期の確定はできない。主軸はN-27°-Eである。

竪穴住居-2

調査区ほぼ中央に位置し、平面形態がほぼ確認できた唯一の竪穴住居である。長辺430cm、短辺360cmを測るが、南東部のみやや内側へ入り込んでおり、やや不整形な隅丸長方形平面を呈する。深さは10cm弱を残すのみで、床面周囲には浅い壁溝がめぐらしていたようである。

南辺中央には方形平面を呈する土坑がみられる。45×40cmの方形平面を呈し、深さは26cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であり、層序やその位置から貯蔵穴ではないかと考えられる。

竪穴住居-2に伴う柱穴は確認できなかった。

埋土は灰褐色粘質土の單一層であり、埋土内から弥生土器、サヌカイト剥片、土師器、須恵器、製塙土器などが出土している。この中で、土師器の高杯杯部を伏せた状態で北東隅(図44-1)と南西隅(図44-2)の対向する位置から出土している。高杯は、やや内湾する杯部をなし、いずれも同形態である。脚部は人為的に取り除かれたものと考えられ、住居廃絶時の祭祀行為に伴うものではないかと考えられる。出土須恵器は、6世紀前半のものが最も多く、また最も時期の下る遺物と考えられるため、竪穴住居-2の廃絶時期は6世紀前半と考えられる。

竪穴住居-2の主軸はN-18°-Wとなり、前述のように竪穴住居-8の主軸と近似する。その位置も220cmを隔てるのみであり、竪穴住居-8が竪穴住居-2の時期に近いことも十分考えられる。

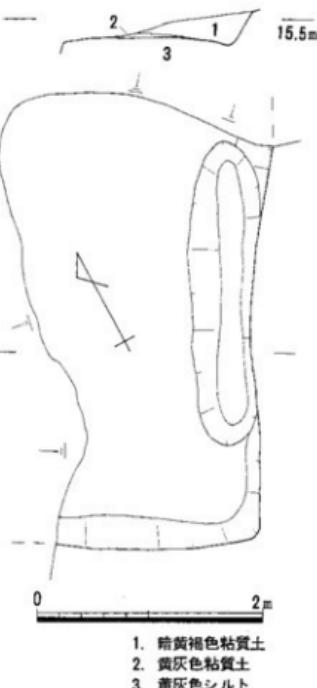


図-16 竪穴住居-1

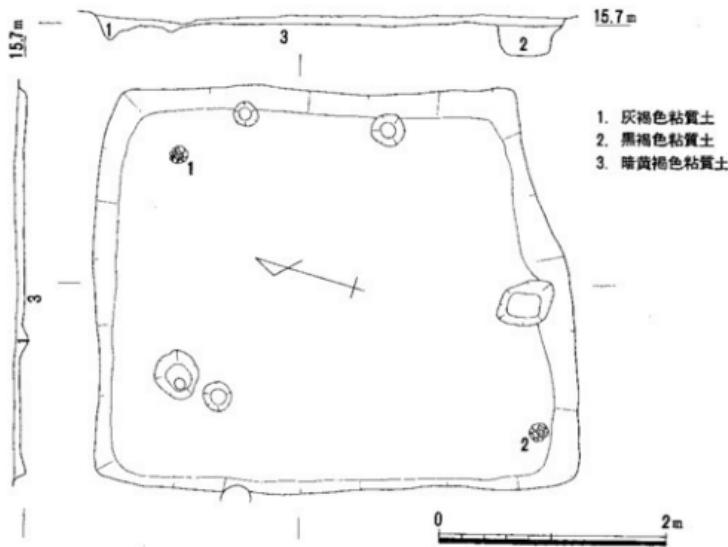


図-17 壁穴住居-2

掘立柱建物-1

調査区東寄りに位置する2間×3間以上の掘立柱建物。梁行184cm等間隔の368cm、桁行452cm以上を測る。柱穴はピット-1～5の5箇所で確認できるのみである。各ピットは直径16～36cmの円形、もしくは不整方形平面を呈する。ピットの深さは10cm前後を残すのみで、柱の太さは直径10cm前後のようである。主軸はN-26°-W。ピット内からは土師器、須恵器の小片が出土しているが、時期は確定できない。

掘立柱建物-2

調査区中央北寄りに位置し、北側は調査区外へ続いている。南辺は2間、292cm、他の1辺は168cm以上を測る。ピット-6～9の4箇所でのみ柱穴が確認できる。各ピットは円形、もしくは不整方形平面を呈し、直径47～92cmを測る。柱の直径は15cm前後、ピット-9の底面には方柱状の木製品が置かれており、柱の高さを調整したものかと考えられる。主軸はN-10°-W。ピット-7から須恵器高杯の脚部（図45-6）が出土しており、6世紀初頭頃かと考えられる。それ以外のピットからは顕著な遺物は出土していない。

掘立柱建物-3

掘立柱建物-2と切り合う位置にあり、北東隅は調査区外へ続いている。梁行2間、432cm、桁行3間、744cmを測る。各ピットは隅丸方形、もしくは円形平面を呈し、一辺長40～90cmを

測る。ピット-10は、建物-2のピット-9に切られており、建物-3のほうが先行することがわかる。また、ピット-15には柱の基部が残っており、ピット-16の底面には木柱2本が横位に置かれており、柱の高さの調節、もしくは礎板として置かれたものと思われる。柱の直径は15cm前後と推定される。主軸はN-82°-E。ピット-13・16・18から須恵器片が出土しており、6世紀初頭頃と考えられる。

以上の掘立柱建物を構成するピット以外のピットで遺物を出土しているピットにピット-31～35がある。(図45)ピット-31～34から出土している遺物は、いずれも庄内期の土器であり、ピット-35からは初期須恵器の鉢(7)が出土している。これ以外にも少量の遺物を出土するピットがみられるが、図化できるような遺物は認められない。

土坑-1

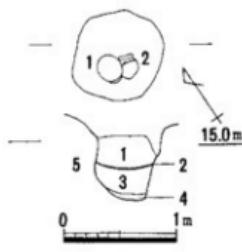
調査区南東隅に位置する土坑であるが、南側は流水によって半壊している。底面にはピット状の掘り込みがみられる。須恵器杯蓋・甌、土師器壺・甌(図46-10～13)などが出土しており、6世紀中葉頃の土坑と考えられる。

土坑-3

調査区中央の南側崩落面に位置する土坑である。一辺76cmの隅丸方形平面を呈し、深さは75cmを測る。最下層に青灰色粘土がみられ、その直上に北側に口縁を向けた甌(図46-2)、それに接してやや上層に南側に口縁を向けた甌(図46-1)が出土。いずれも完形で、新しい段階の布留式土器である。その上層に厚さ1cmの炭化物の層がみられる。5世紀前半の土坑であろう。

土坑-5

調査区西側に位置する土坑であり、長径280cm、短径220cmの梢円形平面を呈する。深さは130cmを測り、埋土は薄い稿状を呈する。須恵器の杯蓋・杯身、韓式系土器の体部片、製壺土器(図46-3～9)などが出土しており、6世紀前葉頃の土坑と考えられる。



1. 灰色粘質土
2. 炭化物
3. 淡灰色粘質土
4. 青灰色粘土
5. 黄灰色シルト

図-18 土坑-3

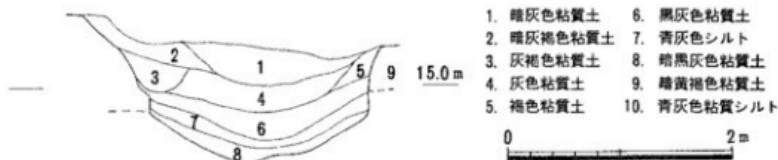


図-19 土坑-5

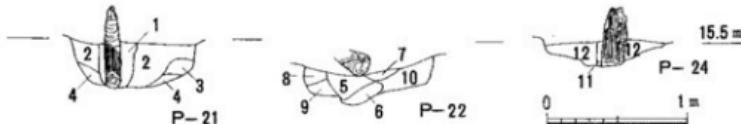


図-20 挖立柱建物-4・ピット断面図

④飛鳥～奈良時代

飛鳥から奈良時代の遺構としては、掘立柱建物-4、柵-1、溝-1のほか、土坑数基、ピット数個がみられる。

掘立柱建物-4

調査区西方に位置し、ピット-19～25から構成される掘立柱建物である。梁行は434cm、おそらく2間であろう。桁行は220cm等間隔の3間以上、総長660cm以上となる。ピットは方形平面を呈し、一辺長70～100cmを測る。ピット-21・22・24には柱の基部が残存していた。柱の直径は20cm前後、ピット-22の柱は倒れた状態で出土している。主軸はN-12°-Eとなる。

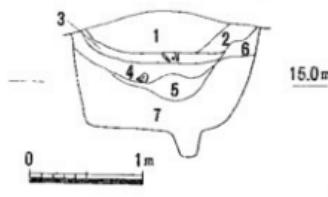
各ピットの掘方埋土からは、6世紀前葉から7世紀中葉の遺物が出土しており、7世紀中葉の掘立柱建物と考えられる。

柵-1

ピット-26～29によって構成される一本柱列であり、柵、もしくは板塀と考えられる。現存長576cmを測る。各ピットは方形平面を呈し、一辺長40～80cm、柱の直径は18cm前後であろう。N-8°-Eの方向を指し、後述する溝-1にはほぼ平行することから、溝-1に伴う施設と考えてよいだろう。各ピットからは少量の遺物が出土しているのみで、時期を決定できるものではない。

土坑-6

調査区西寄りに位置する土坑。長径260cm、短径180cmの楕円形平面を呈する。壁面は、かなり急斜面となり、底面は平坦になる。底面やや南西部には径約30cmの円形のピット状遺構がみられる。ピットの深さは23cm、土坑肩部よりピット底までの深さは128cmを測る。埋土上～中層から、土師器・須恵器・瓦が出土しており、飛鳥・奈良時代の遺物を含んでいる。



- | | |
|------------|-----------|
| 1. 黄褐色粘質土 | 5. 緑褐色粘土 |
| 2. 茶褐色粘質土 | 6. 黄褐色粘質土 |
| 3. 青灰褐色粘質土 | 7. 緑灰色粘土 |
| 4. 黑褐色粘質土 | |

図-21 土坑-6



図-22 溝-1

溝-1

調査区中央を南北にのびる溝である。北側は調査区外へのびており、南側は流水による崩落面、および試掘調査のトレンチによって切られている。現存長は10.6m、幅は北端で1.66m、南端で1.16mを測る。深さは北端で44cmを測り、底面はT.P.15.36m前後ではほぼ一定であるが、南端で少し深くなるようである。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の單一土であり、埋土内から土師器、須恵器、瓦（図48-1～10、図49-3）が出土しており、庄内期～奈良時代の遺物がみられる。庄内期の遺物は下層の井戸-5の遺物と考えられ、古墳時代中～後期の遺物も混入と考えられる。遺物の主体を占めるのは7世紀代のものであり、8世紀代の遺物は少量である。これらの遺物より、溝-1は7世紀前葉頃に掘られ、8世紀には埋没したものと考えられる。

溝-1は、N-6°-Eの方向を指しており、これはほぼ真南北に一致する。溝-1は、かつて礎石建物が遺存しており、船橋庵寺の遺構とされている位置から西へ60～80mの位置にあり、寺域の西限を画する溝の可能性が考えられる。また、先述した柵-1は、この溝-1とはほぼ平行にのびているようである。溝-1東側の肩部と柵-1との距離は1.8mを測り、この間が犬走り状の遺構であった可能性が考えられる。

⑤中～近世

井戸-1・2は中世の井戸と考えられる。また、土坑-7からも少量ではあるが、中世の遺物が出土しており、これら以外にも少量の中～近世の遺物が出土している。

井戸-1

調査区東寄りに位置する井戸。1972年に発見され、大阪府教育委員会によって調査された井戸に該当する。（『節・香・仙』第21号 1972）上面、および南側半分が流水によって破壊を受けているが、1972年の調査結果によると、150cm×180cmの方形平面を約35cm掘り下げた後、二段掘り状に掘り込み、方形の井戸枠を組んだものと考えられる。井戸枠部分の掘方は一辺95cm前後の方形と考えられ、井戸枠は一辺65cm前後の方形となる。構造は、掘方の四隅に直径8cmの柱を立て、柱上端から約15cm、75cm、130cmの3箇所に枘穴を開け、四辺に角材12本を押し込んで枠組みを造っている。四隅の柱表面は軽い面取りがなされ、多角柱状を呈する。また角材は長辺6～8cm、短辺3～4cmの長方形断面を呈する。上段の枠を構成する角材は、北辺でのみ、折損した状態で確認され、他の三辺では失われている。この枠組みの四周に板材を立てることによって井戸枠は造られている。

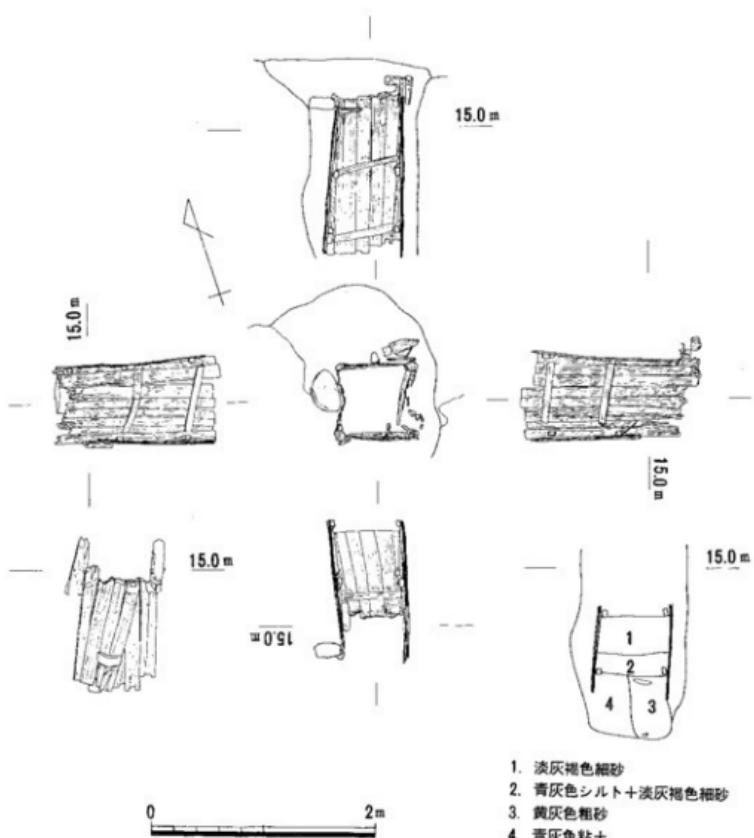


図-23 井戸ー1

板材の幅は5~14cmと一定せず、10cm前後が最も多い。長さは完存する東辺北側の2枚の板材から推定すると145~150cmと考えられる。板材は二重に立てられ、補強を図っている。内側の板材は北辺4枚、西辺6枚、南辺6枚、東辺8枚、外側の板材は北辺5枚、西辺5枚、南辺5枚、東辺4枚である。北辺と南辺の板材に下部が凹字状に加工されているものがみられる。各辺は、土圧によって、やや内傾し、上端はほとんど破損している。また、北西隅の柱が約12cm沈んでいるようであり、枠木が傾いている。東辺の枠木も南側で折損している。南側板材の裏側には、長さ30.3cm、幅24.1cmの平瓦が板材を押さえるために置かれていたが、他の辺には、このような方法は認められなかった。(図54-8)

井戸枠の掘方は板材下端より37cm深く掘られており、北辺、西辺、南辺、東辺の順に立てられたようである。掘方の埋土は青灰色粘土、井戸枠内埋土は下層から青灰色シルトをブロック状に含む淡灰褐色細砂、淡灰褐色細砂となるが、上層の淡灰褐色細砂の部分まで1972年の調査時に掘られており、中段枠木の位置にビニールが敷かれていた。

掘方上面で、北東隅の柱のすぐ北側から柱材かと思われる木材が出土している。1972年の調査時には掘方上面で4本の柱痕跡が確認されており、その1本にあたる。この4本の柱は、瓦屋根を有する井戸の上屋と推定されている。また、掘方上面北側からは数点の瓦片、西側からは扁平な花崗岩が出土しており、板材を押さえるための裏込めかと考えられる。

井戸-1掘方内から平瓦（図51-13、図54-8）、最下層から巴文軒丸瓦（図53-6）、下層から重弧文軒平瓦（図49-2）、平瓦（図51-7・8・11、図52-15）、染付（図53-5）、上層から丸瓦（図50-4・5）、平瓦（図52-16・17）、瓦質の鉢（図53-4）などが出土している。瓦は飛鳥・奈良・室町時代のものを含み、土器類は室町～江戸時代のものがみられる。これらの遺物より、井戸-1の造られた時期は室町時代と考えられる。

井戸-2

井戸-1のすぐ西側に接して位置する。この井戸も、1972年の大阪府教育委員会による調査の際に、上層のみ調査されている。上面では長径176cm、短径126cmの橢円形平面を呈するが、約80cm掘り下げた位置で、円形平面の井戸と土坑が切り合った遺構であることが確認できた。西側の土坑が東側の井戸を切っており、土坑のほうが新しい。

土坑は直径100cm前後の円形で、深さは130cmを測る。東側では井戸の枠材を一部破壊している。埋土は茶褐色土、土飾器・須恵器・瓦・瓦器・礫灰岩片などが出土している。（図52-14）

東側の井戸、井戸-2は直径130cm前後の円形平面を呈し、下半は細長い板材を円形に立てることによって井戸枠を構成しており、上半はかなり破壊されているが、井戸-1と同様な方形枠であったと推定される。

上半では、直径5cm前後の丸柱が北西部と南西部にみられ、北辺と南辺は板材を縦位に立てている状況がみられる。現況から考えると、方形の井戸枠は北辺の一部と西辺・南辺にのみ組まれ、他の部分は素掘りのままであったのではないかと思われる。方形の一辺は約70cm、深さは80cm以上を測る。

その下層には円形の井戸枠がみられる。井戸枠は幅5cm、厚さ2cm前後の板材39枚を立てて造られている。下端近くで十字に板材を重ねて井戸枠の形・大きさを決めており、中央付近で2段にわたって、半裁した竹をタガとして巻いていた。竹は幅2cm前後であり、これを2～3重に巻つけることによって不安定な細い板材を固定し、井戸枠としたものである。上端ではやや乱れがみられるものの、ほぼ完存した状態であった。直径は約58cmである。

埋土は枠内が狭いことから、十分に観察できなかったが、上層は淡灰色粘質土、下層は灰色粘質土である。

掘方は井戸枠より若干広めに掘られているのみで、掘方底面と井戸枠下端もほぼ一致している。掘方埋土は暗青灰色シルトである。

掘方内からは土師器・瓦、埋土最下層から土師器・曲物などの木製品（図53-7）、下層から

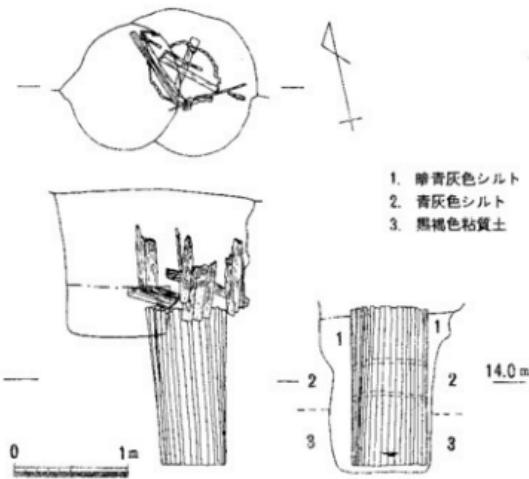


図-24 井戸-2

土師器・瓦器・瓦、上層から瓦（図51-12）が出土している。やはり飛鳥時代から中世にかけての遺物が認められるが、土師質の羽釜（図53-7）や瓦器から考えると、13世紀頃に造られた井戸ではないかと考えられる。

土坑-7

奈良時代の土坑-6を切る不整形平面の浅い土坑である。平面形はL字状を呈し、深さは30cmを測る。埋土は青灰色粘質土。埋土から土師器・須恵器・陶器・瓦が出土しており、土師器の皿と鉢（図53-2・3）を図化した。他の遺物から考えると、13世紀頃の土坑かと考えられる。

3. 遺物

①弥生時代の遺物（図25）

弥生時代前期から後期までの遺物が出土しているが、量は少ない。

1・2は甕。口縁は外反し、端部にキザミ目を入れる。口縁直下に各4条、3条の沈線を伴う。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。3は壺の頸部。7条の沈線を伴う。4・5は底部。外面タテハケ、内面はユビオサエによる調整。

6・7は甕。口縁は外反し、体部はやや張る。6は外面ハケメ、内面板ナデ調整。7は外面ヘラミガキ、内面はユビオサエ後にナデ調整。8は広口の長頸壺。体部は下ぶくれとなり、頸部は太い。外反する口縁部は端部で外方へ垂下し、端面に簾状文を施す。口縁直下から体部にかけて12条の簾状文とその下に扇形文がみられる。9は壺の口縁部。口縁が上下方へ拡張される。端部には斜方向のキザミ目、外面には2条の雑な波状文と竹管で押えた円形浮文を貼り付ける。10は無頸壺。口縁は外方へ屈曲して肥厚し、刺突文をめぐらせる。体部には4条の簾状文を施す。口縁直下には2個1対の円孔がみられる。8・10は生駒西麓の胎土である。

11・12は長頸壺。口縁は緩やかに外反し、体部は肩の張った形態となる。外面はタテ方向のヘラミガキを施す。11の肩部に2本のヘラ描きによる線刻がみられ、12の肩部には格子状の線刻がみられる。13は器台脚部。裾広がりの脚は端部で上方へ反りかかる。外面はタテ方向のヘラミガキ、四方向の円孔がみられる。14は甕底部。外面にはタタキ目が残る。

9は溝-3出土、11~13は溝-4出土、14はピット-30出土、他は包含層から出土したものである。

石製品（図26）

1は先端を欠損するが、石槍であろう。現存長10.0cm、幅3.4cm、厚さ1.2cm、重量53.4g。一部に自然面が残る。2も石槍と考えられるが、大きく破損している。現存長5.2cm、幅3.0cm、厚さ1.1cm、重量18.6g。3は石鐵。完形品であり、流線形を呈する。細かい剥離によって刃部を作る。長さ6.2cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重量6.4g。1~3はいずれもサヌカイト製である。

4は異形の石製品。一端がやや扁平な球状を呈し、握部状を呈する部分に続く。球状を呈する部分は荒く打ち割った後に磨いているようで、表面は滑らかであるが、粒の粗い砂粒がみられる。一方、握部状の部分は丁寧に磨かれており、縞状に磨いた痕跡が残る。長さ6.35cm、幅2.85cm、厚さ2.05cm、重量47.2g、用途は不明。

1は井戸-6上層、2は堅穴住居-5、3は井戸-5上層、4は井戸-4上層から出土しており、いずれも庄内期の遺構から出土している。しかし、その形状等から、1~3は弥生時代の遺物と考えられ、混入品ではないかと思われる。4については、その時期を確認することができない。

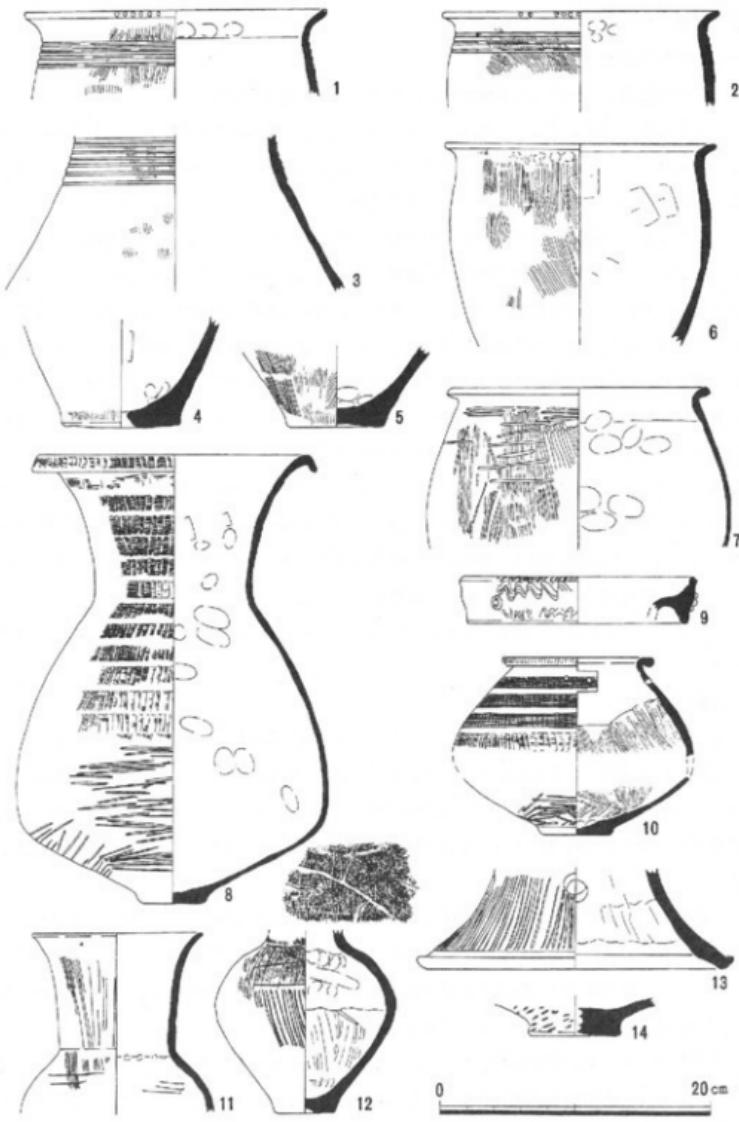


図-25 弥生土器

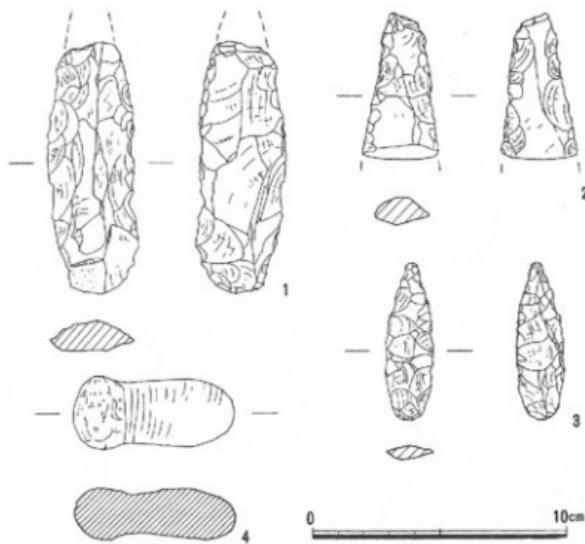


図-26 石製品

②庄内期の遺物

堅穴住居-3(図27-1・2)

1は壺の口縁部。外面に粘土を補充することによって二重口縁状を呈する。2は鉢。口縁は外反した後、屈曲して立ち上がる。内外面ともナデ調整で、外面はヨコ方向、内面は放射状のヘラミガキを施す。

堅穴住居-4(図27-3)

3は小形の器台。口縁部はつまみ上げるように立ち上がる。表面の磨滅が激しいが、内面にヘラミガキを施しているようである。

堅穴住居-5(図27-4~17)

4は直口壺。外方へ直線的にのびる口縁部は端部で丸くおさめる。体部外面はタテハケからナデ、内面はヘラケズリ調整。5は小形の広口壺。外面にヨコ方向のヘラミガキを施す。6~12は壺。6~11は庄内甕の特徴である口縁端部をつまみ上げる形態である。頭部内面は鋭角をなすもの(7)、ケズリがやや下方から始まるためにやや屈曲が滑らかになるもの(6・8・9)、丸味をおびるもの(10・11)がみられる。6・8・9の内面にはヘラケズリに先行するタタキと思われる痕跡が残っている。体部外面は、いずれも左下がりの細かいタタキをハケメ

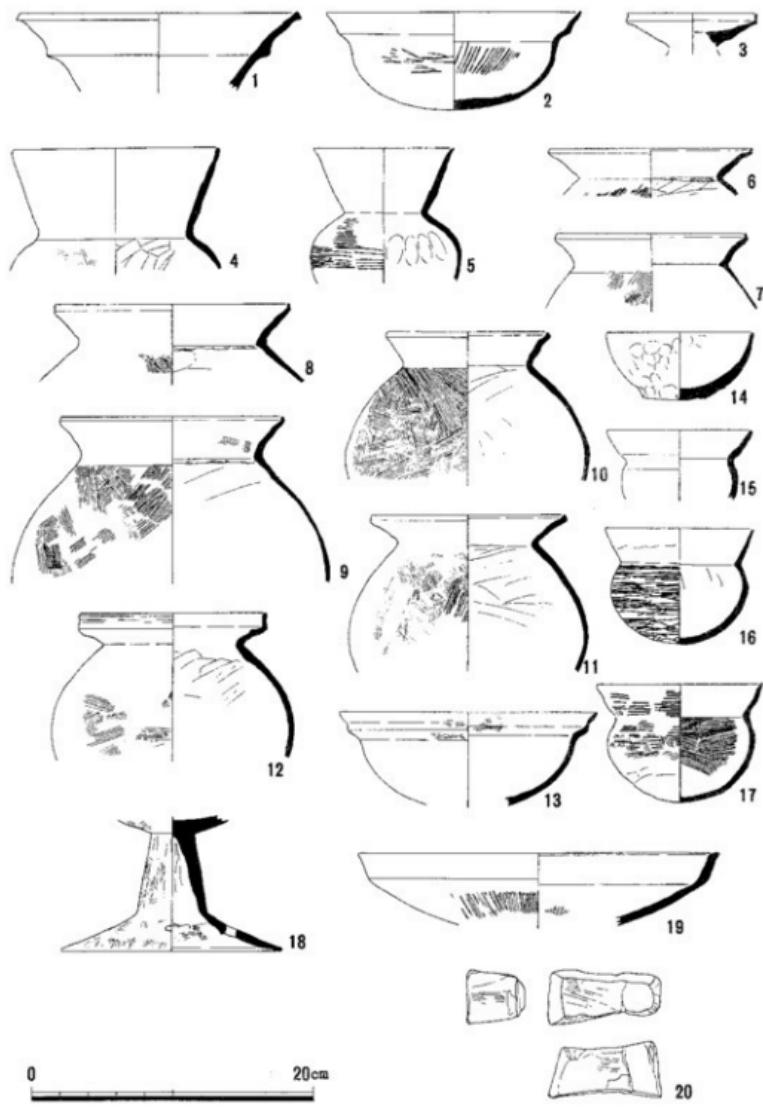


図-27 穹穴住居-3～8 出土遺物

で消している。12は口縁部が直立する吉備系の甕。口縁部外面に櫛描直線文を施していたようであるが、かなり摩滅している。外面はハケメからナデ、内面はヘラケズリからナデ調整で仕上げる。13は有段口縁の鉢。口縁部の内外面に、非常に細かいヘラミガキを施している。14は小形の鉢。半球状を呈し、手づくねであろう。底部は強いユビオサエによって造り出し、平底状となる。15~17は小型丸底壺。いずれも口径が体部径より大きい。15・17は外面部に強いヨコナデを施すが、16は口縁部のみにヨコナデを施しているため頸部の屈曲が明瞭である。16・17の外面はハケメからヘラミガキ、内面は15がナデ、16が板ナデ、17がハケによる調整である。

堅穴住居-6（図27-18）

18は高杯の脚部。脚は裾広がりとなり、4~6方向に円孔が穿たれる。脚部外面はハケからナデ、内面も一部ハケを施した後ナデ、杯部外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施しているようである。

堅穴住居-8（図27-19・20）

19は高杯杯部であろう。外面に放射状のヘラミガキ、内面にも放射状のヘラミガキを施していたようである。20は砥石。台形状の断面形を呈し、一端が破損している。各面は緩やかに内湾しており、細い線状の擦痕が多数みられることから、かなり使用されていたものであろう。石材は流紋岩である。

井戸-3（図28・29）

1~4は第8層黃灰色砂質土上面出土。

1は直口壺。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ後に下半のみタテハケを施す。2~4は甕。2・4は庄内甕。外面はタタキからハケメ、内面はケズリから一部ナデている。3はV様式系の甕。底部は厚く、平底状をなす。外面体部はヘラミガキ、底部はヘラケズリ。内面は板ナデを施すが、粘土帶の積み上げ痕が明瞭に残る。体部に焼成後の穿孔がみられる。

5~28は第3層灰色シルト出土。

5は広口壺。口縁はラッパ状に広がり、底部は平底氣味になる。体部外面ハケメからナデ、内面はヘラケズリ調整。6・7は壺体部。二重口縁の壺であろう。外面はヘラミガキを施す。8~21は甕。口縁部の形態は、外反して端部を丸くおさめるもの（8・9）、端部をつまみ上げるようにヨコナデするもの（10）、端部が立ち上がるものの（11~20）、端部が内面に肥厚するもの（21）がみられる。体部外面は左下がりのタタキの後に部力的にハケメを加えるものが主であるが、やや粗いタタキをナデ消すもの（10）や粗いハケメで仕上げるもの（21）もみられる。内面はヘラケズリが基本であるが、その後にナデ調整を施すものもみられる。これによって頸部内面は鋭角に屈曲する。頸部は内面にヘラケズリに先行するタタキが残るもの（18~20）がみられる。21の内面はハケの後に軽いナデで仕上げられ、頸部内面は滑らかに屈曲する。

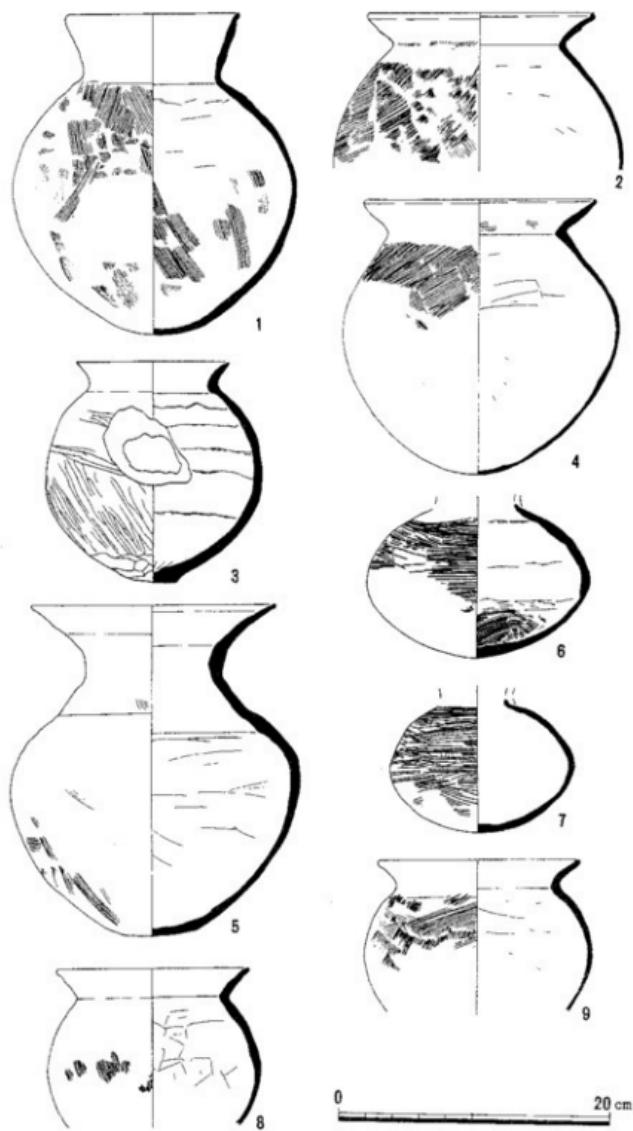


図-28 井戸-3出土遺物（1～4第8層上面、5～9第3層）

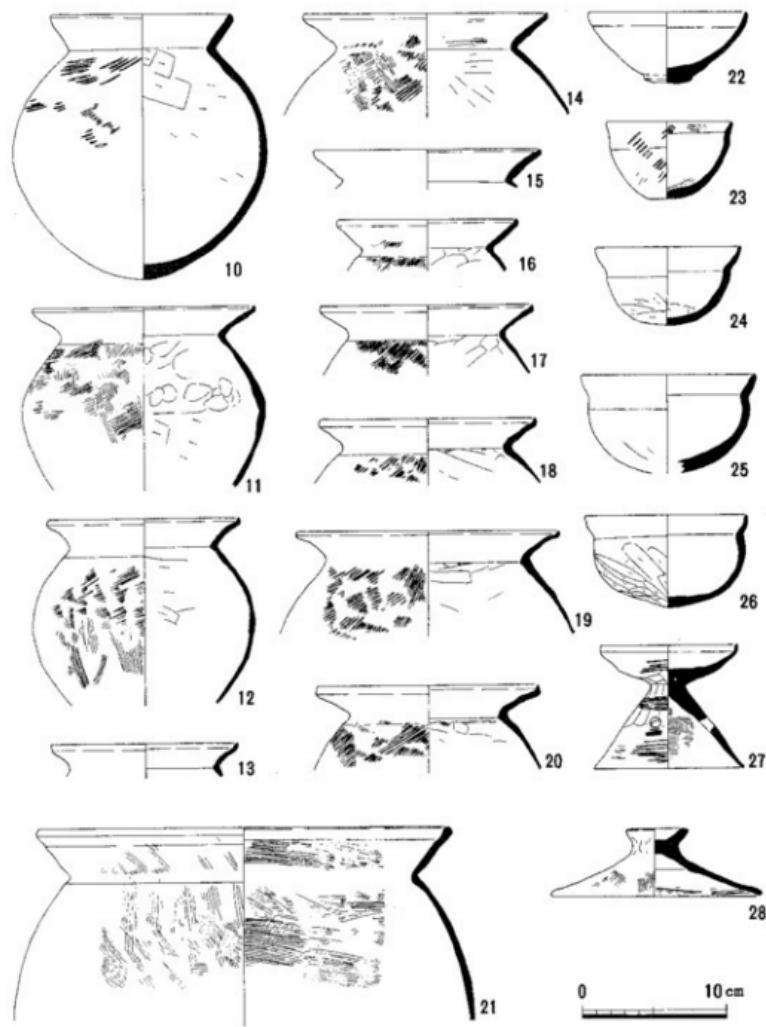


図-29 井戸-3 出土遺物 (10~28第3層)

21は口径29.0cmの大形品であり、形態や調整技法は他の甕と大きく異なる。胎土は石英・長石・雲母・角閃石を含み、灰褐色を呈するものである。

22～26は鉢。22は口縁が内窩し、平底の底部を造り出す。内外面ともナデ調整であろう。23は平底状の底部となり、外面にはタタキが施される。24～26は外面ヘラケズリ、内面板ナデからナデ調整によって仕上げられる。27は器台。口縁端部は立ち上がり、脚部は直線的に広がる。外面はタテ方向のヘラケズリからナデ、そしてヨコ方向のヘラミガキを加える。円孔は三方であろう。28は蓋であろう。つまみは中くぼみの大きなものである。外面はハケメをナデ消しておらず、内面はハケ調整である。

井戸-4（図30～33）

1～4は第8層灰褐色粘質土、第9層青褐色粘質土から出土。

1・2は甕の口縁部。口縁端部をつまみ上げ、頸部内面は鋭角に屈曲する。体部外面のタタキはいずれも右下がりのようである。3は甕の底部。底部は平底、中央がくぼんでいる。外面はタタキ、内面はハケ調整。4は直口壺の口縁部。外面タテハケ、内面板ナデ後に内外面ともにヨコナデで仕上げる。

5～14は第4層黒褐色粘質土出土。

5～8は甕。5～7は庄内甕。体部は球形に近い。体部外面は左下がりのタタキから左上がりのハケメ。5はタタキメが顯著に残り、6はタタキメが完全に消されている。体部内面はヘラケズリ、7の内底面には指頭痕がみられる。8は口縁部が立ち上がる吉備系の甕。体部はやや継長となる。体部外面上半はハケ、下半はナデ、内面はヘラケズリ後にナデを加える。

9～11は直口壺。口縁部外面はヨコナデに先行するハケメがみられる。体部外面はハケ調整。9の体部下半はナデで仕上げる。内面は上半がヘラケズリ、下半はナデ調整。9の外面には煤が付着している。12～14は二重口縁の壺。12は体部外面タテハケ後にナデ調整。底部にタテ方向のヘラミガキが残る。体部内面は、頸部直下がヘラケズリからナデ、底部がユビオサエ、他はナデ調整である。外面に煤が付着。13の口縁は大きく外反する。外面はヨコ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキから放射状のヘラミガキ。非常に細かいヘラミガキである。14は段をなす部分に垂下する突帯を貼り付ける。内外面とも放射状のヘラミガキを施し、段部には7条の櫛描き直線文をめぐらせた後、円形浮文を貼り付け、竹管で押える。

15～27は第3層暗茶褐色粘質土出土。

15～23は甕。15～19は庄内甕であるが、口縁端部のつまみ上げが不明瞭なもの（16・17）、つまみ上げのみられないもの（19）もみられる。体部外面は、いずれも左下がりのタタキの後にハケを施す。内面はヘラケズリ調整であるが、15・19の底部には指頭痕が残る。20の口縁部はやや内窩し、端部が内面に肥厚して面をなす。21もやや内窩する口縁部が端部で肥厚する。体部外面はハケメ、内面は頸部よりやや下がった位置からヘラケズリを施す。20・21は布留傾

向甕と位置付けられる。22は縦長の体部から口縁が直立し、底部は厚く小さい平底となる。外面は2本/cmの粗いタタキを左下がりに施し、口縁も底部も叩き出しによって造り出す。内面は板ナデ後にナデを施す。胎土は精良、淡黄白色を呈する。内外面ともに二次焼成によってピンク色に変色している部分が多くみられ、非常に艶くなっている。煤の付着は認められず、製塙土器の可能性がある。23は口縁部が段をなした後、上外方へ高く立ち上がる山陰系の甕である。口縁部外面に櫛描文がみられる。体部外面はハケメからナデ、内面はヘラケズリ調整。淡茶褐色の色調を呈する。

24は二重口縁の甕。口縁部の段は不明瞭となる。外面全面にヨコ方向のヘラミガキ、口縁部内面に放射状のヘラミガキを施す。

25は鉢。体部は浅く、口縁は段をなして開く。内外面ともにヘラミガキを施す。26は小型丸底甕。口縁は段をなして上外方へのび、底部は内側へくぼんでいる。体部外面から口縁部内面にかけてヘラミガキがみられる。27は器台。直線的に開く脚部である。四方向に円孔がみられ、外面にはヘラミガキを施す。

28~31は第2層青灰茶褐色粘質土より出土。

28は庄内甕の口縁部。29・30は布留傾向甕。29は直線的にのびる口縁部が端部で内方へ肥厚する。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリから下半にナデを施す。30は内弯する口縁部が端部で内方へ肥厚する。体部外面は右下がりのタタキをナデ消しており、内面はヘラケズリから下半にナデ、底部はユビナデで仕上げる。

31は小型丸底甕。外面にヘラミガキがみられ、外面底部はヘラケズリからナデ調整で仕上げている。

32~49は第1層青茶褐色粘質土出土。

32~44は甕。32~37は口縁端部がつまみ上げるように立ち上がり、38~40は口縁がやや内弯し、端部が内方へ肥厚する。38~40の体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリから下半をナデ調整。ヘラケズリは頭部やや下より施されるため、頸部内面は滑らかに屈曲する。41の口縁部は強く外反し、端部で上下方へ拡張する。色調は茶褐色。42は弱い段をなして開く口縁部を有する。体部外面は左上がりのハケメ、茶褐色を呈する。43は口縁部が直立し、6条の櫛描直線文を施す吉備系の甕。淡赤褐色を呈する。44は下ぶくれの体部から口縁は緩やかに外反し、端部でやや肥厚する。体部外面は規則的なハケメ、内面はナデ調整、一部にユビナデがみられる。煤の付着はみられず、甕とすべきかもしれない。色調は淡黄灰色を呈する。

45は直口甕。外面はタテハケをナデ消した後にヨコ方向のヘラミガキ、内面はハケを主とする調整。46は二重口縁甕。段部に断面三角形状の突帯を貼り付ける。

47は小型丸底甕。外面一部にヘラミガキが残る。48・49は高杯。いずれも深い杯部であるが、49は段をなして外方へのびている。

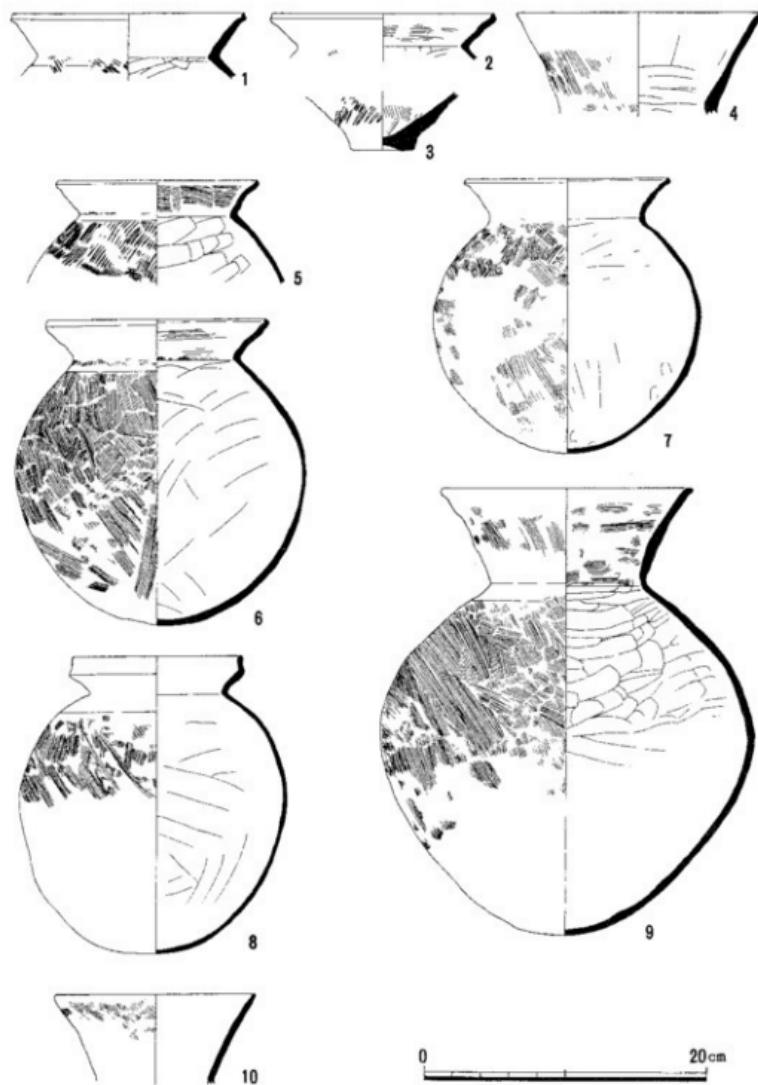


図-30 井戸-4出土遺物（1～4第8・9層、5～10第4層）

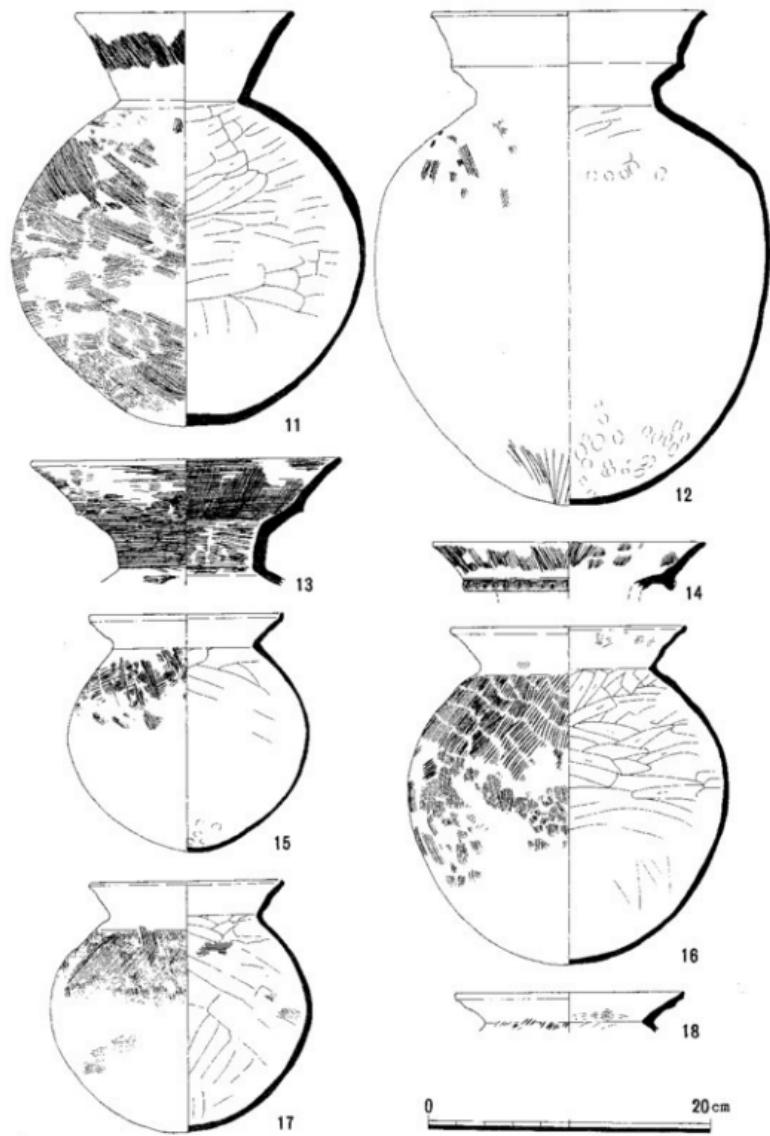


図-31 井戸-4出土遺物（11～14第4層、15～18第3層）

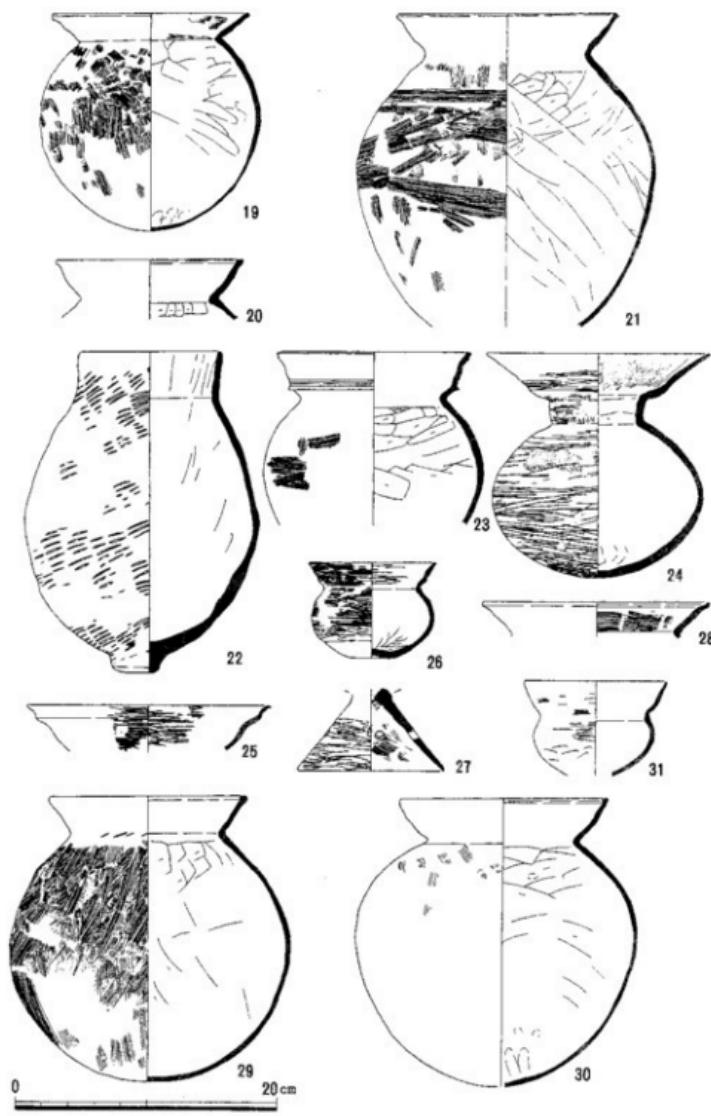


図-32 井戸-4出土遺物（19~27第3層、28~31第2層）

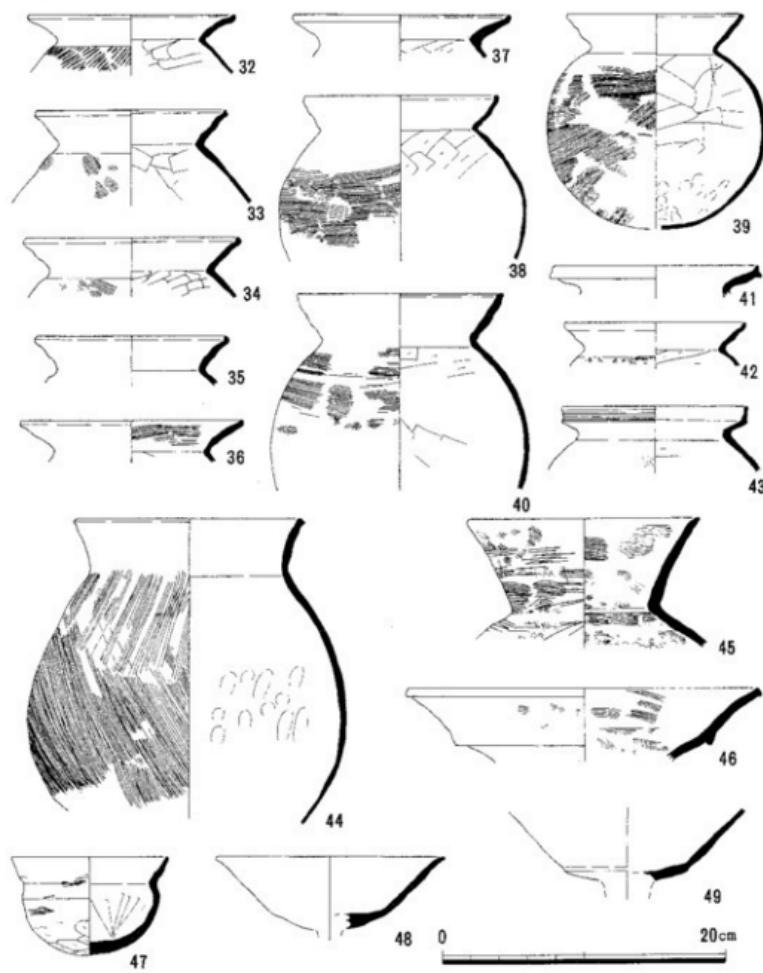


図-33 井戸-4出土遺物（32~49第1層）

井戸-5 (図34~40)

1~34は第5層青灰色粘土出土。

1~23は甕。1~14は器壁が厚く、口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめるものが多いが、端部がやや肥厚して面をなすもの(5・6)、端部がつまみ上げるようにやや上へのびるもの(7・8)もみられる。8は器高中央付近で体部最大径となり、底部は平底である。体部外面は粗いタタキによって調整され、ハケメを施すもの(9・12~14)もみられる。内面は1~8が板ナデ、もしくはナデ調整。9~14がヘラケズリ調整である。4は体部中央に1箇所、8は体部2箇所に粘土の接合痕がみられ、その上下でタタキの方向が変化している。また、2の内面には粘土紐の積み上げ痕が残り、粘土紐の幅は1.5cm前後である。15・16は器壁がやや薄くなり、口縁端部がわずかに肥厚する形態となる。15の体部外面は細かい左下がりのタタキの後に部分的に左上がりのハケメを施し、16の体部外面はハケ調整である。17~20は口縁端部につまみ上げるようなヨコナデを施すが、明瞭に立ち上がるものではない。17の体部外面は左下がりのタタキの後に左上がりのハケメを施す。底部までタタキがみられ、やや尖底となる。18は右下がりのタタキの後に右上がりのハケメを部分的に施す。20は全面ハケメで仕上げる。体部内面はヘラケズリ調整であるが、20の体部下半はユビナデ、ユビオサエによる調整である。20の外面肩部に7条の波状文がみられる。山陰等他地域の影響を受けたものであろう。18は調整技法からみると、大和の影響を受けていることも考えられる。21は段をなして開く口縁部であり、弱いS字状を呈する。東海の影響によるものか。色調は18が淡茶褐色、20が淡茶褐色~淡赤褐色、21が暗橙色である。22・23は小形の甕。22は貼り付けによって平底状の底部を造り、23の底部もやや平底気味になる。22は体部外面タタキからナデ、内面は板ナデからナデによる調整。23は体部外面ハケメ、内面はヘラケズリ、底部のみユビナデ調整。

24~28は壺。24はやや肩の張った体部と外反する口縁部からなる。体部外面はヘラミガキ、内面は頸部がユビオサエ、上半がヨコ方向のハケ、下半がヘラケズリによる調整である。25は器壁が厚い頸部から口縁部にかけての破片である。外面タテハケ、内面ヨコハケ調整。26は段をなして立ち上がる口縁である。27は明瞭な段をなす二重口縁の壺。口縁外面に5条/cmの櫛描波状文を上下2段に雜に施す。下端近くには直径2mm弱の工具による刺突が1.3cm前後の間隔でめぐり、竹管を押しつけた2個1対の円形浮文を四方向に貼り付ける。頸部直下には、直径2~3mmの竹管文がめぐり、その直下に10条/1.9cmの櫛描波状文、14条/2.4cmの櫛描直線文を施す。頸部外面はタテ方向のタタキをヨコナデによって消した後、ヨコ方向のヘラミガキを加える。体部外面は右下がりのタタキをナデ消した後、ヨコ方向の幅広のヘラミガキを施している。体部内面はユビオサエ、ナデによって仕上げる。外面暗橙色、内面淡灰褐色の色調を呈する。28は平底の底部から体部にかけての破片。外面はナデからハケ調整、内面はナデ調整、底部のみ斜放射状にハケを施す。

29・30は小形の鉢。29は体部外面ハケ、底部のみヘラケズリ、内面は板ナデ・ナデによる調整。30は体部外面ユビナデ、内面ヘラケズリ調整。31は器台。口縁部外面に2条の沈線を施し、3本1対の棒状浮文を3箇所に貼り付ける。32～34は高杯脚部。32は3方向に円孔を有する高い脚部。33は低い裾広がりの脚部、34は低く内弯する脚部である。34は円孔は4方向と推定され、外面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。

35～51は第3層灰褐色粘質土、第4層暗灰褐色粘質土から出土。

35～43は壺。35～39は口縁端部を丸くおさめる。口径は11.4cm（36）から19.4cm（35）までさまざまである。36はやや下ぶくれの体部となり、底部は平底である。39も平底の底部を意識したものである。体部外面調整は35・36・39がタキ、37がハケ、38がナデである。体部内面調整は35・36がナデ、37～39がヘラケズリである。40は口縁端部をややつまみ上げる。体部外面はタキ、内面はヘラケズリ。41は口縁端部が垂下し、頸部の屈曲が弱いものである。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ。42は口縁端部がつまみ上げるように立ち上がる。体部外面は右下がりのタキ、内面はヘラケズリからナデで仕上げる。43の口縁部は直立し、外面に10条/1.6cmの櫛描直線文を施す。

44は壺の体部であろう。外面はタキをナデ消しており、内面はヘラケズリ調整、内面底部には指頭痕が残る。45も壺の体部。外面にはタテ方向の細かいヘラミガキがみられ、内面はユビオサエによって調整するが、一部にヘラケズリがみられる。46は小形の直口壺。体部外面にヘラミガキ、指頭痕がみられる。47は強く外反した後、段をなして外上方へ直線的にのびる口縁部である。淡黄橙色を呈する。山陰系か。

48～50は小形の鉢。50はややくぼんだ平底となり、体部は内弯する。いずれも外面はナデ、内面は48がハケ、49がナデ、50が板ナデによる調整である。51は器台。脚柱部は中実で太くなる。

52～62は第3層灰褐色粘質土上面から出土。

52～54は壺。52・53は口縁部が外反する。53の体部外面はタテ方向の密なヘラミガキを施す。54は直立する口縁に9条の櫛描き直線文を施す。体部外画はタテ方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリからナデ、底部はユビオサエ。吉備系の壺である。

55・56は直口壺。56は平底となる。体部外面はナデからヘラミガキを施しているようであり、内面は頸部直下がユビオサエ、体部は板ナデからナデ調整。57の体部は下ぶくれとなり、頸部は厚く直立する。口縁は外方へ大きく開き、端部でやや直立する。体部外面にはタテ方向のヘラミガキがみられるが、かなり摩滅している。58は平底状を呈する壺の底部。外面ハケ、内面ヘラケズリからナデ調整。59は壺の体部。球形を呈し、底部に焼成後の穿孔がみられる。外面上半はタテハケ、下半はナデ、内面はナデ調整である。体部中位やや下に粘土の繼ぎ目がみられる。

60は小型丸底壺。体部は肩が張り、底部は厚い尖底となる。外面ハケからヘラケズリ、内面板ナデ調整。61は高杯。弱い段をなして口縁が開く。62は大形の鉢。口縁は厚く直立し、外面に段をなす。外面はナデ・ユビオサエ、内面は板ナデ調整。山陰系か。

63~85は第2層黄褐色粘質土出土。

63~73は甕。63は縦長の体部、口縁は短く外反する。外面体部上半はタタキ、下半はナデ、内面はナデ調整。64~69は外反する口縁を有し、体部外面はハケ、およびナデ調整、内面はヘラケズリ調整。70~72は口縁端部が立ち上がる。体部外面は左下がりのタタキと部分的なハケメ、内面はヘラケズリ調整。73は甕の底部。平底の底面には直径1.1~1.4cmの円孔が開けられている。外面はタテ方向のタタキをナデ消し、内面はナデ調整。

74~77は壺。74は直口壺。体部外面はハケ、内面はユビオサエからナデ調整。75・76は大きく外反する壺の口縁部。76の外面には櫛状工具による刺突文、内面には11条/cmの波状文がめぐる。77は直立する口縁部が端部でやや外方へ開く。底部はおそらく平底であろう。体部外面はハケメをナデ消す。内面は頸部がユビオサエ、上半がナデ、下半はタテ方向のヘラケズリを施す。

78・79は鉢であろうか。78はユビオサエによって底部を調整し、外面はナデ上げ、内面には10本/cmの布目痕が残っている。79は厚い平底の底部を有し、内外面ともにナデ調整。80は小形の鉢。底部は小さい平底、口縁は短く外反する。内外面ともナデ調整。81は器台脚部。内外面ともハケ調整。82は高杯底部。段をなして大きく外方へ開く。83・84は高杯脚部。83の脚は中実の脚柱部から裾広がりとなる。四方向に円孔を穿つ。84は低脚で太く、緩やかに外方へ広がる。85は小さい脚から腕状の体部が立ち上がる。外面はナデ調整であるが、一部にハケメがみられる。内面はナデ調整。二次焼成によって一部赤変しており、少量の煤が付着している。製塙土器であろう。

86~122は第1層暗黄灰色粘質土から出土。

86~104は甕。86~93は口縁部が外反する甕。体部外面はタタキを施すもの（89・90・92）、ハケ調整のもの（87・88・91）、ナデ調整のもの（86）がみられる。内面はナデ調整のもの（86・87）、板ナデのもの（88）、ヘラケズリのもの（89~93）がみられる。94・95は口縁端部につまみ上げるようなヨコナデを施している。体部外面は細かい左下がりのタタキ、内面はヘラケズリ。96・97も口縁端部をつまみ上げるような形態となり、外面に1条の沈線を伴う。96の体部外面はタタキ、97の体部外面はハケ調整である。98・99は庄内甕。体部外面左下がりのタタキから左上がりのハケ調整。100~102は口縁が立ち上がり、口縁外面に櫛描直線文を施す。体部外面ナデ、内面ヘラケズリ、吉備系の甕である。103は口縁が高く立ち上がる。外面はナデ、内面頸部は板ナデからナデ、体部はヘラケズリ調整。104は口縁が段をなして外方に開く。いずれも他地域からの土器であろう。

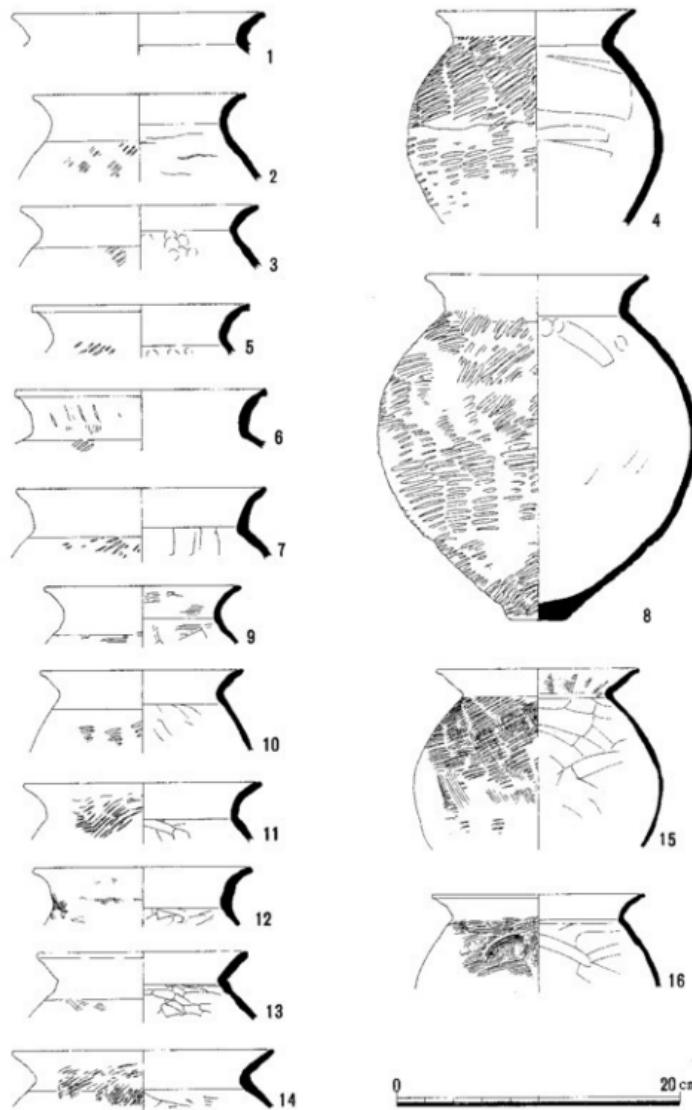


図-34 井戸-5出土遺物（1～16第5層）

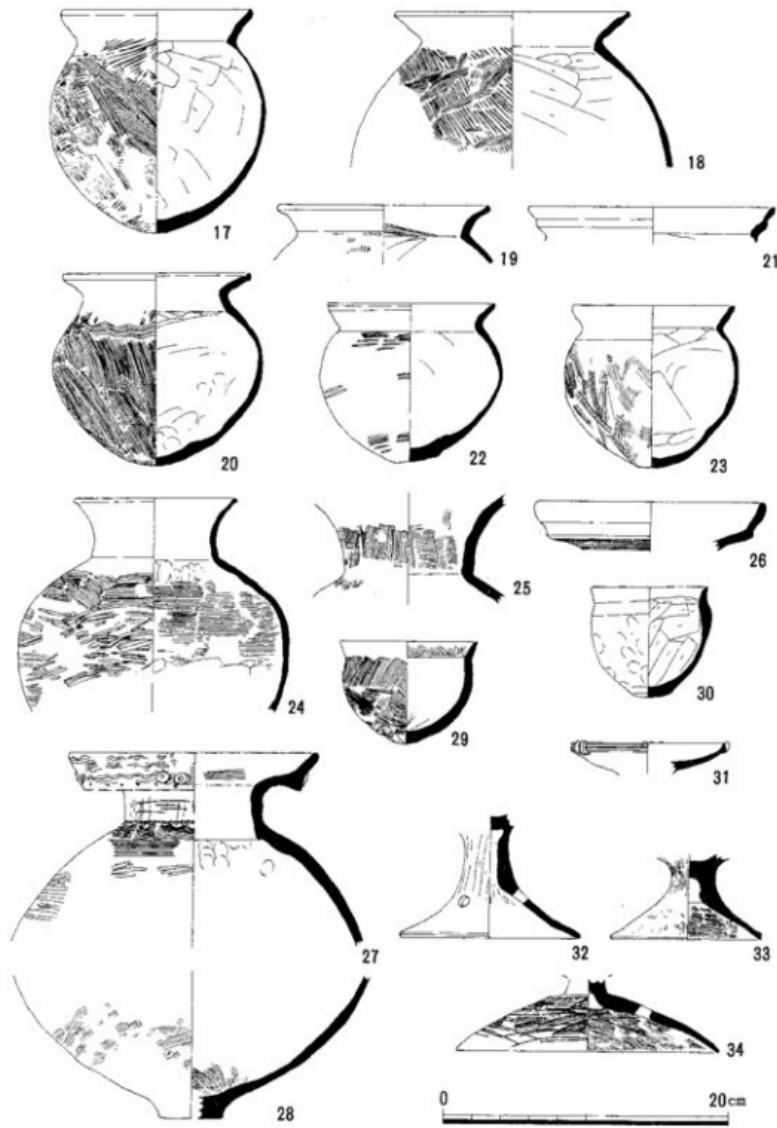


図-35 井戸-5 出土遺物（17~34第5層）

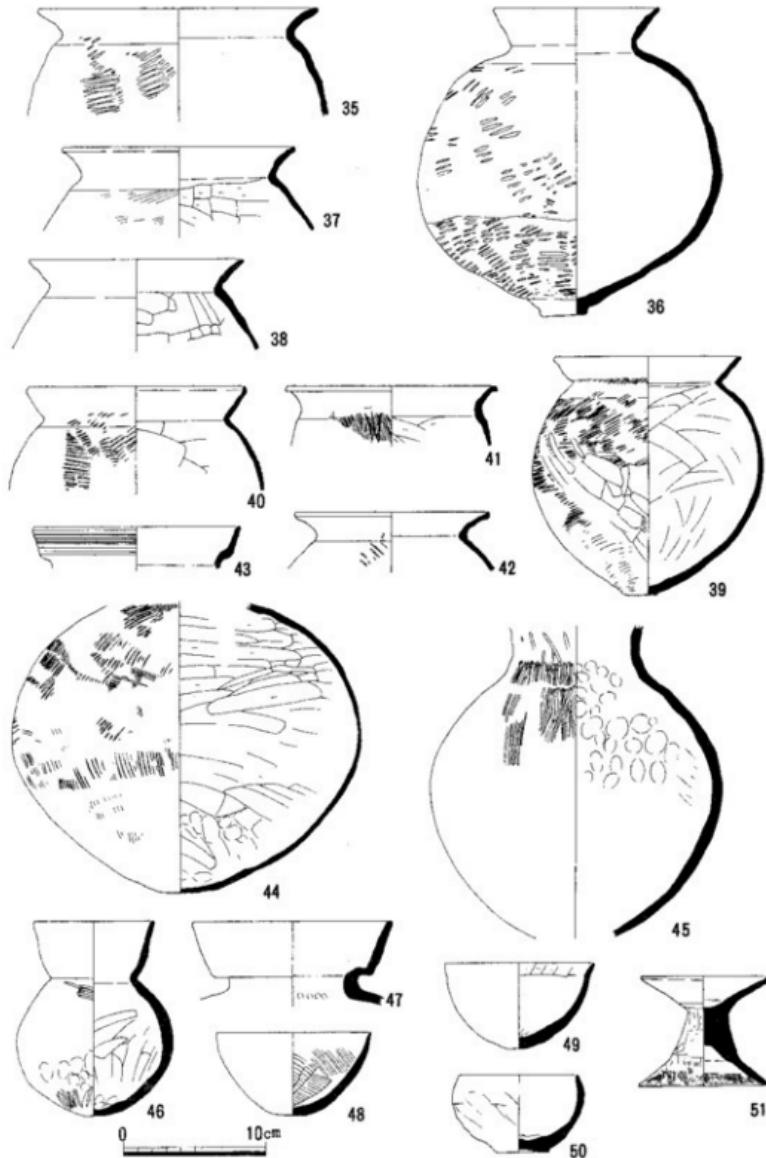


図-36 井戸-5 出土遺物 (35~51第3・4層)

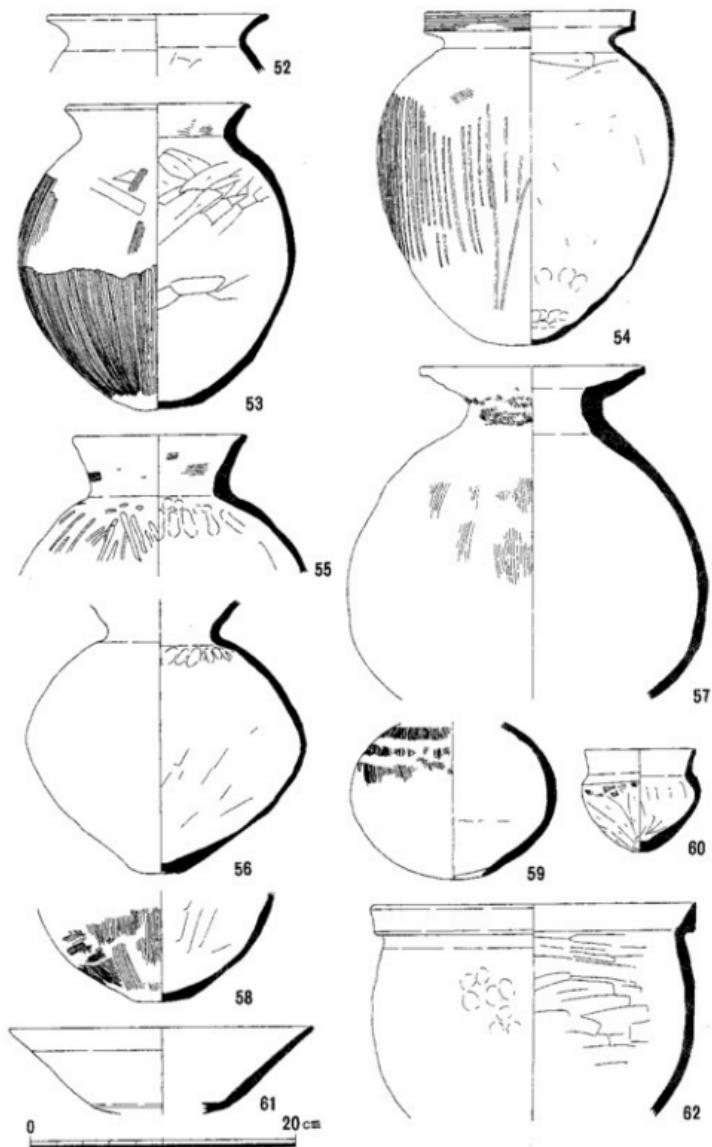


図-37 井戸-5出土遺物 (52~62第3層上面)

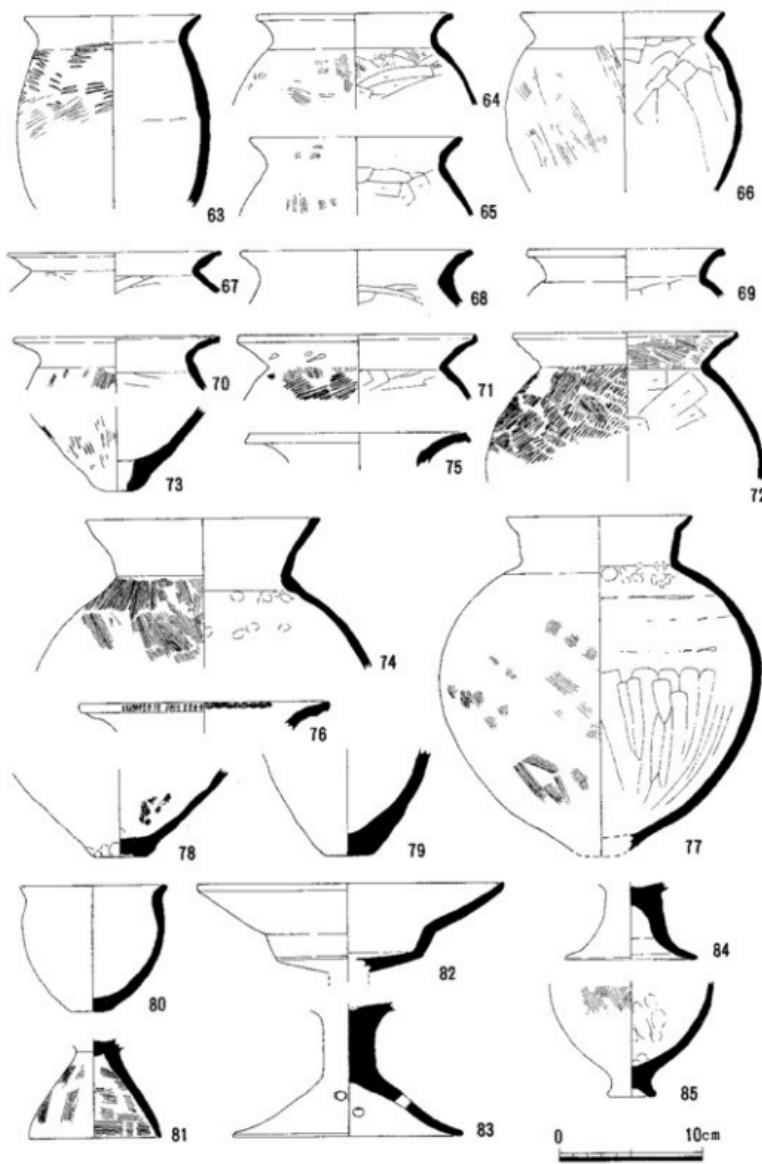


図-38 井戸-5 出土遺物 (63~85第2層)

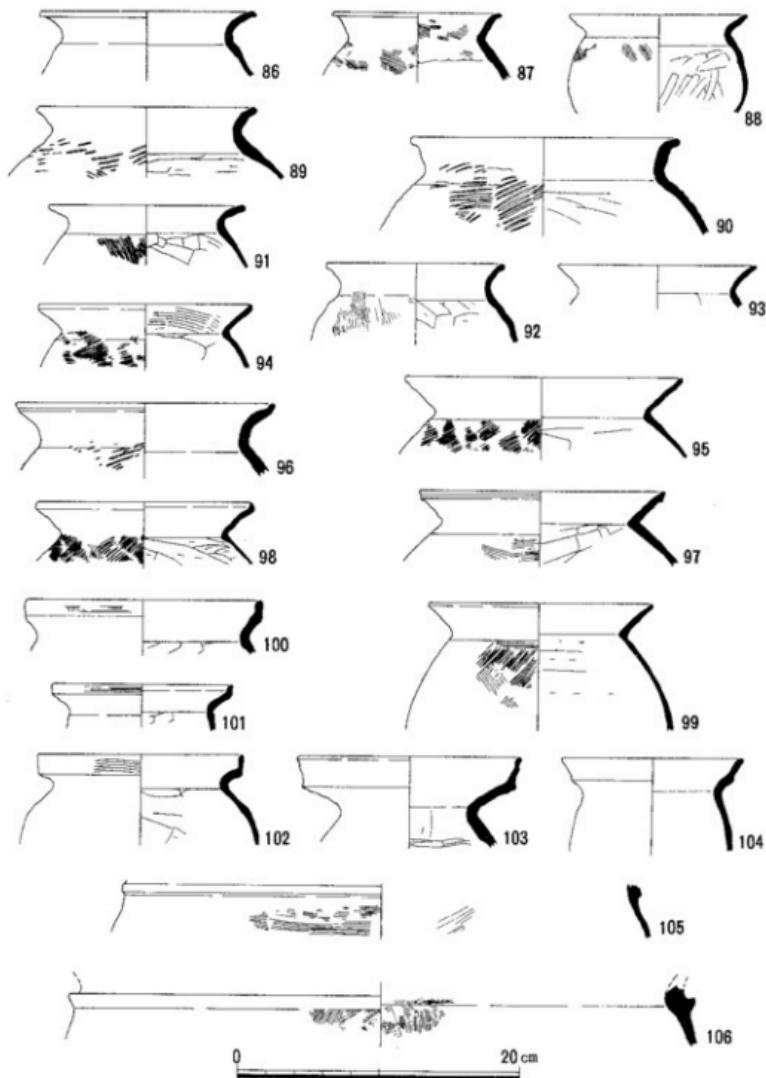


図-39 井戸-5 出土遺物 (86~106第1層)

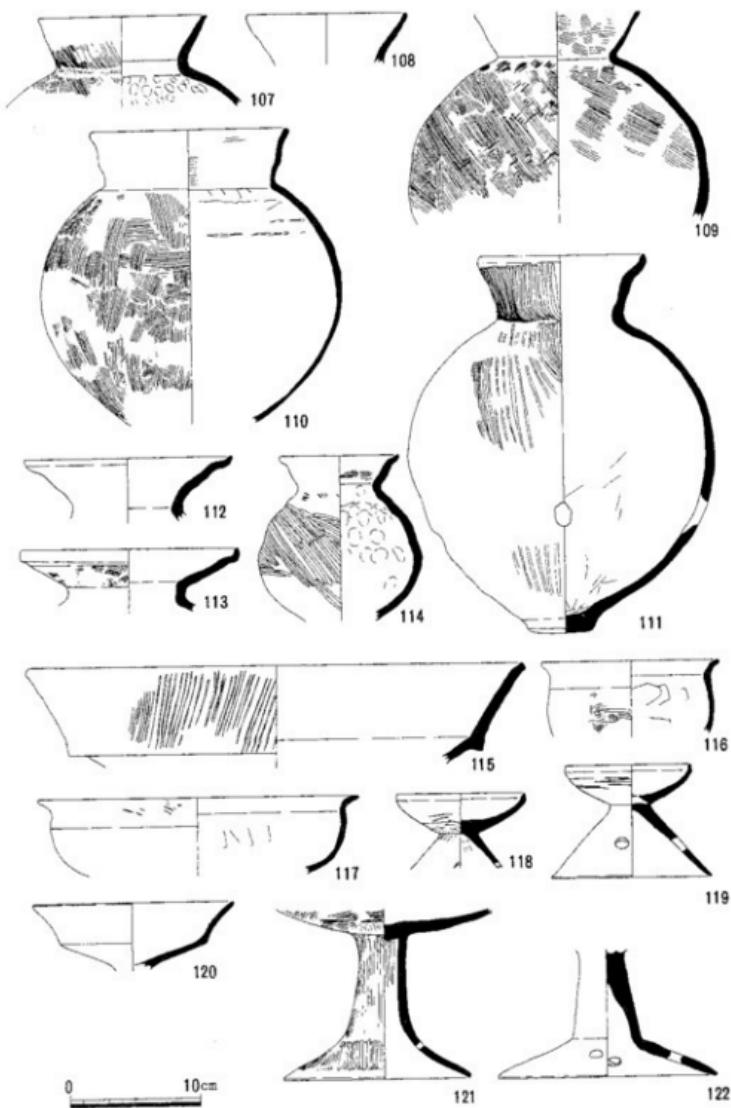


図-40 井戸-5出土遺物（107~122第1層）

105・106は器種不明である。大形の鉢であろうか。いずれも頸部の破片と考えられ、外方へのびる口縁に続くのである。105・106ともに貼り付け突帯がみられ、突帯の断面は105が扁平な台形、106が三角形状を呈する。外面はハケ調整。106には工具の当たり痕がみられる。内面は105がハケメをナデ消し、106はハケ調整。突帯部分での復元直径は105が36.6cm、106が43.6cmとなる。105は暗茶褐色、106は暗褐色の色調を呈する。

107～115は壺。107～111は直口壺。107～109は直線的に外方へ開き、110はやや屈曲しながらほぼ直立し、111は外反する口縁が端部で立ち上がる。112・113は大きく開く口縁が端部で立ち上がる。113の口縁部外面はタタキをナデ消している。114は小形の壺。体部外面には左上がりのヘラミガキがみられる。内面はユビオサエ、ナデで調整する。115は大形の二重口縁の壺である。外面に幅1mm弱の細かいヘラミガキを施す。復元口径は、37.4cmである。

116・117は鉢。116は短く外反する口縁部を有する。体部外面は細かいハケメの後に粗いハケメ、内面はヘラケズリ調整。117は復元口径24.0cmとなるが、口縁の10%のみを残す破片であり、しかもやや歪んでいるため、もう少し小さくなるかもしれない。体部外面ナデ、内面板ナデからナデ調整。口縁外面の一部にタタキメが残る。118・119は器台。いずれも外面にヘラミガキを施しており、脚には円孔がみられる。120～122は高杯。120は二段に広がる杯部。121は高い脚部を有し、外面にタテ方向のヘラミガキを密に施す。四方向に円孔を穿つ。122も四方向に円孔を穿っている。

井戸－6（図41・42）

1～11は第7層暗灰色粘土から出土。

1～11はすべて甕である。1～4、8～11は庄内甕。体部がやや張った形態のもの（1・3）とほぼ球形となるもの（2・4）がみられ、口縁端部のつまみ上げが弱いもの（4）もみられる。体部外面の調整は、左下がりのタタキの後にハケメを部分的に施すもの（4・9）、右下がりのタタキの後にハケメを部分的に施すもの（1・11）、ハケ調整のみみられるもの（2・4）がある。体部内面は強いヘラケズリを施すために頸部内面が鋭角に屈曲し、底部まで完存する1～4の底部は、いずれも指頭痕が残っている。5・6は口縁が内弯し、端部で内側へ肥厚する形態の布留甕である。体部は球形を呈する。体部外面はハケからナデ調整。体部内面はヘラケズリ調整であるが、頸部よりやや下からケズリを始めている。体部内面下半から底部にかけてはユビオサエによって調整される。7は直立する口縁の外面に櫛描直線文が施される吉備系の甕。体部はやや縱長となる。外面肩部にはタテ方向のハケメがみられ、それ以下はナデ調整である。また、底部から体部最大径の位置付近までタテ方向のヘラミガキがみられる。体部内面はヘラケズリ、底部はユビオサエによる調整。外面に全く煤が付着しておらず、煮沸には使用されていないようである。外面淡黄灰色、内面黒灰色の色調を呈する。1～7は、いずれも完形、もしくは完形に近いものである。

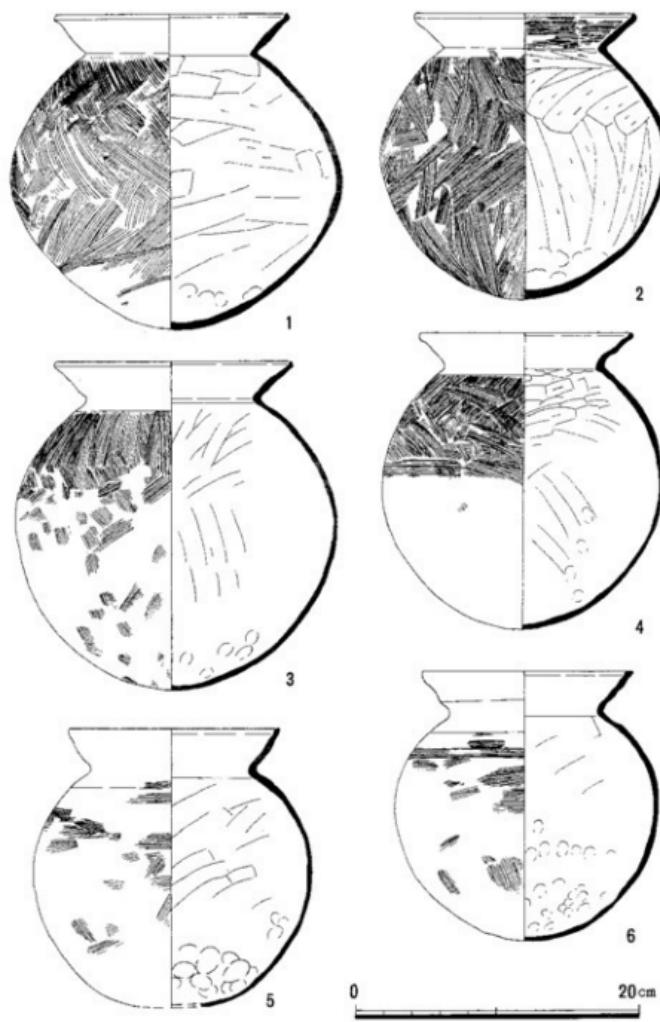


図-41 井戸-6 出土遺物（1～6 第7層）

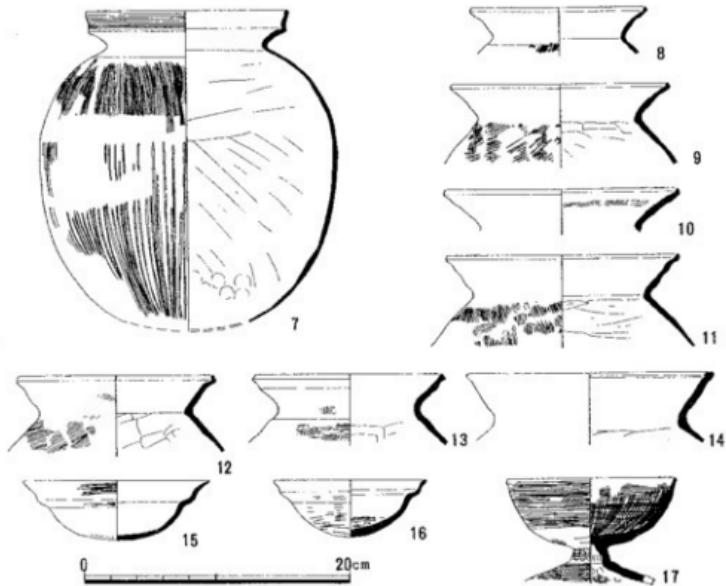


図-42 井戸-6 出土遺物 (7~11第7層、12~17第1~5層)

12~17は第1~5層から出土。

12~14は甕。12は口縁端部がつまみ上げるように立ち上がる。体部外面は左下がりのタタキの後に左上がりのハケメを施している。口縁部外面にもタタキメが残っており、工具の当たり痕もみられる。体部内面は強いヘラケズリを施し、頸部は鋭角に屈曲する。13は口縁端部のつまみ上げがほとんどみられない。外面肩部にヨコハケを施しており、口縁外面にはタタキメが残る。体部内面はヘラケズリであるが頸部より下がった位置から始められ、頸部は滑らかに弯曲する。14の口縁端部は内側へ肥厚する。内面はヘラケズリ。

15・16は鉢。浅い体部から口縁が二段に外方へのびる。15のほうは口縁が長く、外反も強い。体部外面はヘラケズリからナデ調整、そしてヨコ方向のヘラミガキを加える。内面はナデ調整。16は内面にもヘラミガキがみられる。17は高杯。杯部は深く、口縁は内湾氣味に立ち上がる。脚は大きく裾広がりとなり、四方向に円孔が穿たれる。外面はナデ調整後にヨコ方向のヘラミガキを密に加える。杯部内面にもヨコ方向のヘラミガキを施した後、放射状の暗文風のヘラミガキを加える。脚部内面はユビナデ調整、裾部にはナデに先行するハケメもみられる。暗橙色を呈し、精良な胎土である。

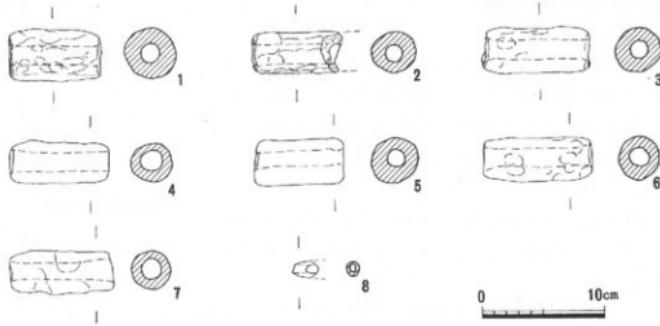


図-43 土鍾

土鍾（図43）

残存状態の良好な土鍾が出土しているので、ここでまとめて紹介しておく。

1～7は太い円筒状の管状土鍾である。それぞれ長さは7.5cm、7.4cm、8.7cm、8.0cm、7.3cm、8.8cm、8.4cm、直徑は4.1cm、3.5cm、3.5cm、3.5cm、3.7cm、3.6cm、3.6cm、孔徑は1.6cm、1.3cm、1.5cm、1.5cm、1.2cm、1.5cm、1.3cm、重量は155.2g、92.5g、150.1g、99.8g、127.1g、118.5g、101.5gを測る。ただし2の長さ、および重量は現存値である。長さは7.3cm～8.8cmと差がみられるが、直徑は1を除くと3.5～3.7cmとはば一定する。これは孔徑がほぼ一定することによるものと考えられる。成形はすべてユビナデ、ユビオサエによるものであり、直徑1.3cm前後の丸棒に厚さ1cm強の粘土を巻きつけ、指頭で成形したものである。1は両端面を板状のものに押えつけて成形したようであり、端面が平坦になっている。そのためか、1のみ太短い形態となっている。胎土は石英、長石、雲母、角閃石を含み、茶褐色を呈する。

1・2は井戸-5第2層、3は井戸-5第1層、4は井戸-3第3層、5は井戸-4第2層、6・7は包含層から出土しており、いずれも庄内期のものと考えられる。

8は流線形を呈すると考えられる管状土鍾の破片である。現存長2.1cm、現存直徑1.4cm、孔徑0.6cmの小形品である。土師器・須恵器を併出するピットから出土しており、古墳時代後期に下るものと思われる。

③古墳時代中～後期の遺物

堅穴住居－2（図44）

1・2は高杯。杯部は浅く、口縁はやや内弯する。内外面ともにナデ調整。脚は欠失している。脚を接合する際に、棒状工具を杯部底面に刺し込んで、脚の接合を図っているようである。1は堅穴住居北東隅、2は南西隅から伏せた状態で出土している。

ピット（図45）

1・4はピット-31、2はピット-32、3はピット-33、5はピット-34、6は建物-2のピット-7、7はピット-35から出土している。

1・2は直口壺。外上方へ直線的にのびる口縁部である。1は体部外面ハケメ、内面はヘラケズリ、頸部はユビナデ。2は体部外面ユビオサエからナデ、内面はヘラケズリで調整する。

3は甕。口縁は外反し、端部を丸くおさめる。体部外面タタキ、内面はヘラケズリによる調整。口縁部内面にはヨコハケが残る。

4は小型丸底壺。口縁は内弯気味にのびる。外面はヨコ方向のヘラミガキ、口縁部内面は放射状のヘラミガキ、体部内面は板ナデからナデ調整。

5は器台。口縁端部は、つまみ上げるように立ち上がる。内外面ともにナデ調整。

1～5は庄内期の土器である。

6・7須恵器。6は高杯脚部。脚端部は屈曲して下方へ垂下する。三方向に長方形の透し窓が開けられる。外面カキメ調整。

7は鉢。外面に突線がめぐり、その上下に各2条の波状文をめぐらせる。波状文施文後、外面底部を手持ちヘラケズリ、内面底部はユビオサエによって調整する。底部は、おそらく平坦になるであろう。

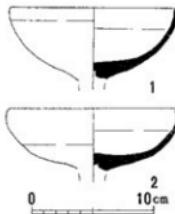


図-44 堅穴住居-2
出土遺物

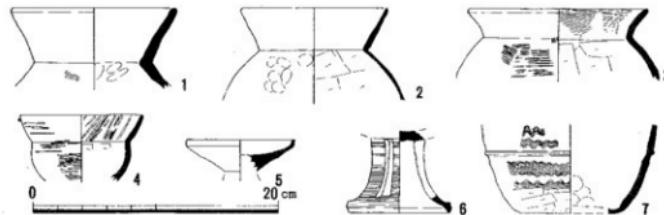


図-45 ピット出土遺物

土坑-1 (図46-10~13)

10は須恵器杯蓋。外面にやや鋸い縞がみられる。口縁端部は凹面状をなす。11は須恵器甕。体部外面に2条の凹線がめぐり、その間を右下がりの櫛状工具による刺突文で埋める。

12は土師器の小形の壺。器壁は厚く、表面の凹凸が激しい。体部外面はナデ、頭部直下にハケメがみられる。体部内面はユビナデ、底部ユビオサエ、粘土紐の積み上げ痕が顕著に残る。13は土師器の甕。体部外面はタタキの後、下半のみ左上がりのハケメ。体部内面はヨコハケ後、部分的に斜め方向にナデ上げる。口縁内面はヨコハケ。ハケメはいずれも粗いものである。

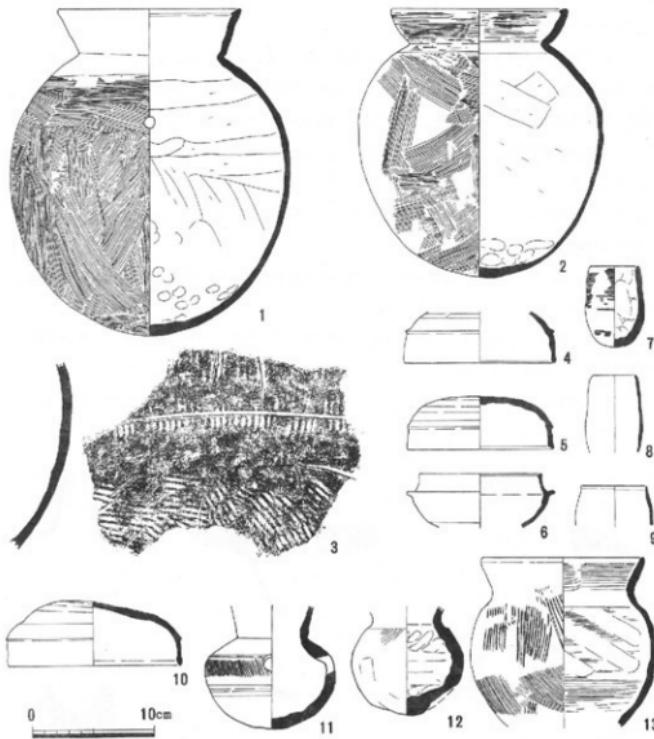


図-46 土坑出土遺物 (1・2 土坑-3、3~9 土坑-5、10~13 土坑-1)

土坑-3(図46-1・2)

土坑内から2個重なって出土した甕である。どちらも縦長の体部であり、口縁は内凹して端部で内側へ肥厚するが、1の端部は内傾する面をなし、2の頸部は平坦面をなす。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ、内面底部はユビオサエで調整する。1の肩部には、焼成後に直径9mmの円孔が穿たれる。1は口径14.6cm、器高26.5cm、体部最大部22.7cm。2は口径14.2cm、器高21.8cm、体部最大径19.9cm。1・2の口径はほとんど変わらないが、体部は2のはうが小さくなっている。口縁も2のはうが短くなっている。布留式土器の中でも新しいものと考えられる。

土坑-5(図46-3~9)

3は土師質の韓式系土器。壺の体部であろう。2本/cm、原体幅4cmの平行タタキを施した後、部分的にナデ、幅3mmの巻線がめぐる。外面灰黄褐色～灰褐色、内面は淡灰褐色を呈し、内面上半は黒色を呈する。焼成は良好。石英・長石・雲母等の砂粒を含む胎土である。

4~6は須恵器蓋杯。4・5は稜線がめぐり、端部が凹面をなす杯蓋。6の杯身も口縁端部が凹面をなす。

7~9は製塙土器。コップ状の形態である。7の外面は平行タタキ、9の外面はユビナデ。

包含層出土遺物(図47)

1は弥生土器の壺口縁部。口縁端部と上面に波状文をめぐらせ、竹管を押しつけた円形浮文を貼りつける。

2~4は土師器。2は把手付の鉢。外面ハケからナデ、内面ハケから板ナデ。3は高杯脚部。内外面ともナデ調整。4は把手。上面に深さ1.4cmの切り込みを入れる。

5・6は須恵器蓋杯。5は明瞭な稜のみられる杯蓋。6は短い立ち上がりを有する杯身。

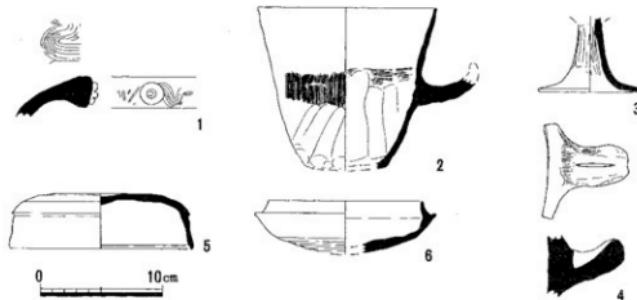


図-47 包含層出土遺物

④飛鳥～奈良時代の遺物

溝-1（図48）

1～6は土師器。1～5は杯。1は浅い体部から口縁が外反する。外面ユビオサエ、内面ナデ調整。2は外面全体にヨコ方向のヘラミガキ、底部は四分割のヘラミガキ。3～5は底部外面ユビナデ調整。4の外面にはヨコ方向のヘラミガキ、3～5の内面には放射状の暗文がみられる。

6は壺。口縁は内湾し、端部で内側へ肥厚する。体部外面は右下がりのタタキをナデ消しており、体部内面はナデ、下半はケズリ上げて調整する。布留式土器の特徴が残っており、古墳時代中期のものであろう。

7～10は須恵器。7は杯蓋。鈍い稜がみられ、口縁端部は凹面をなす。8は杯身。立ち上がり高く、端部で面をなす。外面に3本の直線からなるヘラ記号がみられる。9は壺。肩部が強く張る。頸部に20条1単位の波状文を密に施す。体部外面下半はナデ、内面底部はユビナデ、他は回転ナデ調整。10は壺の口縁部。口縁は外反し、端部で上下へ拡張する。端部直下に鈍い稜線がめぐり、その下に波状文がめぐる。

溝-1からは、これ以外にも瓦が多数出土しているが、瓦についてはまとめて後述することにしたい。

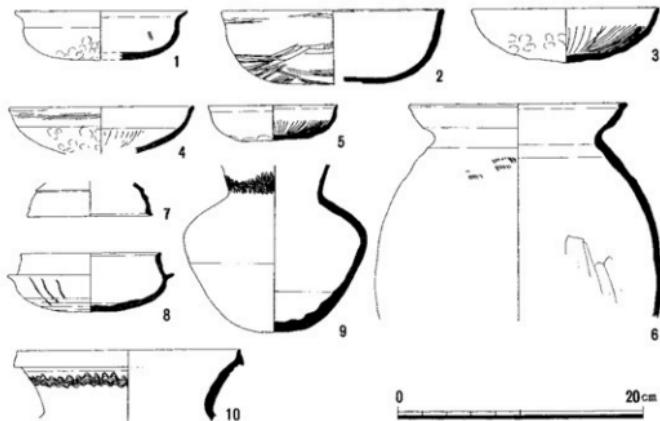


図-48 溝-1 出土遺物

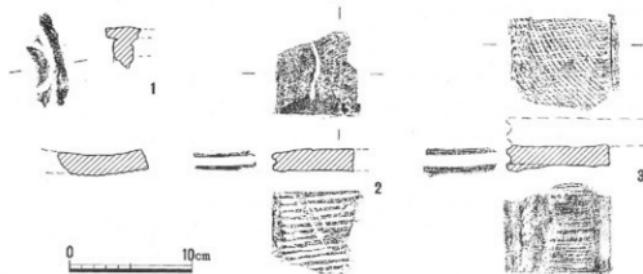


図-49 軒瓦

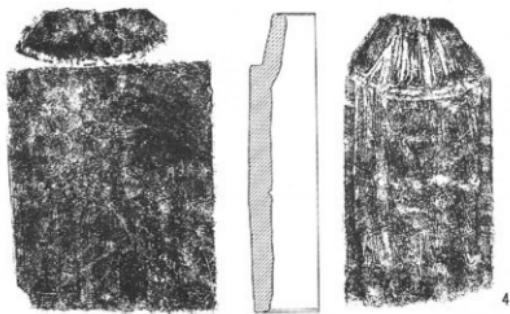
瓦(図49~52)

1は蓮華文軒丸瓦。過去の出土例から素弁八葉蓮華文と考えられる。外区素文、幅0.7cm、高さ0.9cm。

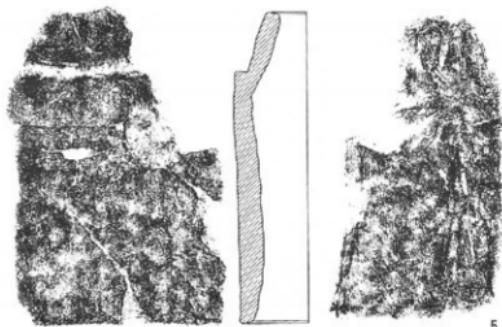
2・3は重弧文軒平瓦。2は平瓦端面に1本の弧線を刻んだものである。凸面は2本/cmの平行タタキ。3は三重弧文であろう。段頸式の頸部分が剥落したものである。凸面側は平行タタキ、凹面側は糸切り痕とヘラで刻みつけた平行する直線がみられる。接着の補強を図ったものであろう。

4・5は丸瓦。どちらも玉縁式である。4の凸面は3本/cmの粗タタキメをナデ消しており、凹面は布目、糸切り痕がみられる。長さ36.8cm、幅15.9cm、完形である。5の凸面はナデ、凹面には布目、糸切り痕が残る。長さ38.3cm、幅16.4cm。

6~16は平瓦。6は一辺1.1~1.7cmの大きな方形を呈する格子タタキを凸面に施す。凹面は布目、糸切り痕をナデ消している。側縁は一部ヘラケズリ。端面もヘラケズリで調整する。7は細かい格子タタキを55°前後の角度で凸面に施す。格子は1cmあたり2個を数える。凹面は10本/cmの布目。8も同様な格子タタキを施すが、部分的に格子タタキに先行する1.5本/cmの平行タタキがみられる。凹面は布目、端部近くに格子タタキが部分的にみられる。側縁はヘラケズリ調整。9は格子タタキを斜方向に施した後、2~3本/cmの平行タタキを斜方向に施す。凹面は布目、糸切り痕が残る。側縁はヘラケズリ。10は平行線に複数の斜線が入るタタキを施している。側縁ヘラケズリ調整。断面に粘土板の維ぎ目がみられる。11は2本/cmの平行タタキを縦方向に施した後、部分的に同一の平行タタキを斜方向に施す。原体幅は6cm前後である。凹面には布目、糸切り痕がみられる。12は3~4本/cmの細かい平行タタキを斜方向に施す。凹面には布目が残り、押板幅は1.8~2.4cmである。側縁ヘラケズリ。厚さは0.9~1.3cmと非常に薄い。須恵質で硬質である。13は1本/cmの粗い平行タタキを横、斜、縦の順に施す。凹面



4



5



0 20cm

図-50 丸瓦

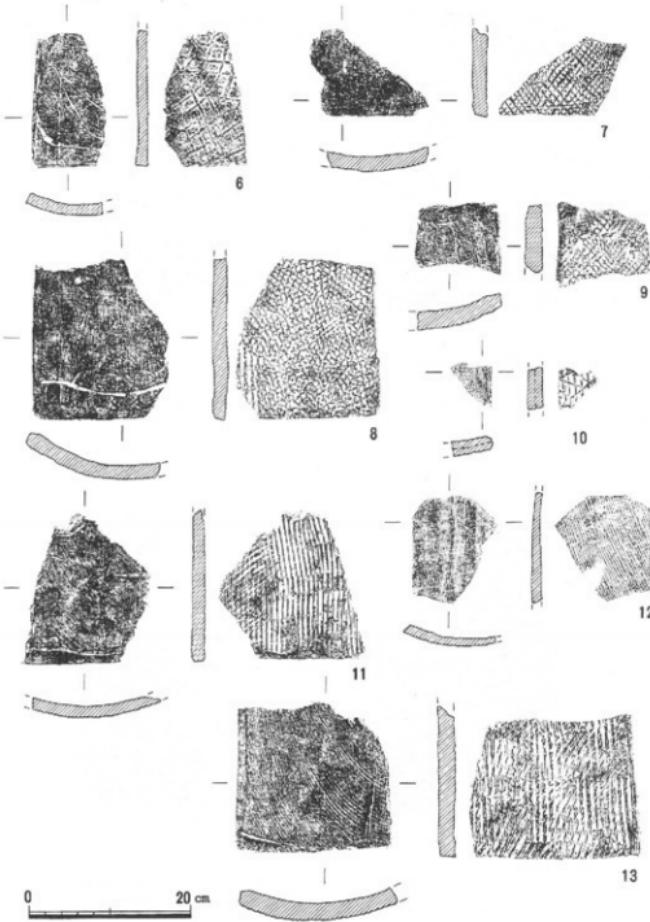


图-51 平瓦

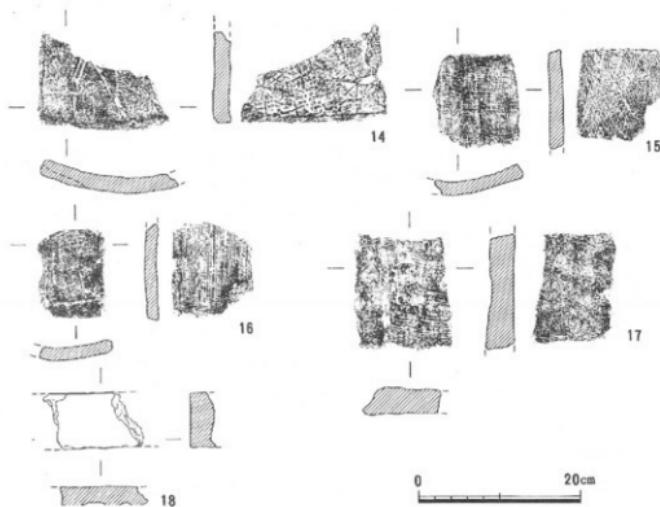


図-52 平瓦・埴

は布目、糸切り痕が明瞭に残る。側縁ヘラケズリ。14は長方形の格子タタキを施した後、斜線を加えた格子タタキを施す。側縁は分割破面をヘラケズリするが、十分に調整できていない。S形の粘土板羅ぎ目がみられる。15は4本/cmの縄タタキを鋸歯状に施す。凹面は布目、幅約1.4cmの枠板痕が残る。側縁の一部に分割破面が残る。16は3~4本/cmの縄タタキを一部擦り消している。凹面も布目を一部擦り消している。側縁はヘラケズリ。平瓦は、いずれも桶巻き作りによるものと考えられる。

17・18は埴であろう。17の一面はナデによって、ほぼ平滑に仕上げられているが、他の一面は平行する糸切り痕がみられるのみで、凹凸が激しい。側面の一方が残存しており、50°前後の斜面となる。ナデによって調整されており、角は丸味をおびている。厚さは2.6~3.5cmを測る。18は方柱状を呈すると考えられる。3面のうち、2面がナデ、1面が未調整である。幅は6.7cmを測る。

3は溝-1、10は溝-4、2・4・5・7・8・11・13・15・17は井戸-1、12・14は井戸-2、他は包含層からの出土である。

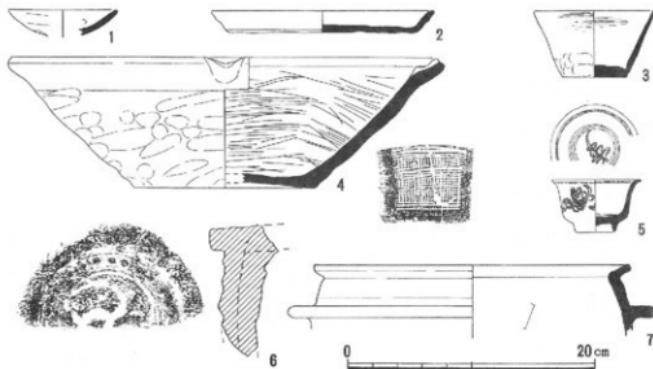


図-53 中近世の遺物

⑤中～近世の遺物（図53・54）

1～3は土師器。1は小皿。口縁端部はやや角をもつ。全面ナデ調整。2は皿。平坦な底部から外上方へ口縁がのび、端部は丸くおさめる。外面底部ユビオサエからナデ、内面底部ナデ調整。口径18.0cm、器高1.9cm、茶褐色を呈する。3は小形の鉢。平坦な底部から外上方へまっすぐ口縁がのびる。外面上半ナデ、下半ユビオサエ、底面はヘラ切り後にナデを加える。内面はナデ、底面はヘラケズリ。口縁はヨコハケ後にヨコナデを施す。口径9.8cm、器高5.4cmを測る。

4は瓦質の鉢。底部は上方へややふくらみ、体部は上外方へのびる。端部はやや外傾し、丸くおさめる。端部内側は強い凹面をなす。一箇所に外傾する口を有する片口の鉢である。外面はユビオサエ、ユビナデ、内面はナデの後にヨコ方向のヘラミガキを施す。底部は内外面ともにナデ調整。内面口縁直下に約5cm四方の施文がみられる。細かい格子状のスタンプを押し付けた後に、ヨコ方向のヘラによる沈線を加えたものと考えられる。内外面とも黒灰色を呈し、断面は赤褐色を呈する。

5は染付の碗。口縁端部は強く外反する。口径6.8cm、器高4.3cm。

6は巴文軒丸瓦。三ツ巴であり、その周囲に圓線に挟まれて珠文がめぐる。瓦当直径は16.0cm前後と推定され、瓦当厚は3.0cmである。丸瓦との接合時に、瓦当裏面に粘土を厚く補充している。

7は土師質の羽釜。口縁は外方へ短くのびる。鈴はほぼ水平に貼り付けられ、端部でやや肥厚する。外面ナデ、内面板ナデからナデ調整。口径25.4cmと復元される。

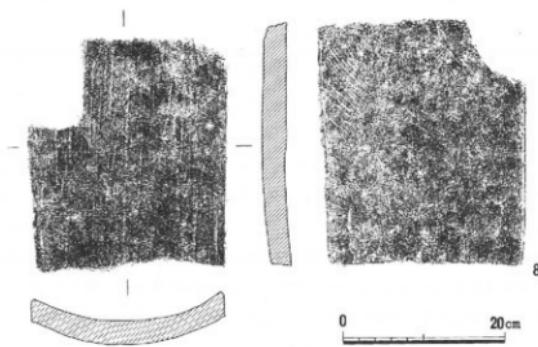


図-54 中近世の遺物

8は平瓦。凸面は丁寧にナデられており、ナデに先行する調整は不明である。凹面はタテ方向にケズリを施した後にナデている。側縁はヘラケズリ、側縁と凹面のなす角部はナデ。広端縁は2度のヘラケズリによって段がみられ、凹面の広端縁側もヘラケズリを施す。狭端面もヘラケズリ。一部を欠くが、ほぼ完形であり、長さ30.3cm、狭端縁幅22.3cm、広端縁幅24.3cm、厚さは2.5~2.9cmを測る。灰色を呈し、焼成良好である。

1はピット-22、2・3は土坑-7、4は井戸-1上層、5は井戸-1下層、6は井戸-1最下層、7は井戸-2最下層から出土しており、8の平瓦は井戸-1掘方内に井戸枠を支えるために据えられていたものである。

(安村)

第4章 II区の調査

1. 概要

II区は対象地の西端に設定した。I区西端から約60m隔たる。長さ39m、幅6~7mで東西に長く、南辺は大和川に接する。I区同様、調査区南辺は増水時の流水によって大きく抉られ、崖面となる。調査区の設定を工事予定範囲のみとしたことから、北側についてはI区で認めた旧流路の痕跡は確認し得なかった。93年2月に実施した試掘調査区が本区のほぼ中央にある。

調査区の現地表標高は16.5m。大雨後の増水時には水流が河川敷きをも覆うことから、砂が厚く堆積する。調査ではその砂層を重機により除去し、以下を人力により掘削、精査した。また一部で断ち割りし、下層の状況把握に努めた。

砂層（図-56、第1~3層）の厚さは約50cm。現代の廃棄物が混在する。次に遺物包含層でもある黒褐色砂質土（第4層）があり、それを除去すると黄褐色土（第9層）をベースとする遺構面が現れる。標高は15.5~15.8m。遺構面はこの1面のみで、各時代の遺構が混在する。中世遺構の遺存が浅いことからすると、流水による遺跡の損傷は想像以上の規模である。黄褐色土（第9層）は繩文晩期の遺物を含む包含層でもあり、別章で後述する絵画土器もおそらくこの層からの出土と思われる。

2. 遺構

遺構として竪穴住居、溝、土坑、ピットを検出した。時期的には古墳時代前期と中世が主である。遺構の分布は調査区西端で希薄である。

108竪穴住居は調査区の東南隅で検出した。長辺340~390cm、短辺230~290cmと規模は比較的小さい。深さは5~10cm遺存するのみである。南隅の100~140cmの範囲に焼土が薄く床面に残る。埋土に土器片を含むが細片であり、詳細な時期はわからない。住居に重複するピット等については、後後に上層から掘り込まれたものと思われる。

031焼土塊が調査区東半中央にある。40×20×10cmの淡い褐色を呈する焼土塊である。南隅は029土坑、030土坑によって断ち切られている。竪穴住居に付随するカマド状遺構かと考え周辺を精査したが、それらしき痕跡は検出できなかった。

090溝は調査区の西半で検出した。現存長約1000cm、幅110~140cm、深さ60~70cmを測る。東南から西北方向へと調査区を斜めに横切り、北端近くになってやや北寄りに向きを変える。底面のレベルはほぼ一定で、流れの方向は確定できない。埋土は主として暗灰黄色土、黄灰色系細砂の2層で（図-56）、遺物（図-59、14~17）は上層からの出土が多い。壁面、底面は直線的であり、自然流路とみるよりも人工的に掘削されたかのようである。

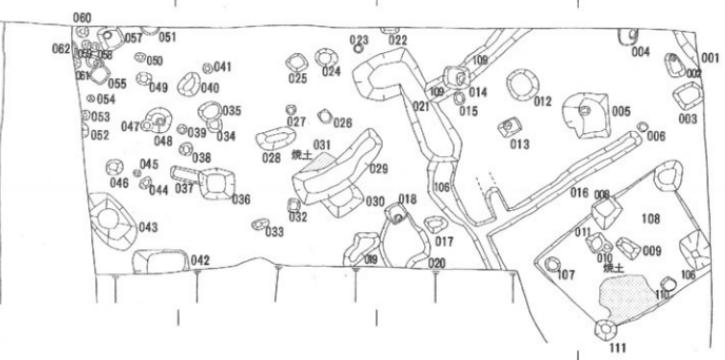
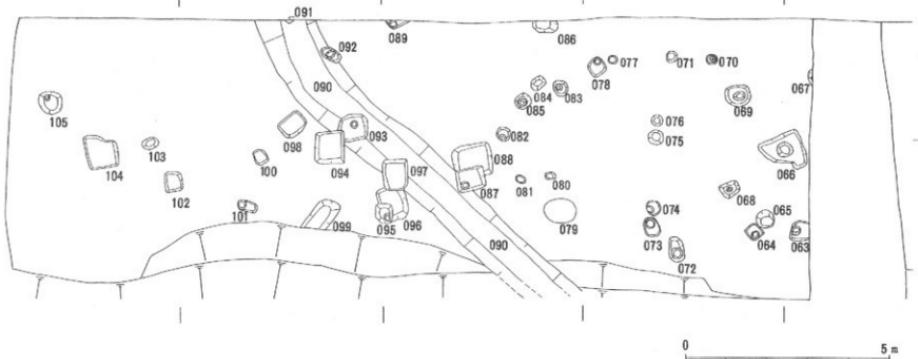


図 - 55 II 区 遷構 平面図

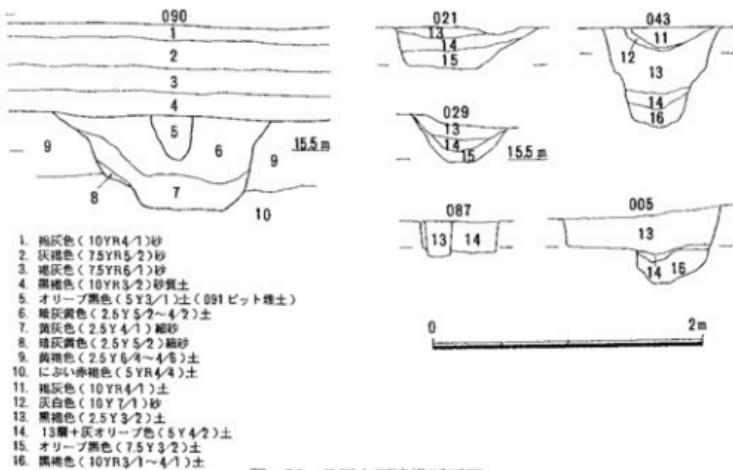


図-56 II区主要遺構断面図

079土坑は090溝の南端東側に検出した。検出平面は長径80cm、短径60cmの楕円形を呈する。袋状に110cm掘削され、底面は径80cmの円形となっている。底部から壺、小型丸底壺（図-58、1～5）が出土した。埋土上方では中世の遺物（図-59、10）も混じる。

043土坑は調査区中央、やや南寄りで検出した。検出平面は長径160cm、短径90cmの楕円形を呈する。深さは75cm。急な角度を持って掘削され、中程には段を有す。底面径は50cmで、円形である。埋土中から中世遺物の出土があった。細片が多く、図示できるものは少ない（図-59、12）。

005土坑、016溝、021溝（土坑）をはじめとして調査区東半にある遺構群は埋土中に瓦器、土師器を含む。016溝は幅30～50cm、深さ10～25cmで、調査区外南から延び、100cmのところで東北方向に450cm派生する。さらに北へ派生する1条があるが、70cm延びたところで消失する。南から延び、021と接する部分については埋土が同一であったことから同じ遺構としたが、南半が直線的であるのに対し、北半は形が歪む。この北半を別箇のものとし、直角に屈曲する部分を以て、調査区東南隅を区画する溝と考えることもできる。

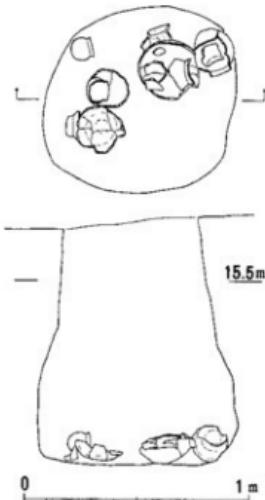


図-57 079土坑

これらの他に調査区全域で検出した多数のピットがある。一辺35~100cmの隅丸方形あるいは径20~60cmの円形を呈し、深さは5~70cm残る。多くは中世に属するものである。出土土器からこれらの中世遺構については、13世紀後半から14世紀にかけての年代が与えられよう。

調査区西半に集中する隅丸方形状ピットについては埋土中に奈良時代遺物を含む。いずれも細片である。調査区南半が流水により既に失われていることもあり、如何に建物が構成されていたかはわからない。

3. 遺物

図-58は079土坑底部から出土した土師器で、いずれも完形である。

1、2は小型丸底壺。1は口縁部は外面ヨコナデ、内面はハケの後ナデ。体部は外面はハケ、内面は底部から板ナデ。頸部内面や下方に粘土の難ぎ目が残る。浅黄橙色（7.5YR8/2~6/4）を呈する。2は口縁部は外面ヨコナデ、内面はハケの後ヨコナデ。体部は外面はハケ。不定方向に密に施されているため、ハケの単位は不明。内面はハケの後一部ナデ。褐灰色（7.5YR7/2~6/3）を呈する。

3~5は甕。3は口縁部は外面ヨコナデ、内面はハケの後ナデ。口縁端部が僅かに内面に巻き込む。体部は外面はハケ、内面はケズリで未調整のところが残り粗雑である。器壁は厚い。色調は灰褐色（7.5YR5/1~3/3）。4は口縁部は内外ともヨコナデ。斜めに直に立ち上がる。体部外面はハケ、内面は指にて成形後板ナデ。底部に指頭痕が顯著に残る。灰黄褐色（10YR5/1~3/2）。体部から底部にかけてスヌが付着。5は口縁部は内外ともヨコナデ。端部が外反する。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。体部は楕円形で、3と同様に器壁は厚い。色調は黒褐色（7.5YR4/1~2/2）。別稿の奥田氏の胎土観察によると、4、5については山陰系の様相を示すとのことである。

図-59は主要遺構、遺物包含層からの出土遺物である。

6~8は005土坑からの出土。6は瓦器皿。底部外面に指頭痕が残る。内面にはナデの後、粗い螺旋状暗文を施す。7~9（020土坑）は土師器皿。10は079土坑埋土の上方からの出土。体部外面にヘラミガキ、指頭痕が残る。内面はナデの後、ヘラミガキ。また見込には格子状暗文を施す。高台断面は明瞭な三角形を呈する。11、13は019土坑からの出土である。13は三角錐状の手づくね土器。にぶい褐色（7.5YR6/3~5/4）を呈し、内面に粘土紐接合痕が残る。12は043土坑から出土の瓦器純。外面に指頭痕が顯著に残る。内面には雜な波状の暗文を施す。高台は簡素な貼り付け高台である。暗文の重なりから見込みの波状を先に、そして口縁にかけて右回りに円を描いているのがわかる。

14~17は090溝からの出土。14の土師器器台は色調は橙色（5YR6/6~5/6）、胎土は密で精良。脚部端部を欠く。口縁端部はわずかに立上り、内面は放射状にヘラミガキする。15は手づ

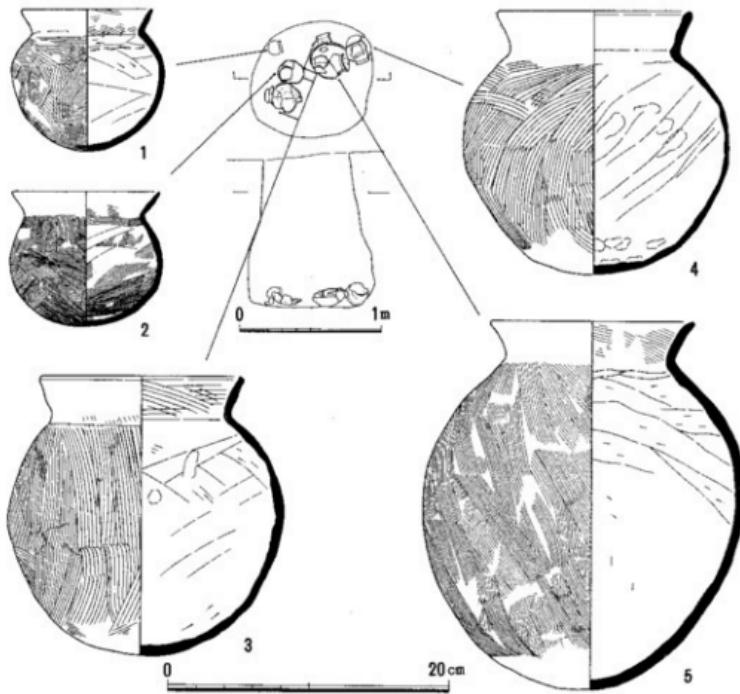


図-58 079土坑出土遺物

くねの小型壺形土器。にぶい赤褐色（5YR5/3～4/4）を呈する。頭部に指頭痕、体部内外面に粘土接合痕が顯著に残る。16は土師器堺。橙色（5YR6/6）。表面は摩滅により判別し難いが、ヘラミガキが認められる。17は壺。にぶい赤褐色（5YR5/4～4/4）。大きく外反する二重口縁である。口縁端部は強く、ナデられたようで、上下に肥厚する。外面屈曲部は大きく張り出し、明瞭な段を有する。外面調整はナデで、わずかにハケも見られる。

18、19は平瓦。遺構面に至るまでの上層での出土である。凸面には18には繩目、19には粗い格子のタタキを施す。凹面は両方とも布目が残る。

20～22は縄文土器。遺構面のベースである黄褐色土からの出土である。20、21の深鉢は口縁端部よりわずか下方にのみ刻目突帯が巡る。褐色（7.5YR4/3～3/3）を呈する。22は浅鉢の底部。器壁は非常に薄い。上端部内側に接合痕が顯著に残る。灰黄褐色（10YR7/2～4/2）。

以上その他に図示できなかったものの、おもに中世遺構から製塙土器の出土があった。総重量にして170gを測り、特に021溝（土坑）からの出土が多い。
（石田）

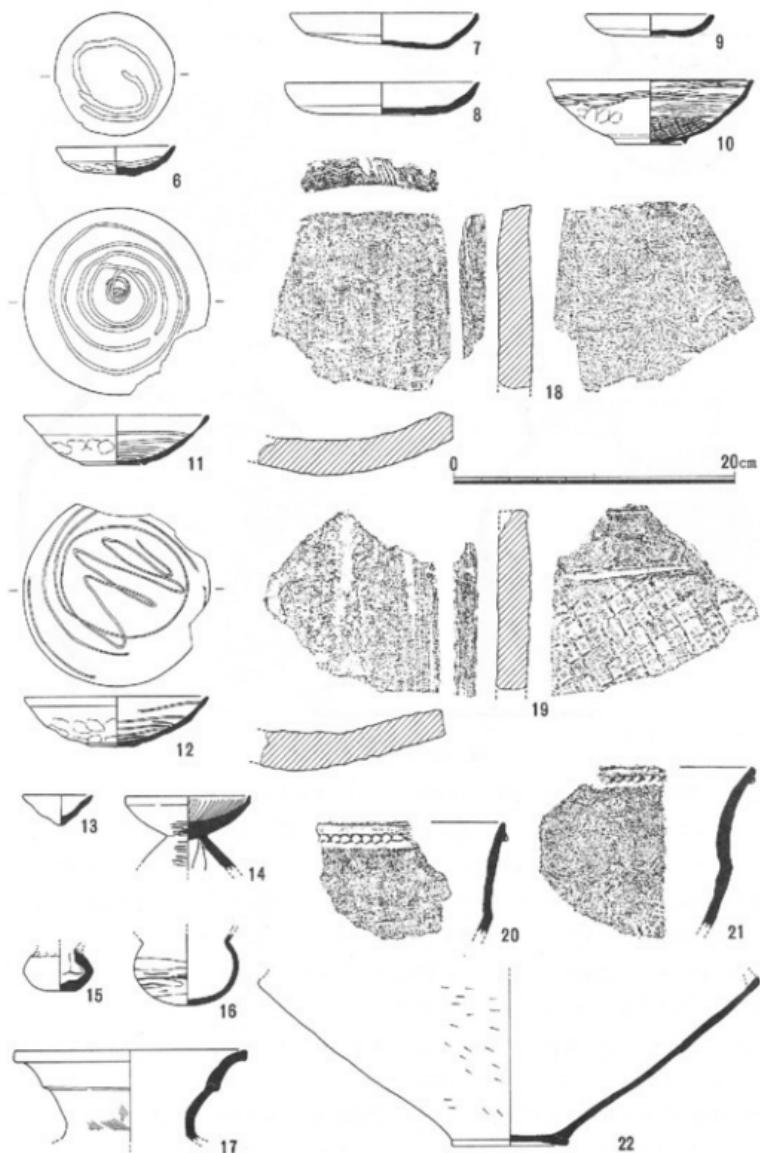


図-59 II区出土遺物

第5章 表採遺物

船橋遺跡は、大和川河床遺跡の一部として位置付けられている様に、常に大和川の河水によって河床が洗われており、遺跡の造構面と共に考古資料が消失している。ただ、その中でも河岸に打ち上げられた遺物は、日進月歩する考古学の進展に少なからず寄与しており、多種多様な遺物の存在と豊富な出土量から船橋遺跡解明の一端を覗かせている。

表採遺物の性格として、出土地点の確認と層位的な関係が不明瞭で、しかも長期に渡り大和川の河水に洗われている事から、器表面の摩滅が激しく、残存状況の悪い遺物が多い。今回、図化できた資料は、柏原市教育委員会で採集した遺物の外に、米尾一幸氏、池田武氏の採集された遺物に負う所が大きかった。特に米尾氏は、石器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦等、多様な遺物を採集しておられ、その中でも注目されることは、7月6日に突帯文土器である船橋式の線刻絵画土器を採集されたことである。この事は、二次的な資料とはいへ重要な出来事であった。

今回の資料では、弥生時代中期から奈良時代までの遺物が見られ、特に古墳時代前期の古式土師器については良好な資料に恵まれた。中でも（16～24）は、それぞれが持つ属性から搬入土器である事を示している。以下各遺物を概観する。

弥生土器

1は壺で、外面には縱方向にヘラミガキ、内面には指押さえと横方向にヘラミガキを加える。端部は貼り付けにより成形され垂下する。2は鉢で、内面に指押さえを施し、底面には九つの穿孔がある。3は高杯の杯部で、内外ともヘラミガキを施し、立ち上がりを貼り付ける。4は壺の底部で、外面を左下がりのタタキと指押さえが見られる。内面は板ナデ調整で、底面に一箇所の穿孔がある。尚、1、3の色調は暗褐色で長石、角閃石を多量に含有している。2、4は茶褐色を呈し、長石、石英を含有する。

土師器

5の壺は、口縁部内面にヘラミガキを加えた後、ヨコナデする。外面肩部もヘラミガキで、その内面には多数の指頭痕が残る。6～10は小型丸底壺である。6～8の外面全体にはヘラミガキを施し、その後に、それぞれヨコナデ、ヘラ削りを行う。内面もハケ後ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ後ヨコナデといった調整が見られる。9は外面から口縁部内面にかけてヨコナデし、内面体部には指押さえを施す。10も同様の調整で、外面肩部にハケ目、その内面はヘラ削りされる。11は製塙土器の脚部で、外面に多数の指頭痕が残る。外面の色調は乳白色、内面は黒灰色を呈し断面の観察から二重焼成を受けている事が分かる。又、胎土は荒く石英を多量に含有する。12～14は、庄内式壺である。12の体部は1cm当たり約14本のハケ目を、13は約10本のハ

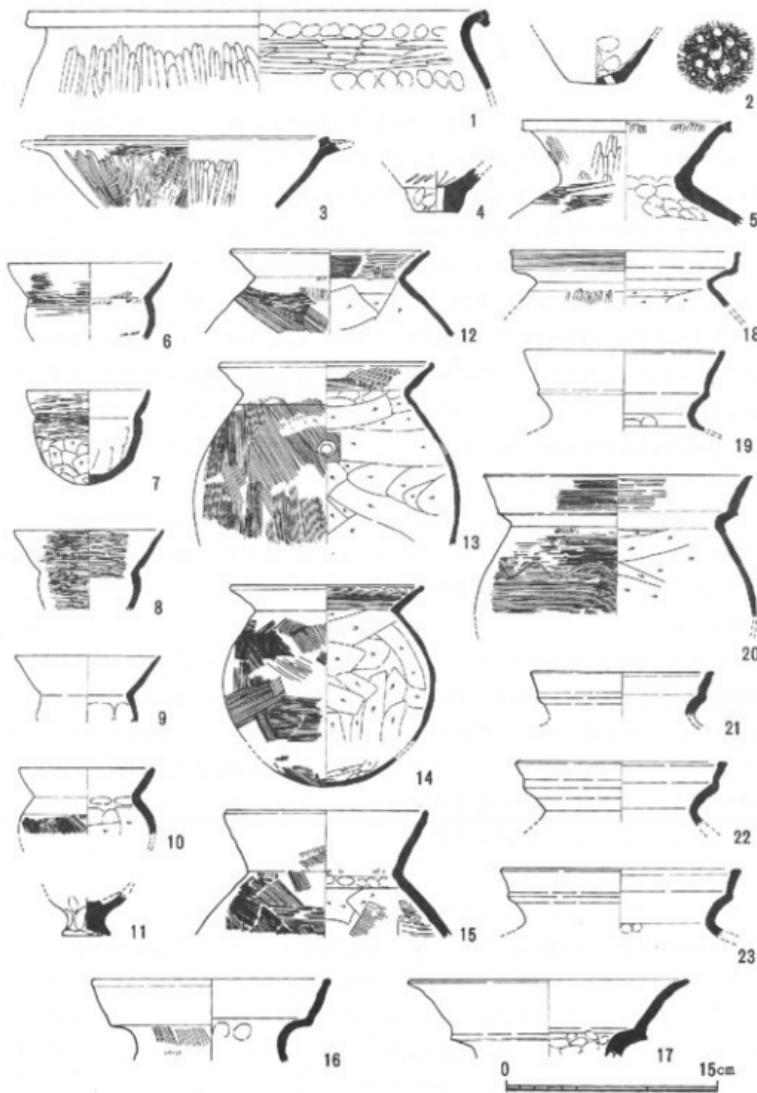


図-60 表採遺物（1）

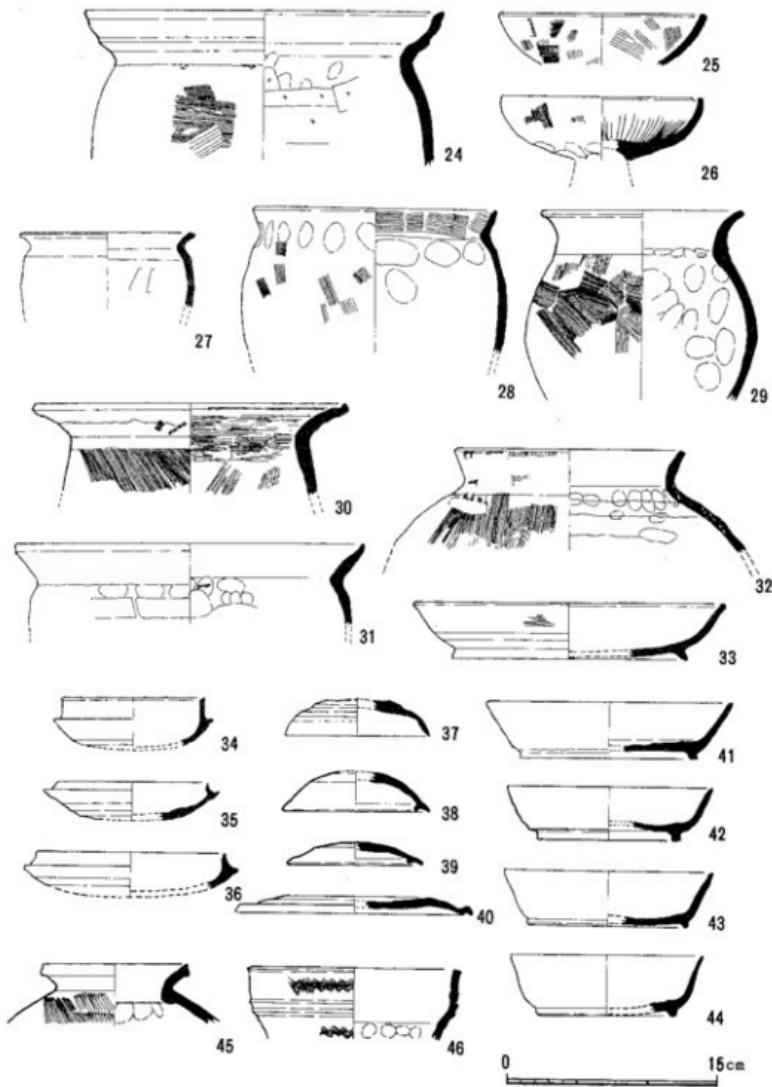


図-61 表採遺物(2)

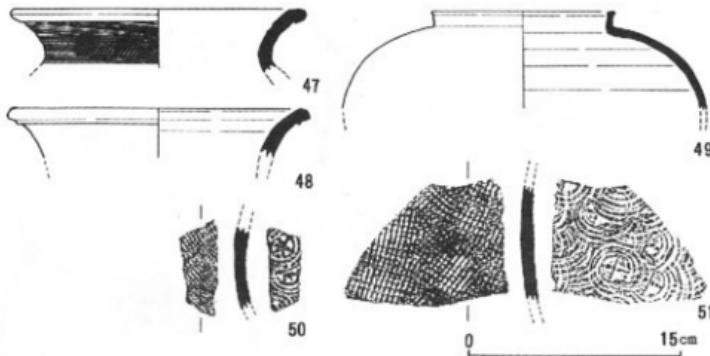


図-62 表採遺物（3）

ケ目が入る。口縁端部は、いずれも摘み上げられているが、12はやや丸みを帯びている。頸部内面はいずれもなだらかに屈曲しているが、13は頸部下方に指押さえが加わり、肩部に一箇所穿孔が見られる。14は外面肩部に左下がりのタタキを加えた後、右下がりで1cm当たり約10本のハケ目を施す。又、内面頸部は、鋭い稜線を持って屈曲する。次に15～17であるが、15は体部外側から口縁部内面にかけてハケを施し、その後に口縁部をヨコナデする。体部内面は、ヘラ削りの後、板ナデ調整されており、断面の観察からすると粘土紐積み上げ痕が顕著に残る。16、17は二重口縁壺で、いずれの頸部内面も指押さえされているが、17は段に稜線を持つ。18～24は甕の口縁部である。18は、直立する口縁部に櫛描直線文が巡らされ、外面肩部にはヘラミガキを施す。19、20はいずれも段を持つ。20の口縁部はハケ目調整を行い、体部はタタキの後ヨコハケを加え、一条の波状文を持つ。21、22、23は外面に向かってやや開き気味の二重口縁を持ち、口縁部から頸部にかけてヨコナデされる。24は、体部にタタキとハケ目が併用され、口縁部はヨコナデされる。又、口縁径は体部径よりも大きく開き、器壁は比較的厚手である。25、26の高杯はいずれも口縁端部を内側に丸く収める。25は内外ともハケの後ヨコナデされ、26の杯部は上方のタタキと下方の指押さえの後ヨコナデされる。又、内面には放射状の暗文が入る。27～31は甕である。27の口縁部はヨコナデし、体部内面を板ナデする。28は外面体部にタタキ、頸部に指押さえを加え、口縁部内面は比較的短い単位でヨコハケされる。29の体部はタタキ、口縁部をヨコナデし、内面頸部から体部にかけて指押さえ、又は指ナデが多用される。30の体部は1cmに約16本のハケ目があり、口縁部外側とその断面に粘土紐積み上げ痕が顕著に残る。31は外面頸部から肩部にかけて指押さえの後、板ナデされる。体部の内面はハケの後、指押さえと指ナデが施される。32は壺で、外面をハケで調整した後、口縁部をヨコナデする。

体部内面は粘土紐積み上げ痕が顯著に残り、その接合部に多数の指頭痕が残る。33は杯で、口縁部の上方にヘラミガキ、下方にヨコナデを施し、内面はヨコナデされる。又、口縁端部を丸く取める。

須恵器

34～44の蓋杯は、当遺跡において普遍的に見られる器種であり、時期的な幅を端的に示している。45は壺で、肩部にタタキを施し、その内面は指押さえされる。46は甌の口縁部で、二条の波状文が施される。端部も二方向に向けて成形する。47、48は甌であり、47の口縁部はタタキの後、カキ目調整される。49は短頸壺で、口縁端部の上方に面を持たせながらも内外に肥厚させる。50、51の器種は不明であるが、内面のタタキには車輪文が見られる。

これらの表採遺物は二次的な資料である為、具体的な検証には既に限界がある。しかし、遺跡を考える上での補助的役割を果たすものであるから、今後とも注意して観察しなければならない。

(松尾)

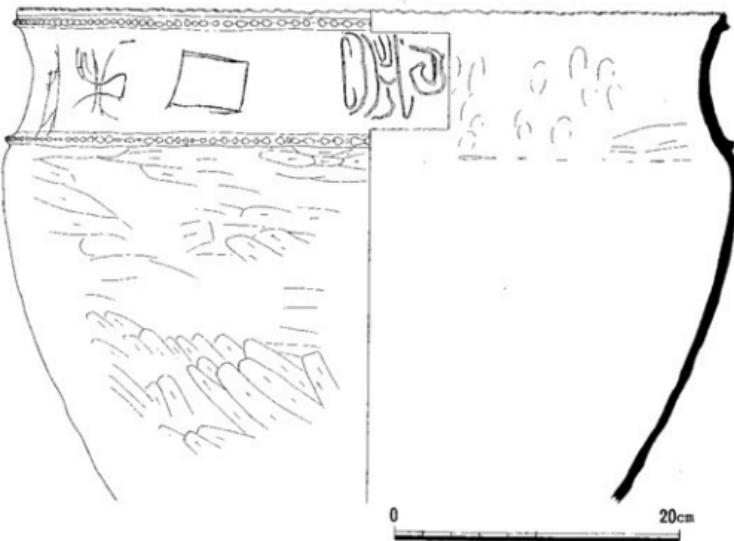


図-63 表採繩文土器

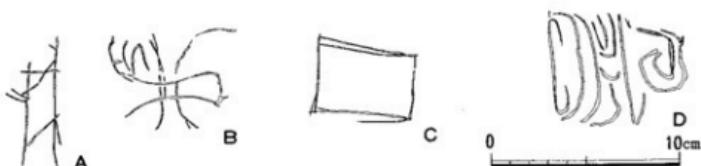


図-64 繩文土器絵画展開図

縄文土器

1993年7月6日に米尾一幸氏によって表採された線刻絵画を有する縄文土器について紹介しておく。この縄文土器はII区隣接地で採集されたものである。

縄文土器は大形の深鉢である。復元口径49.1cm、現存高35.0cm、本来の器高は45~50cmと推定される。体部最大径は51.4cmと復元され、口径よりやや大きくなるようである。体部から内傾してのびる口縁は緩やかに外反して端部を丸くおさめる。口縁端部には1cm前後の間隔で刻み目が施される。口縁端部より約1cm下方と、頸部に各1条の貼り付け突帯がみられる。どちらの突帯にも9mm前後の間隔で刻み目が施されている。外面頸部から口縁部にかけてはナデ、体部は上半がヨコ方向、下半が左上がりのケズリ。内面はナデ調整であるが、頸部付近にタテ方向のユビナデや板状工具によるナデの痕跡がみられる。また頸部内面には粘土の堆積目が顕著に残っている。口縁の約1/4周を残し、残存状態は良好である。胎土は石英・長石・雲母・角閃石の砂粒を含み、茶褐色を呈する。

この縄文土器の口縁直下に4個の線刻絵画が描かれていた。絵画の残存状況から考えると、おそらく絵画が連続して描かれ、口縁を一周していたものと考えられる。各絵画の中心間の間隔は、左から7.3cm、10.5cm、12.7cmとなり、この間隔で絵画が一周していたとすると全部で12~16個の絵画が描かれていたことになる。各絵画は幅0.5~1mmの先端の鋭い工具によって刻まれたものであり、線刻方向から正位置が土器の正位置に一致すると考えられる。

各絵画を左からA~Dとして以下説明を加えておく。Aは左から上にかけて欠失しており、全形は不明である。まず、縦方向の直線を2本引き、次に上方の横方向の直線を引き、斜線を引いている。ただし左側の右下がりの2本の斜線、および下方の左下がりの斜線と横線の前後関係は不明である。右側の縦線は当初右下がりに弯曲していた線をまっすぐに引きなおしている。横線、斜線は、いずれもこの2本の斜線と接する位置で止まっている。これらの線刻から想像できるものは高床の建物である。2本の縦線が柱。右上の右下がりの斜線とその下の左下がりの斜線と左側の上方の右下がりの斜線、この3本の斜線が床を表現しているのではないだろうか。他の横線と左側下方の右下がりの斜線、右下の左下がりの斜線の3本の線は柱間を支える貫ではないかと思われる。おそらく柱、貫、床の順で刻まれたものと考えられる。原始絵画

によく見られるように、本来ならば床材によって見えないはずの部材も描いたものと考えられる。おそらく、この上に屋根の表現があったのであろう。

Bは当初鹿かと考えていたが、詳細に検討すると鹿とは考え難く、複数の弓を表現したものか、あるいは記号的な性格をもつものかもしれない。まず、縱方向に2本の弧線を描く。弧線は対称の位置にあり、特に右側弧線の上方は大きく右側へのびている。どちらの弧線も2度引きされている。次に、これと直交するように同じく2本の弧線が描かれる。この2本の弧線は右側でつながっているようにもみえる。最後に左上方に4本の短い弧線と1本の短い横線を引いている。動物の顔のようにもみえるが、何を表現したものであろうか。

Cは横長の長方形形状を呈する。まず左右の縦線が引かれ、この線の端を結ぶように横線が引かれる。横線は上下とも2度引きされており、線刻の順序、あるいは横線が2度引きされている点は何か意味があるのかもしれない。一つの考え方として、水田を表現したものかもしれない。

Dは切り合う線が少なく、線刻の順序は確認できない。中央部分はほぼ左右対称となり、これで一つの意味をもつものかと考えられる。このように考えると、装飾古墳に描かれている鞆を連想する。鞆、あるいは盾を表現した可能性が考えられる。すると、左側の弧線は弓かと想像される。右側の曲線は何を表現したものであろうか。

以上はいずれも想像であり、その意味するところは不明である。土器が完周していれば、あるいは解明できるかもしれないが、いずれにしても、各線刻は記号のようなものではなく、抽象的であれ絵画と考えてよいであろう。これら複数の絵画が絵巻物風に描かれ、全体として何かを意味していたものと考えられる。そこには当時の人々の社会や精神が表現されているのであろう。この土器を囲んで、祭りや儀式が営まれたと考えられる。

この縄文土器は船橋式の突帯文土器であるが、口縁端部に刻み目を有することから船橋式土器の中でも古式のものと考えられる。この土器以外にも、長原式の深鉢や浅鉢の口縁部に線刻を有する土器が、過去に船橋遺跡で表採されている。（大阪府立弥生文化博物館蔵）しかし、これらの線刻は絵画とは考えられず、記号、あるいは文様として描かれたと考えられる。今回の表採土器より若干新しい時期であるため、絵画を描くという手法が退化、あるいは形骸化したものではないだろうか。

縄文時代晩期、まさに弥生時代が幕を開きつつある時代にあたり、この土器の意味するところは少なくない。あるいは新しい文化の刺激によって描かれたものであろうか。当時の人々は、この土器にどのような思いを託したのであろうか。

本資料について、奈良大学教授水野正好、泉 拓良、酒井龍一、大阪府立弥生文化博物館藤宜田佳男、奈良県教育委員会橋本裕行各氏にご教示をいただいた。記して感謝したい。

（安村）

第6章 船橋遺跡出土土器の砂礫

奥田 尚

1. はじめに

船橋遺跡の井戸から出土した土器は器形からみれば八尾市中田1丁目土坑から出土した土器と同じように各地のものが見られる。桜井市櫛向遺跡から出土する布留傾向壺や大和型庄内壺の約半分は縦向遺跡付近の砂礫ではなく、流紋岩質岩起源の砂礫構成を示し、他地から運ばれた土器であり、約半分は在地のものであることが明らかになりつつある。船橋遺跡付近の砂礫で土器を作れば、当然、船橋付近の砂礫構成の土器ができるはずであり、砂礫構成が違っていれば他地から持ち運ばれていることが伺える。また、器形が同じで、砂礫構成が違えば、違った場所で同じ器形の土器を製作していたと考えられる。このような判断に立って、縦向遺跡のような結果が船橋遺跡の土器に認められるかを念頭に土器表面に見られる砂礫の観察をした。

観察方法は土器の表面に見られる砂礫種の同定である。始めに裸眼で全体を観察し、次に倍率30倍の実体鏡で観察良好な部分を見た。砂礫には岩石片や鉱物片、生物片があり、これらの種類、形、量について観察した。観察の目安として、岩石片では花崗岩、閃綠岩、斑撲岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、疊岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス等、鉱物片では石英、長石、白雲母、黒雲母、角閃石、輝石、橄欖石等、生物片として海綿の骨片、ウニの刺等に注意した。石種の同定で花崗岩としたものは、便宜上、石英・長石、石英・長石・雲母・長石、石英・雲母と嗜み合っているようなものである。片麻岩の一部をみていても花崗岩のように見える、また、流紋岩や安山岩としたものについても、溶結の有無については判断できないことが多い、岩石片、特に火成岩については岩石の全体がわかれれば石種が異なることがある。

2. 含有砂礫とその特徴

土器の表面にみられる砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃綠岩、流紋岩、安山岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、変輝綠岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石、橄欖石、生物片として海綿の骨片である。これら砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、白色で、粒形が角、最大粒径が6mmである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。

閃綠岩：色は灰白色で、粒形が角、最大粒径が1mmである。石英・長石・黒雲母、石英・角閃石、長石・角閃石、黒雲母・角閃石が嗜み合っている。

流紋岩：色は灰白色、灰色、暗灰色、褐色、淡赤褐色、茶褐色、淡茶灰色、淡赤色、黒色、灰色透明と様々で、粒形が角、亜角、亜円で、最大粒径が9mmである。石英や長石の斑晶が散在するものがあり、石基はガラス質である。

安山岩：色は灰色、粒形が亜角、最大粒径が1mmである。角閃石の斑晶がある。石基は灰色でガラス質である。

砂岩：色は灰色、粒形が亜円、円で、最大粒径が5mmである。細粒砂からなる。

泥岩：色は褐色、暗灰色、灰色、青灰色で、粒形が亜角、亜円、円、最大粒径が4mmである。

チャート：色は灰色、暗灰色、粒形が角、亜角、亜円、最大粒径が8mmである。

片岩：色は灰色、灰白色、褐色、黒色、無色透明で、粒形が亜角、最大粒径が2mmである。

泥質片岩、石英質片岩、絹雲母片岩等である。

変輝縁岩：色は褐色、粒形が亜円、最大粒径が8mmである。斑晶は細粒である。

火山ガラス：黒色・無色透明で、貝殻状、フジツボ状、板状で、最大粒径が0.7mmである。

石英：無色透明、粒形が角、最大粒径が5mmである。複六角錐あるいはその一部がみられるものもある。

長石：灰白色、白色、無色透明、灰白色透明で、粒形が角、最大粒径が5mmである。短柱状の自形を示すものもある。

黒雲母：金色・黒色・褐色で金属光沢があり、板状、粒状で、最大粒径が4mmである。

角閃石：色は黒色、粒状、柱状で、粒形が角、最大粒径が2mmである。結晶面が見られるものの、自形を示すものもある。

輝石：褐色透明、黒色透明、黒褐色透明、黒色、茶褐色で、粒形が角、最大粒径が3mm、柱状で自形あるいはその一部を示す。

橄欖石：茶褐色透明、赤茶色透明で、粒形が角、最大粒径が0.7mm、モザイク状の割れ目が入っている。

海綿の骨片：白色、棒状で、最大粒径が2mmである。

3. 砂礫種構成による区分

砂礫種構成から源岩についての推定を行い、類型区分した。岩石は碎かれれば最終的に鉱物片に分解されるが、肉眼で観察、識別できる大きさのものは、岩石片や鉱物片の場合が多い。また、石英と長石と黒雲母が喰み合っているから花崗岩としたものであっても、大きな塊であれば片麻状花崗岩と名称が变成岩の範囲になることもある。また、石英と長石の自形の斑晶が散在するために流紋岩としても、大きな塊であれば、溶結がみられ、流紋岩質溶結凝灰岩となる場合もある。このようなことから、花崗岩片、石英、長石、黒雲母の砂礫から成る場合は花崗岩質岩起源と推定される砂礫とし、流紋岩片、自形の石英・長石・黒雲母の砂礫からなる場合は流紋岩質岩起源と推定される砂礫とした。砂礫には単一の源岩の場合もあるが、いろいろの岩石が源岩となっている場合が多いため、主を占める砂礫から推定される源岩を類型に、従を占める砂礫から推定される源岩を亜類型とした。例えば、花崗岩質岩起源と推定される砂礫

を主とし、流紋岩質起源と推定される砂礫が僅かに含まれていれば I d類型とした。

観察した土器に含まれる砂礫種構成をもとに類型区分すれば、次のように I 類型、 II 類型、 III 類型、 IV 類型、 VII 類型、 VIII 類型の 6 類型、 I b 類型、 I bd 類型、 I bg 類型、 I bhm 類型、 I deh 類型、 II a 類型、 II ad 類型、 II b 類型、 III a 類型、 III c 類型、 IV ae 類型、 IV an 類型、 IV d 類型、 IV e 類型、 IV eg 類型、 IV ch 類型、 IV n 類型、 VII ad 類型、 VII d 類型、 VII dgn 類型、 VII gn 類型の 22 亜類型となる。各類型の特徴について述べる。

I 類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる I b 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる I bd 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩を僅かに含む砂礫からなる I bdg 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩・泥岩を僅かに含む砂礫からなる I bg 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫、片岩、海綿の骨片が僅かに含まれる I bhm 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫・片岩が僅かに含まれる I eh 類型

II 類型：閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる II a 類型

閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる II ad 類型

閃綠岩質岩起源と推定される砂礫からなる II b 類型

III 類型：斑構岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

斑構岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる III a 類型

斑構岩質岩起源と推定される砂礫からなる III c 類型

IV 類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩・安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる IV ae 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃

石が僅かに含まれる	Van類型
流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなる	Vd類型
流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる	Ve類型
流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩、チャートを僅かに含む砂礫からなる	Vege類型
流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、片岩を僅かに含む砂礫からなる	Veih類型
流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石を僅かに含む砂礫からなる	Vn類型
VI類型：砂岩や泥岩、チャートを主とする砂礫からなる。	
砂岩や泥岩を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む	Vlad類型
砂岩や泥岩を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる	Vld類型
VI類型：片岩を主とする砂礫からなる。	
片岩を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩、チャート、他形の角閃石を僅かに含む砂礫からなる	Vldgn類型
片岩を主とし、砂岩や泥岩、チャート、他形の角閃石を僅かに含む砂礫からなる	Vlgn類型

4. 遺跡付近の砂礫種構成と土器の砂礫種構成

船橋遺跡は東から流れてくる大和川と南から流れてくる石川との合流点の西に位置しており、現在は江戸時代に付け替えられた大和川の河川敷となっている。石川と大和川の砂礫は花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、流紋岩質岩起源の砂礫や閃緑岩質岩起源の砂礫、チャートが僅かに認められることが多い。僅かな違いとして、大和川の砂礫は石英が多く、長石が僅かであるが、石川の砂礫は石英と長石がほぼ同じか長石がやや多く、砂岩や泥岩が比較的多く見られる。大和川と石川の合流点よりも下流では石川の砂礫構成というよりも大和川の砂礫構成を示す。

同じ類型であっても、砂礫種の細部の特徴と構成により見た目では異なる。このような例として I bdg類型、I bd類型、Ne類型を挙げてみる。

I bdg類型の砂礫として石川、大和川、吉備旭川があり、I bd類型として石川、大和川、足守川、Ne類型として加賀南部、播磨、山陰がある。石川と大和川の違いは前述のようであるが、旭川や足守川の砂礫には針状の角閃石と石英や長石が噛み合っている閃緑岩があり、角閃

石に結晶面がある場合が多い。加賀南部と播磨の砂礫とは区別しにくいが、加賀南部の輝石は赤茶褐色透明で柱状であり、播磨の輝石は青銅色透明で柱状や褐色透明で柱状の場合が多い。また、播磨の流紋岩片は感覚的に茶褐色～茶色で、やや古そうな感じがするのに比べて、加賀南部の流紋岩は新しそうな感じがする。山陰としたものは比較的角閃石や輝石が多く、殆どが自形を示す。

類型と推定される砂礫の採取地との関係は次のようにある。

石川：I bg類型、I bd類型、I bdg類型

吉備足守川：I bd類型、II ad類型

大和川：I bd類型、I bdg類型

吉備旭川：I bdg類型

河内の胎土：II a類型、II b類型

讃岐：II ad類型

東大阪市客坊谷：III a類型、III b類型

加賀南部：IV e類型、IV n類型

播磨：V ae類型、V e類型、V eb類型、V eg類型

泉南：VI ad類型、VII d類型

山陰：V an類型、V e類型、V n類型

紀伊：VII dgn類型、VII gn類型

石川とした砂礫は柏原市玉手山付近から羽曳野市古市付近にかけての石川の砂礫に似ているものである。大和川とした砂礫は大和川と石川が合流した下流の砂礫である。江戸時代に付け替えられているため、旧河川跡の玉櫛川や久宝寺川の砂礫を基準にした。河内の胎土とした砂礫は河内型庄内甕の多くに共通する胎土で、かっては東大阪市客坊谷の粘土ではないかと東山遺跡の報告書等で指摘されていたものである。しかし、客坊谷の砂礫は斑攔岩質岩起源の砂礫であり、斑攏岩片や角閃石、輝石が多く、橄欖石も見られるIII類型に属する砂礫であり、角閃石が非常に多く、黒雲母が比較的多く含まれる閃綠岩質岩起源の砂礫とは異なる。河内の胎土としたものは黒雲母が多く含まれる場合と僅かの場合とがあり、砂礫粒に鋭い角が見られる媒乱砂と粘土を混ぜて土器の胎土としたようなものである。河内型庄内甕が出土する頻度が高いのは八尾市中田遺跡付近であり、古期のものから新期のものまで出土することからこの付近で製作されている可能性が高い。砂礫の採取地としては恩智神社の東方の閃綠岩岩体が推定される。また、黒雲母が多く含まれる砂礫は八尾市水越付近の砂礫と推定される。播磨とした砂礫は姫路市を流れる夢前川から揖保郡の揖保川付近にかけての砂礫である。この付近の遺跡からは大和型庄内甕を多く産する遺跡がある。山陰とした砂礫は比較的自形の角閃石や輝石が多いことから因幡、伯耆、出雲のいづこかが推定される。吉備足守川とした砂礫は現在の足守川の砂礫というよりも、河川改修工事に伴う発掘で確認された岡山市加茂遺跡や倉敷市矢部南向遺跡のベースとなっている砂礫が酷似する。吉備旭川とした砂礫は旭川の砂礫や百間川遺跡の砂礫に酷似しており、加茂遺跡の砂礫にチャートや片岩を加えたような砂礫である。讃岐とした砂礫は高松市岩清尾山南方付近の土器に多く見られる砂礫で、閃綠岩質岩起源の砂礫混じり粘土に花崗岩質岩起源や流紋岩質岩起源と推定される砂礫を混ぜたような砂礫構成を示すものである。加賀南部とした砂礫は石川県小松市漆町遺跡を中心とする梯川中流域の砂礫である。泉

南とした砂礫は砂礫粒が円いことから河川の河口か海岸砂礫であると推定される。砂岩や泥岩が多く含まれることから、泉南から和歌山市の北部にかけての砂礫と推定される。紀伊とした砂礫は片岩を多く含むことから、片岩が広く分布する紀ノ川以南の和歌山市か吉野川河口付近の徳島市の砂礫が推定される。

船橋遺跡から出土した土器に含まれる砂礫観察から搬入先を推定すれば、河内平野を一つとしても、播磨、吉備、山陰、讃岐、加賀南部、泉南、紀伊と7地域が推定される。

5. 土器の搬入傾向

土器の砂礫採取地を土器の製作地とすれば、少なくとも7地域以上から土器が搬入されていると推定される。器種と搬入の関係をみれば、表3、表4に示すように在地でしか作られていないと言えるものはない。また、出土遺構と搬入品との関係をみれば、表4のようにどの井戸にも搬入品が含まれ、遺跡付近の砂礫で作られているものは約2割5分で、約7割のものが搬入されていることになる。当時の生活と密着していたと推定される甕の搬入について井戸-4の資料でみれば、石川や大和川の砂礫と推定される在地産のものは26個中の僅か3個であり、他地から運ばれているものが23個である。布留傾向甕に関して言えば、Ne類型に属するものが多く、僅かであるが船橋遺跡付近で製作されているものもあり、1個しか確認できなかったが結晶片岩を含むものもある。布留傾向甕や布留甕が製作され始めた地域は加賀南部と推定されることから、加賀南部から何らかの目的で船橋遺跡付近に来て、土器が足りなくなったために船橋遺跡付近の砂礫で土器を作ったと考えられる。また、結晶片岩を含む甕については加賀南部から紀伊付近に何らかの目的があり、紀伊に行った時に甕が足りなくなつて紀伊の砂礫で甕を作り、船橋遺跡を通ったと推定される。加賀南部は鍛形石や石銅の製作地であり、紀伊に行く目的の一つには玉類や石製腕飾類の製作に必要な紅麻石片岩の採取が挙げられる。

纏向遺跡では器形によってもことなるが、同じ器形での比較をしてみれば搬入品よりも在地で製作したものの方が多い場合がある。このことから、船橋遺跡は中田遺跡と同様に人々が定住する場でなく、通過地点に設けられた場、江戸時代の宿場的な要素をもつ場所であったと推定される。

表-2 土器の砂礫構成

表-2 土器の砂礫構成

表-2 土器の砂礫構成

類型 器種	I				II		III			IV						V		VI		区分 部数	合計				
	b	bd	bdg	bg	bhm	deh	a	ad	b	a	c	ac	an	d	e	ag	sh	n	ad	d	dgn	ga			
壺	直口						2	1				1	1		1			1					7		
	複合口縁			1	1										1		1						1	5	
	小形丸底		1	2																				3	
	他	5	1	2			2				1	1		8		1	1	1					2	25	
甌	河内住内	2				13	4	1																20	
	大和住内	1												1										2	
	春留傾向		1	1									1	4		1		1						9	
	布留													1										1	
吉備系	吉備系	1	1			1	2								1									1	7
	山陰系													1										1	
	庄内系													2										2	
	他	1	2	4			1		1					3					1					13	
环	高环	2	6				2							2	1									13	
	他			1																				1	
	小形丸底																							1	
	他		1											1										2	
器台	器台	1	2	3				1								1								7	
	把手																							1	
	器盖不明	1					2							1			1							5	
	合 計	2	17	20	4	1	1	20	6	4	1	1	2	2	1	26	3	1	4	1	1	1	5	125	

表-3 土器砂縫の類型と器種

	石	用	大和用	河	内	客	坊	谷	福	唐	足	守	用	山	勝	加	賀	泉	南	紀	伊	讃	岐	他	本	能	合	計
井戸3	壺	1			1																				3	9		
	甌				1																				2			
	高环	1																							1			
	鉢							1																	1			
	器台	1																		1					2			
井戸4	不	明																							1	41		
	甌	2			1			3										1		2	9							
	壺	1	2	14										1	4		2		2	2	28							
	高环	2																1			3							
井戸5	器	台	1																						1	45		
	壺	3	1	2			6			2	3	1							1	19								
	甌	2				1	2	2		2		1									8							
	高环	6					2					1						1			10							
	器台	3																	1			4			4			
井戸6	不	明	1		1						1		1												4	5		
	甌				2		1					1												1				
合 計	23	4	22	1	16	2	4	11	2	2	3	5	6											100				

表-4 土器出土遺構と土器の搬入先

第7章　まとめ

1. 遺構について

縄文時代

縄文時代晚期の土器が少量出土しているのみで、遺構は認められない。しかも、土器はすべてII区からの出土であり、I区からは出土していない。現状の遺構面の標高はI・II区ともほとんど変わらない。この遺構面となる黄褐色粘質土が縄文晚期の遺物包含層であるが、この土層はII区のほうがやや厚くなっている。

1958年度の調査の際に、V地区に設定したトレーニングから突帯文土器を中心とした晚期の土器が出土しており、これが「船橋式土器」と称され、その基準資料となっている。このトレーニングの南東約50mにII区が位置することから、II区から西方へかけて、縄文時代晚期の遺物包含層が広がっているものと考えられ、おそらく遺構も存在するものと思われる。II区の隣接地からは、絵画を線刻した晚期の深鉢も出土しており、注目される遺物である。

弥生時代

前期～後期の遺物がI区から出土しているが、遺物量は少なく、遺構も小規模な溝を数条確認したのみである。敷密には庄内期以降と層位的に区分できそうであるが、土層の判別が困難であり、今回の調査では果たせなかった。しかし、弥生時代前期の遺物は縄文時代晚期の遺物とは層位的にも区分され、縄文時代晚期の遺物はII区のみ、弥生時代前期の遺物はI区のみから出土することから両者が共存することは考えられない。

古墳時代

弥生時代後期に比べて、古墳時代初頭、すなわち庄内期になると、遺物・遺構とともに急増する。I区において、井戸-5が庄内期の古い段階に位置付けられ、庄内期の新しい段階から布留期の古い段階にかけて井戸-3・4・6が次々と営まれている。II区も含めて、堅穴住居6軒以上、090溝などが庄内式の新しい段階に比定され、かなりまとまった集落が形成されていたものと考えられる。090溝は、幅が1m強、深さが1m弱の溝ではあるが、断面逆台形を呈する人工的な溝であり、緩やかに弧を描いていることから、この集落を囲む環濠であった可能性が考えられる。断面逆台形を呈する環濠は、しばしばみられるものであり、この090溝より以西では庄内期の遺物・遺構がみられないことも傍証となろう。ただし、溝が小規模であることから、この溝に防禦的機能を求めるることは困難であろう。

井戸の3～6出土遺物は良好な一括資料として、庄内期の研究に一石を投じることになろう。奥田氏の観察によると、他地域からの搬入土器が多数を占め、船橋遺跡が単なるムラとしてではなく、大和川と石川の合流点に位置するという好立地条件のもとに、各地と盛んに交流を重

ねていたことが窺える。水運を介した中繼地としての性格を有していたのではないかと考えられるが、その意義については今後の課題である。

布留期以降、遺物・遺構ともに減少する。しかし、出土遺物からみる限りにおいては、ほとんど間断なく集落は継続していたようである。堅穴住居、掘立柱建物、土坑などが確認できており、時期不明のピットの中に、この時期の掘立柱建物が少なからず含まれているであろうと思われる。

ここで、今回の調査と1958年度の調査（大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究（II）』1962）との位置関係について若干触れておきたい。図-3で示したように、I区はN地区からO地区にかけて、II区はP地区に位置することになるが、報告で示されている井戸の印がI区の井戸-1にあたる可能性が強く、そのように考えるならば、O地区に設定されたトレンチはI区西端北側に接して位置することになる。図-3は堰堤を基準に縮尺を合わせて表示したものであるが、以上のように考えるほうが妥当性が高いように思われる。

いずれにしても、O地区トレンチはI区北西部に近接する位置にある。I区北西隅には庄内期の堅穴住居-3・5・7が存在するが、いずれも北側、すなわちO地区トレンチ側が削平を受け、残存していない。このような状況から考えると、報告されているような50~100cmにもおよぶ遺物包含層が存在したとは考え難いものがある。報告されているような西から東へ下がる土層もI区の状況からは考え難い。布留期の遺物包含層の下層にみられるという砂層もI区では確認できていない。おそらく、O地区トレンチは、浅い溝状の遺構内を調査したものと考えられ、可能性として、2次堆積の可能性も捨て切れないようと思われる。今回の調査では、O地区出土遺物に対応する良好な資料は見出せなかった。

飛鳥・奈良時代

ほぼ真南北を指すI区の溝-1が注目される。溝-1は、過去に礎石建物が存在したとされる位置から西方へ60~80mを測り、この礎石建物が船橋庵寺とされる寺院の遺構であるならば、溝-1が寺域西限の溝である可能性が高い。溝-1の東側は1本柱列である柵-1がみられ、柵、もしくは板柵を伴う溝であったようである。溝-1から瓦の出土をあまりみないので、瓦葺きの施設とは考えられない。このように溝-1が寺域西限の溝であるならば、寺域の東西は1町以上の規模を有していたと考えられる。船橋庵寺からは飛鳥寺と同型の軒丸瓦も出土しており、7世紀前葉にその創建時期が求められる。溝-1からも7世紀前葉の遺物が出土していることから、創建からあまり時を隔てることなく溝-1が築かれたものと考えられる。

7世紀中葉頃かと考えられる掘立柱建物-4は、かなり規模の大きいものであり、主軸が真南北に近い。寺域外に建てられた建物の一つであろう。その他多数みられるピットの多くが、この時期の掘立柱建物に伴うものであろう。これらのピットが、溝-1より東側ではみられないことも、溝-1を寺域西限とする考えを補強するものである。

2. 井戸-3~6出土土器について

①井戸-3~6出土の甕

各井戸から出土している土器で、最も多く出土をみるのが甕である。甕は、口縁部が外反し、体部に粗いタタキを施す弥生V様式系の甕、口縁端部が直立し、体部に細かいタタキを施した後にハケメを加える庄内系の甕、内外する口縁が端部で肥厚し、球形の体部を呈する布留系の甕に大きく分類することができる。これら3類と、3類いずれにも含まれないその他の甕の4類について、各井戸の層位別の比率を算出したものが表-6である。この数値は、出土土器の中から口縁端部を残す個体すべての点数を数えあげたものであり、その井戸が営まれていた時期の甕の構成比にはほぼ近いものと考えられる。また、それをグラフ化したものが図-65である。

表-6、図-65からわかるように、V様式系甕の消滅、庄内系甕の増加・減少、布留系甕の出現という現象から、井戸-3~6は、井戸-5、井戸-3、井戸-4、井戸-6の年代順に並べることができる。以下、この順に説明を加えていくことにする。

井戸-5

V様式系甕の形態からみると、井戸-5は上層と下層の間に若干の時期差が存在するものと考えられるが、V様式系甕と庄内系甕の比率には上層と下層でほとんど変化がみられない。上層からは良好な甕の出土が少ないので、細分することにためらいもある。そのため、各層出土の主要器種について図-66を掲げておくので、参考にしていただきたい。V様式甕は62.0%、庄内系甕は20.5%、布留系甕は認められない。その他の甕には、吉備系の甕などがみられる。

井戸-3

出土遺物が少なく、下層第8層からは甕4個体が出土しているのみであるため、上・下層の区別は避けて一括して検討すると、V様式系甕が14.8%、庄内系甕が81.5%、布留系甕はやはり認められない。この比率をみると、井戸-5とは逆転しており、明らかに時期差が存在するものと考えられる。

井戸-4

各層からの出土遺物量は少なく、細分することに問題があるかもしれないが、庄内系甕と布留系甕の比率に重点を置いて、第3層以下を下層、第2層以上を上層とした。V様式系甕の比率は上・下層で大きな変化は認

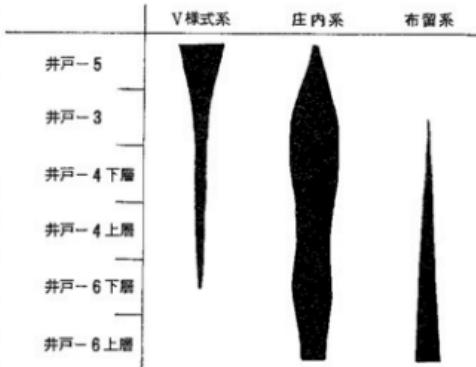


図-65 井戸-3~6出土甕の消長

	甕	壺	鉢	小型丸底壺	器 台	高 杯	合 計
井戸-5	292(66.4)	93(21.1)	21(4.8)	5(1.1)	4(0.9)	25(5.7)	440
井戸-3	27(60.0)	9(20.0)	4(8.9)	2(4.4)	1(2.3)	2(4.4)	45
井戸-4	86(65.6)	26(19.8)	7(5.3)	5(3.8)	1(0.8)	6(4.6)	131
井戸-6	57(81.4)	0	5(7.1)	7(10.0)	0	1(1.4)	70
合 計	462(67.3)	128(18.7)	37(5.4)	19(2.8)	6(0.9)	34(5.0)	686

() 内は%

表-5 井戸-3~6 出土土器種構成

井戸-5

	V様式系	庄内系	布留系	その他の	合計
第5層	41(63.1)	14(21.5)	0	10(15.4)	65
第3・4層	32(74.4)	4(9.3)	0	7(16.3)	43
第3層上面	33(42.9)	25(32.5)	0	19(24.7)	77
第2層	19(73.1)	2(7.7)	0	5(19.2)	26
第1層	56(69.1)	15(18.5)	0	10(12.3)	81
合計	181(62.0)	60(20.5)	0	51(17.5)	292

井戸-3

	V様式系	庄内系	布留系	その他の	合計
第3層上面	1(25.0)	3(75.0)	0	0	4
第3層	3(13.0)	19(82.6)	0	1(4.3)	23
合計	4(14.8)	22(81.5)	0	1(3.7)	27

井戸-4

	V様式系	庄内系	布留系	その他の	合計
第8・9層	1(11.1)	7(77.8)	1(11.1)	0	9
第4層	0	5(83.3)	0	1(16.7)	6
第3層	2(9.5)	16(76.2)	2(9.5)	1(4.8)	21
第2層	2(25.0)	4(50.0)	2(25.0)	0	8
第1層	5(11.9)	25(59.5)	8(19.0)	4(9.5)	42
合計	10(11.6)	57(66.3)	13(15.1)	6(7.0)	86

井戸-6

	V様式系	庄内系	布留系	その他の	合計
第7層	0	7(63.6)	3(27.3)	1(9.1)	11
第1・5層	0	20(43.5)	18(39.1)	8(17.4)	46
合計	0	27(47.4)	21(36.8)	9(15.8)	57

() 内は%

表-6 井戸-3~6 出土甕

められないが、庄内系甕は下層では70%以上を占めるが、上層では60%以下となる。また布留系甕は、上層では20%を超える率を示す。下層出土のV様式系甕は8.3%、庄内系甕は77.8%、布留系甕は8.3%、上層出土の各甕の比率は14.0%、58.0%、20.0%となり、全体では11.6%、66.3%、15.1%となる。井戸-4では、布留系甕の出現を大きな特徴として指摘できる。しかし、井戸-3と井戸-4下層の時期差は小さいと考えられ、井戸-3がまだ機能していた時期に井戸-4が掘られている可能性も十分に考えられる。井戸-3と井戸-4が近接して存在することも注目される。

井戸-6

V様式系甕が全く認められない点が大きな特徴である。埋土の状況からも第7層と第1～5層の間に時期差を考えることができるが、それを示すように、庄内系甕と布留系甕の比率もかなり変化しており、これによって下層と上層を区別する。上層では庄内系甕と布留系甕の比率がほぼ1体1となっており、庄内式土器から布留式土器への移行期に位置付けられるものと考えられる。また、井戸-4上層と井戸-6下層を比較した場合、V様式系甕の消失、布留系甕の増加から、やはりその間に時期差を認めてよいものと考えられる。

以上をまとめると、井戸-5ではV様式系甕が主体となっており、井戸-3では庄内系甕が主体となる。井戸-4も庄内系甕を主体とすることに変化はみられないが、布留系甕がこの段階で出現する。井戸-6ではV様式系甕の消失、庄内系甕と布留系甕が半数ずつを占めるようになるという状況がみられる。以上の4基の井戸は、庄内式土器出現から布留式土器出現の過程における変遷を如実に示しているものと考えられる。

②井戸-3～6出土土器の器種構成

井戸-3～6出土土器について、破片も含めて口縁を残す個体すべてを器種ごとに分類し、算出したものが表-5である。対象とした土器は、井戸-5が440個体、井戸-3が45個体、井戸-4が131個体、井戸-6が70個体、合計686個体である。

井戸-5

各層位ごとの比率は甕が54.2～74.7%、壺が15.5～33.8%となり、全体の比率と大差がみられないため、各層位の比率は省略した。特徴としては、第3層以下では認められない小型丸底壺が第3層上面から出土していることがあげられる。井戸-5においては、甕・壺以外の器種の比率が12.5%と4基の井戸の中で最も低くなる。小形器種の量が少ないということであろう。第1層から出土した体部に穿孔を有する壺（図40-111）は、祭祀に伴うものであろうか。

井戸-3

第8層上面では、甕・壺以外の器種が全く認められない。出土点数も少ないとから、何らかの祭祀行為に伴うものかもしれない。肩部に穿孔を有する甕（図28-3）などは注目すべき遺物である。全体では、甕が60%、壺が20%を占める。

井戸-4

第4層からは甕6個体、壺6個体が出土しており、比率は1対1となる。甕・壺以外の器種は認められず、残存状態の良好なものが多いことから、これも何らかの祭祀行為によるものであろう。その他の層位では、それぞれ甕が63.6~75.0%、壺が15.9~18.2%を占め、全体の比率と大差は認められない。

井戸-6

下層（第7層）では、1点の高杯を除いた他の11点すべてが甕であり、残存状態の良好なものが多い。やはり、甕のみを使用した祭祀行為に伴うものであろう。また、上層（第1~5層）からは、甕46点、鉢5点、小型丸底壺7点が出土しており、やはり壺が出土していない。その結果、甕が81.4%、甕・壺以外の器種が18.5%となり、他の井戸の甕・壺を合わせた比率と井戸-6の甕のみの比率がほぼ等しくなるという状況がみてとれる。下層はともかく、上層からは58点の土器が出土しているにもかかわらず、壺が全く認められない。実際には体部片は認められるので、全く出土していないと言うことはできないが、壺がほとんどみられない点は注目される。

井戸-3~5をみると、甕は60%強、壺は20%前後の比率ではば一致する。よって、井戸-6の特異性が際立ってくる。これについては、時期による器種構成の変化、あるいは井戸における祭祀形態の変化、あるいは偶然の結果と考えることができる。時期による器種構成の変化を考えた場合、井戸-4との較差が大きすぎることから首肯し難い。祭祀形態の変化については、井戸-4までは甕・壺兩者を使用した祭祀形態が想定されたが、井戸-6下層において甕のみによる祭祀行為が想定されたことから、井戸-6の段階に至って甕を中心とする祭祀形態に変化した可能性が考えられる。このような祭祀形態の変化と偶然性が井戸-6出土土器の器種構成を特異なものにしているのであろう。

③各器種の変化

次に、各器種がどのように変化していったのかをみておきたい。

まず、V様式系甕は、井戸-5ではその中心を占めていたものが、井戸-3では急減し、井戸-6に至って全く認められなくなる。井戸-5から井戸-3に至る間に、その口縁は外反するものから直線的に上外方へのびるものへと変化し、体部最大径の位置は上方から器高中央へと下がり、底部は明瞭な平底を有するものから痕跡程度のものへと変化している。底部については、井戸-4の段階において尖底化している。

庄内系甕は、井戸-5下層においてすでに出現しており、井戸-3に至って急増、井戸-4、井戸-6と徐々に減少する。その口縁については、井戸-5においては端部のつまみ上げが弱く、井戸-3において明瞭につまみ上げて立ち上がり、典型的な庄内甕の様相を呈するようになる。ところが、井戸-4の段階で、口縁端部のつまみ上げは徐々にあまくなってくるよう

ある。体部の形態は、井戸-5では外方へ強く張り出しているが、井戸-3ではやや丸くなり、井戸-4では完全に球形化している。外面の調整が基本的にタタキ調整であることは変わらないが、井戸-4ではタタキの大半をハケで消すようになり、井戸-6ではタタキはほとんど確認できないまでにハケを施している。内面調整がケズリを主とする変化はないが、井戸-4の段階で内底面にユビオサエを施すものがみられ、井戸-6の段階ではすべてにユビオサエが認められるようになる。

布留系甕については、口縁が井戸-4の段階ではほぼ直線的にのび、端部で内側へわずかに肥厚するものが、井戸-6の段階では内湾し、端部で内側へ大きく肥厚して面をなすように変化する。

その他の甕の多くは、搬入土器と考えられる。その中で最も多く出土する吉備系の甕は、井戸-5から井戸-6まで継続して出土している。口縁は、井戸-5の段階では垂直に直立するものが、井戸-4の段階ではやや内傾した後に外反気味に立ち上がる形態へと変化するようである。この形態は井戸-6においても変化しない。体部は、井戸-5の段階では肩が張った尖底の形態であるが、井戸-4の段階では縦長で丸底の形態へと変化し、井戸-6の段階では球形に近くなる。

壺は出土量が少ないため、その変化を明瞭にすることはできないが、直口壺は口径が大きく口縁の短いものが、やや長く直線的にのびるようになり、更に長く外反するものへと変化するようである。二重口縁の壺については、頸部から口縁にかけての段が、明瞭なものからやや不明瞭なものへと変化するようである。

小形の鉢は、口径が大きくなり、器高が低くなる。また、口縁が内湾しながら外方へのびるようになる。

小型丸底甕は、体部の球形化、段をなす口縁から直線的な口縁への変化がみられる。

他の器種については、出土点数も少なく、その変化を指摘することはできない。

④井戸-3～6出土土器の位置付け

出土甕の構成比からみてもわかるように、井戸-5と井戸-3の間の較差は大きく、この間に断絶があることを認められるであろう。しかし、井戸-3、井戸-4、井戸-6はほぼ連続しているものと考えられる。これら井戸-3～井戸-6出土土器を米田敏幸氏の編年に対比してみると、井戸-5が庄内式期Ⅰに、井戸-3が庄内式期Ⅲに、井戸-4が庄内式期Ⅳに、井戸-6が庄内式期V・布留式期Iにはほぼ対応するものと考えられる。（米田敏幸「土師器の編年・近畿」『古墳時代の研究』6・1991）すなわち、庄内式土器出現段階から布留式土器出現段階にかけての良好な一括資料4例をここに示すことになる。各井戸は更に上・下層に区別することも可能であり、微妙な器種構成、形態の変化も追求可能な資料である。

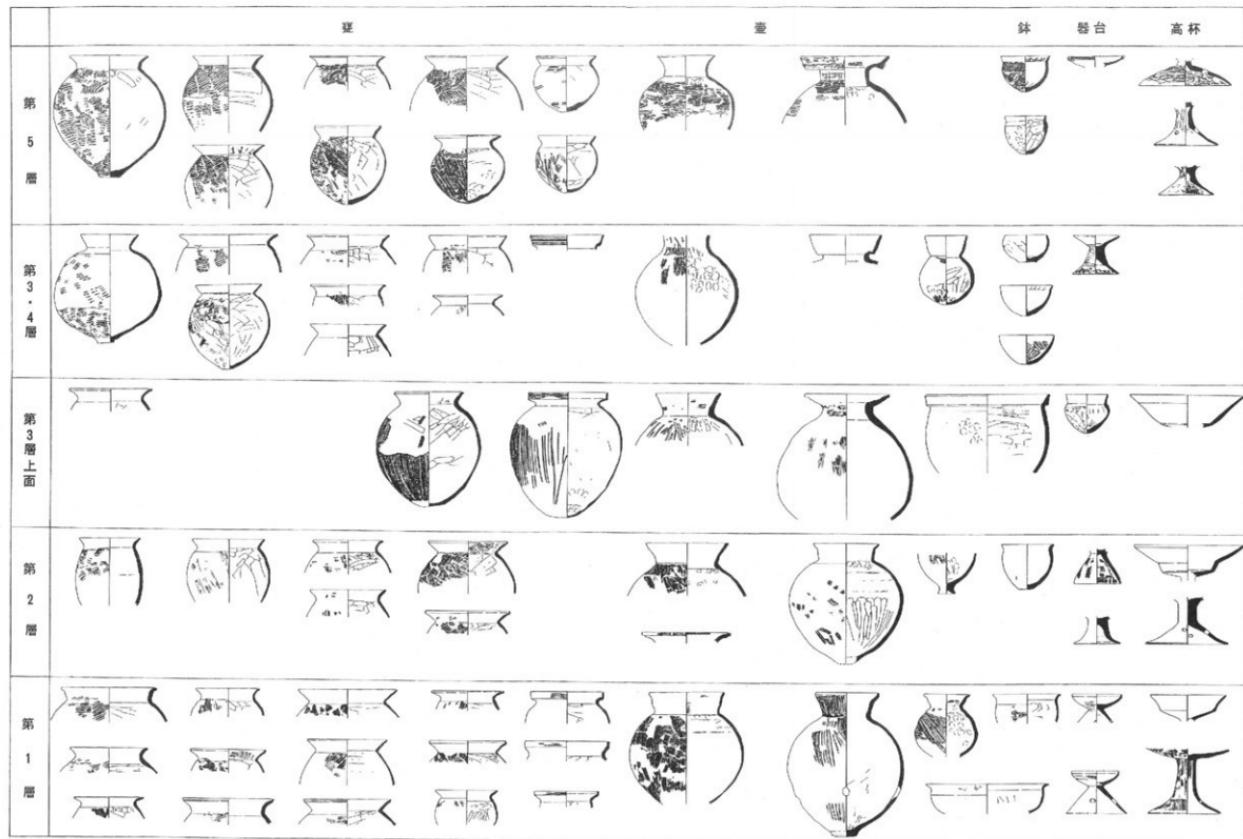


図-66 井戸-5出土主要土器 (S=1/8)

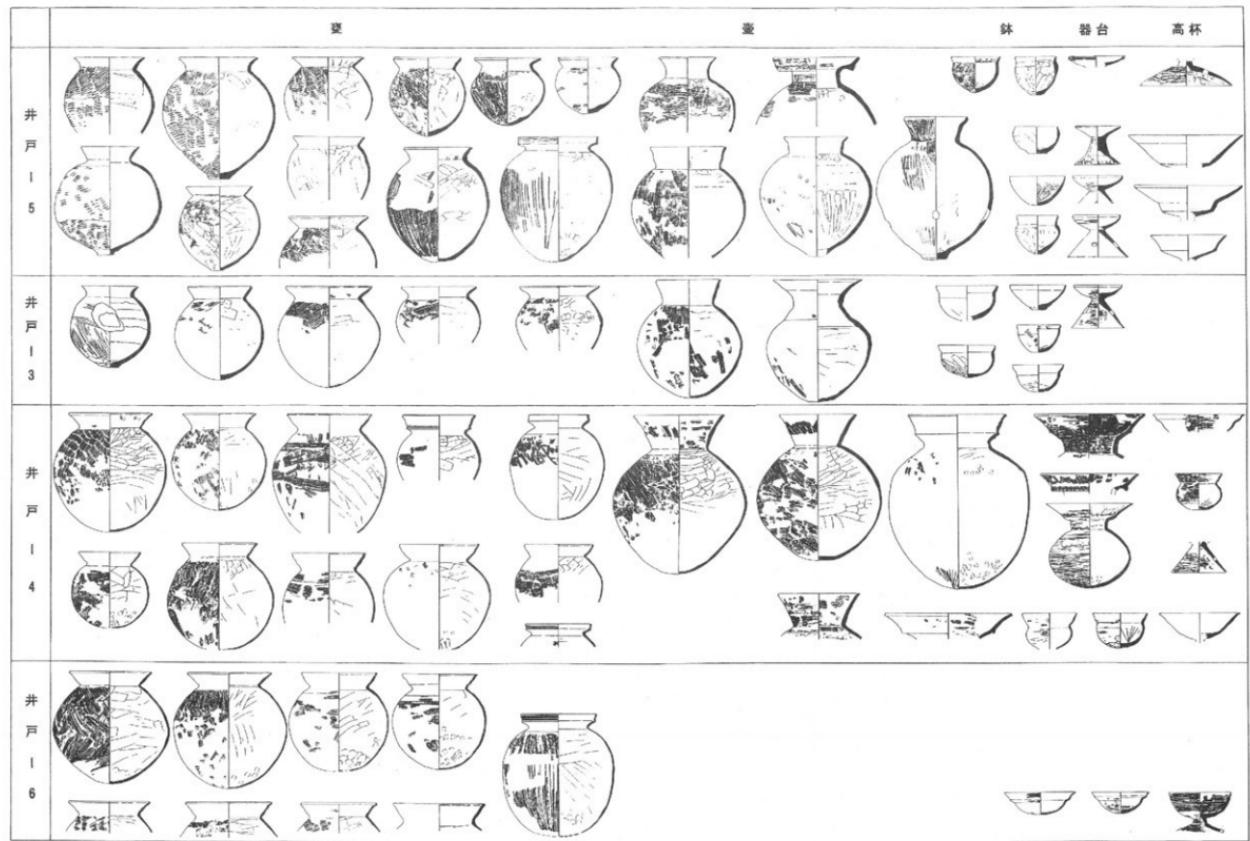


図-67 井戸-3~6出土土器編年図 (S=1/8)

3. 出土土器の胎土と搬入について

出土土器の胎土について、奥田尚氏に観察していただいた。観察した土器は、残存状態の良好なものを中心に124個体を数える。その観察結果については、奥田氏から別項のような詳細な報告をいただいた。この観察結果から、若干の検討を試みたい。

観察点数の多かったI区の井戸-3~6について、奥田氏が器種別に表にしたもののが表-4である。これを基に作製した図が図-68である。その結果、土器全体では石川、大和川の在地の胎土を示すものが27%、これに河内、客坊谷の近隣の胎土を示すものを加えると50%となる。すなわち、半数が河内以外の地域からの搬入品と想定されるのである。

次に器種ごとにその比率をみていくと、壺は圧倒的に搬入品が多く、60%強を占める。壺は在地の壺が極端に少なく、11.9%にすぎない。一方、河内の壺が40%を超す。これは、庄内壺の大半が河内の胎土であることによるものである。壺・壺以外の器種については、在地の胎土のものが半数を超える、搬入品は少なくなる。

搬入品の中で目立つものは播磨の胎土とされるものと加賀の胎土とされるものである。播磨の胎土は壺で特に多く、V様式系の壺にも多く見られる。また、加賀の胎土は壺に多くみられるが、これは布留系の壺の大半が加賀の胎土とされることによるものである。

次に、観察点数の少ない井戸-6を除いて井戸-3~5を時期別にみてみると、在地の胎土を示す土器は井戸-5、井戸-3、井戸-4の順に36.4%、33.3%、21.6%と減少する傾向がみられる。逆に、河内の胎土を示す土器は9.1%、22.2%、40.5%と増加する。一方、河内以外の地域からの搬入品と考えられる土器は、54.5%、44.4%、32.8%とやはり減少している。これは、庄内式でも古い段階のほうが他地域からの搬入が多かったことを示すとともに、河内の胎土によって作られた庄内壺が、庄内式土器の中にはどれだけ重要な位置を占めていたかを示すものであろう。

最後に、問題となるような土器の具体例について、いくつかを遺構ごとに取り上げてみたいと思う。

井戸-3出土の体部に穿孔を有する平底の壺(図28-3)は、形態はV様式系であるが、調整が外面にケズリ、ミガキを施し、内面には粘土細の積み上げ痕が明瞭に残る壺である。粗雑な技法で製作されており、他地域からの搬入品と想像していたが、石川の胎土であるということであり、

	A	B	C	D	E	FG	H	I	J	K	L	M
全 体												
壺												
壺												
その他												
A. 石川												
B. 大和川												
C. 河内												
D. 客坊谷												
E. 播磨												
F. 足守川												
G. 山陰												
H. 加賀												
I. 泉南												
J. 紀伊												
K. 藩岐												
L. 他												
M. 不能												

図-68 出土土器の搬入先

この甕が在地産であるならば、庄内Ⅲ式の段階まで在地でV様式系の甕が作られていたことになる。

井戸-3出土の口縁端部をつまみ上げ気味に作る甕（図29-10）は、外面に4本/cmのタタキを施した後にナデ消している。色調は淡橙色を呈し、搬入品と考えていたが、布留系甕と同一の加賀の胎土とされる。加賀産か否かはともかく、布留系甕に先行する甕として位置付けられるかもしれない。

井戸-4から出土し、砂礫が少量であるため区分不能とされる甕（図30-8・図33-43）は、形態から考えて吉備系と考えて間違いないであろう。概して吉備系の甕は白っぽく、精良な胎土である。

井戸-4出土の大和川の胎土とされる庄内甕（図31-17）は、やや体部の張りが強いという特徴以外には、形態・技法ともに通常の庄内甕と変わることろはない。肉眼でも角閃石の少ないことがわかり、在地で作られた庄内甕と考えて間違いないであろう。

井戸-4出土の播磨の胎土とされる甕（図32-22）は、口縁が直立し、下ぶくれの形態となる。技法的にはV様式の甕と変わらない土器が庄内Ⅳ式の段階まで残ることが注目される。色調は淡黃白色を呈し、二次焼成によって一部ピンク色となるが、煤の付着はみられない。製塙土器かと思われる甕である。

布留系の甕の大半は加賀の胎土とされるが、紀伊の胎土とされる甕（図32-29）と大和川の胎土とされる甕（図33-39）がみられる。後者は、小形で球形の体部を呈し、他の布留甕とは形態的に異なるものである。

井戸-5出土の大和型の庄内甕と考えられる甕（図35-18）は、石川の胎土とされ、在地で作られた大和型庄内甕と考えられる。

井戸-6出土の甕（図42-7）は播磨の胎土とされるが、形態や技法からは明らかに吉備系の甕と考えられるもので、若干の疑問も残る。

これら以外にも、周辺の遺跡ではあまりみられない形態でありながら在地の胎土を示すもの、逆に播磨・讃岐・紀伊など他地域の胎土を示すとされながらも当該地で同様な器形が認められないものもあり、今後の検討課題として残される。

奥田氏には、御多忙中にもかかわらず、詳細な観察をしていただき、また短期間で結果を原稿にまとめていただいた。おかげで、他地域からの搬入品の異常な多さという船橋遺跡の特色を浮かびあがらせることができた。その意味するところについては今後、更に検討を進めていかなければならないが、本報告によって、その資料を呈示しておきたい。

4. 今後に向けて

船橋遺跡は縄文時代から中世にかけての大複合遺跡としてあまりにも有名である。しかし、その実態は小規模なトレンチ調査や表採遺物を対象とした研究成果によるものであり、「船橋遺跡」という名称だけが一人歩きをしてきた感は否めない。1704年の大和川付け替え以来、現在に至るまで、出水のたびに遺物・遺構が露出するところとなり、堰堤の建設や流路の変化などで遺跡は壊滅状態にある。船橋廃寺の中心遺構は既に流失し、幻の寺院となってしまった。また、容易に遺物を見発見することができることから、盗掘や表採遺物の隠匿も後を絶たない。このような状況下で、大和川河床における初めての本格的な発掘調査として今回の調査が実施された。

調査地の北側は旧流路によって、そして南側は年間2m前後のベースで拡幅する現流路によつて大きく損なわれており、その間に僅かに中洲状に残っている部分を調査したことになる。調査地も増水時には水没し、縄文時代晩期の絵画土器は、調査後の7月の増水時に表採されたものである。調査中も、航空写真撮影の4月29日、前夜の大雨でI区の井戸-1・2は水没するところとなり、遺構面まで30cmと迫る高さまで水量が増加したことがあった。

このような状況であるが、今回の調査契機となった河川浄化施設が完成すれば、これ以上の遺跡の損壊を防ぐことができると言えている。浄化施設は河岸に自然石を並べて全国ワースト2位の大和川の水質を少しでも自然な状態で浄化しようというものであるが、同時に護岸の機能も兼ねている。今回の工事によって調査地南半の遺構は破壊されることになるが、今後の損壊を防ぐためには、それだけの犠牲もやむを得ないであろう。今回の調査結果から考えると、I区より上流では遺跡は全く残っていないと考えられるが、II区より下流、藤井寺市にかけての範囲には比較的の遺跡が残されているものと考えられる。今後、この部分の保護・調査について考えていかなければならない。

発掘調査は増水期を避けるため、5月末日までに終えなければならないという制約のもと、多量の遺物・遺構の発見によって苦慮した。また、その後の整理作業も年度内事業としての性格上、半年あまりの期間しか確保できず満足のいく整理はできなかった。しかし、古墳時代初期の良好な遺物・遺構を紹介することができ、本報告を公にすることができたことで一応の責は果たせたことと思う。

今後、大和川河床において、これはほど大規模な調査を実施することはないかもしれない。今回の調査そして本報告が、船橋遺跡の実態解明に少なからず寄与できるものと考えている。また、今後の保存についても十分に検討していかなければならぬが、本報告がその一助となることを願うものである。

(安村)

図 版



(上空 西から)



(上空 南から)



I区（北から）



II区（北から）



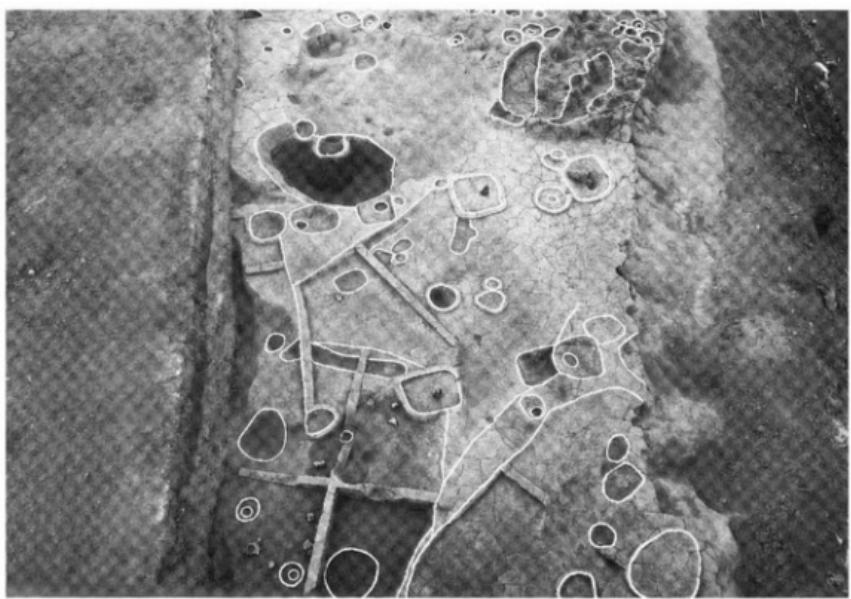
北から



西から



西から



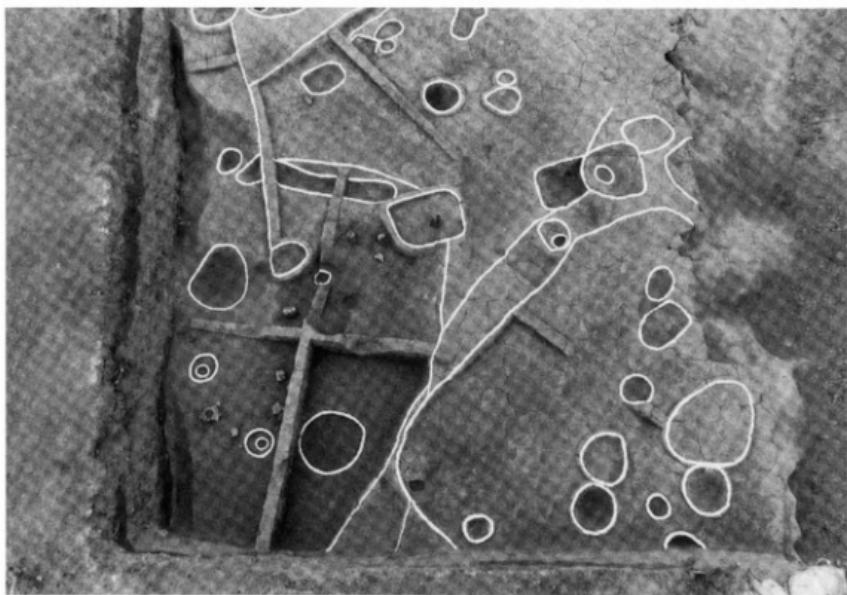
整穴住居-3~6周辺（西から）



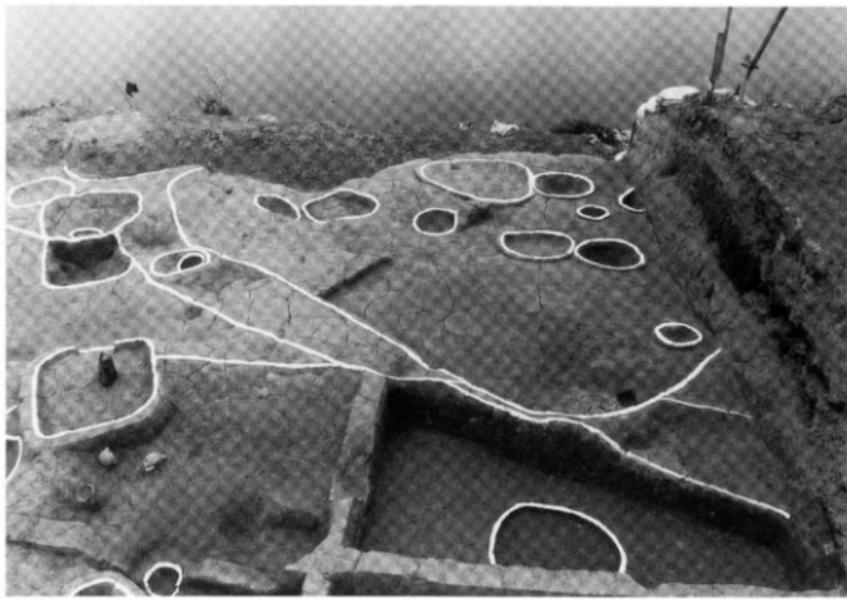
東から



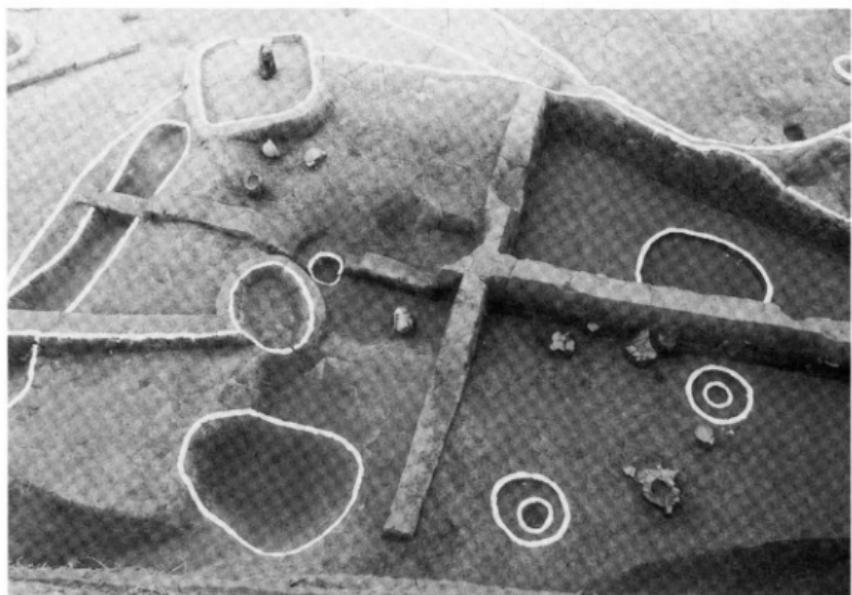
井戸 - 1 ~ 5 周辺 (東から)



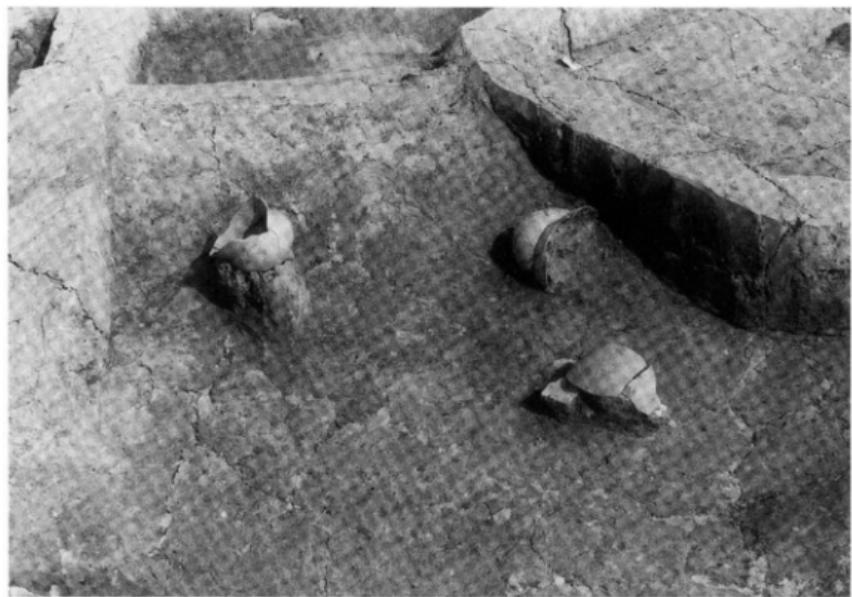
積穴住居 - 3 ～ 7



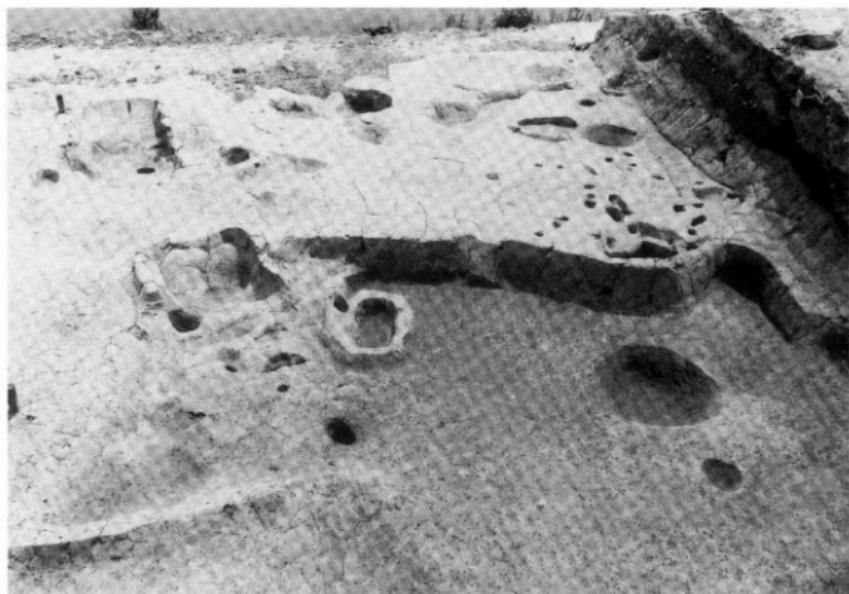
積穴住居 - 4



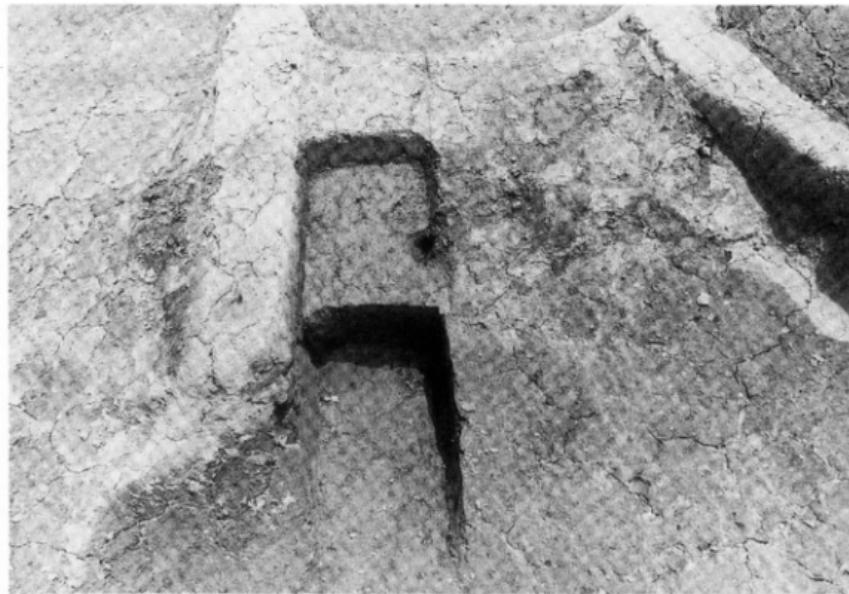
竪穴住居－5



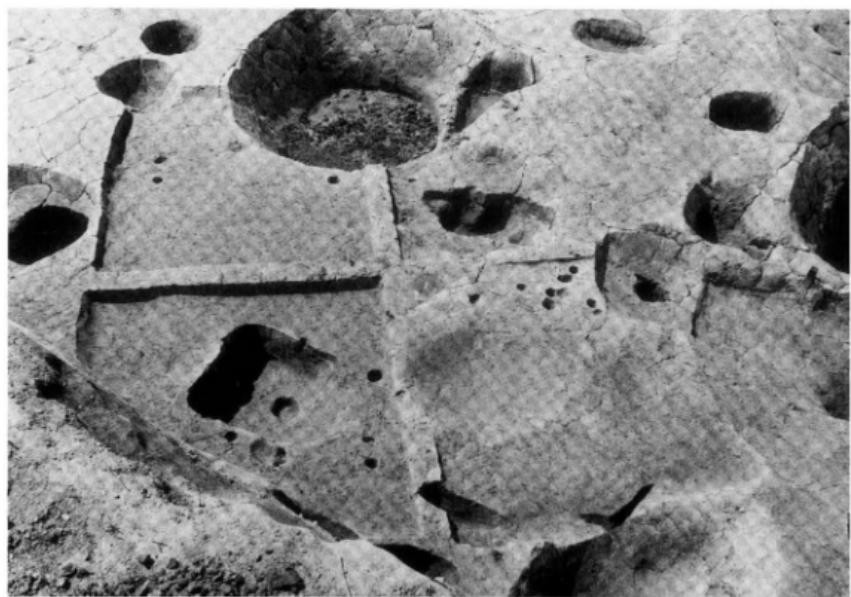
遺物出土状況



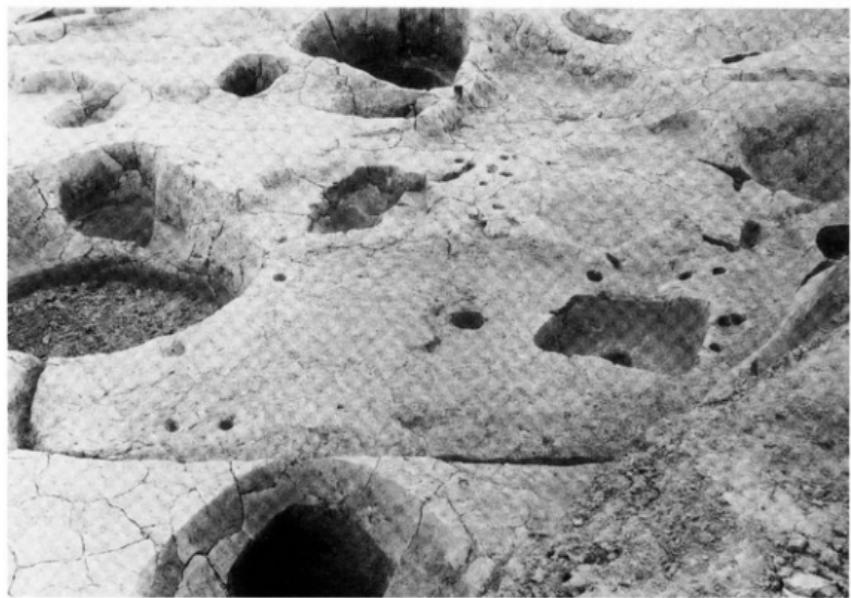
竪穴住居 - 5 • 7



竪穴住居 - 5 カマド



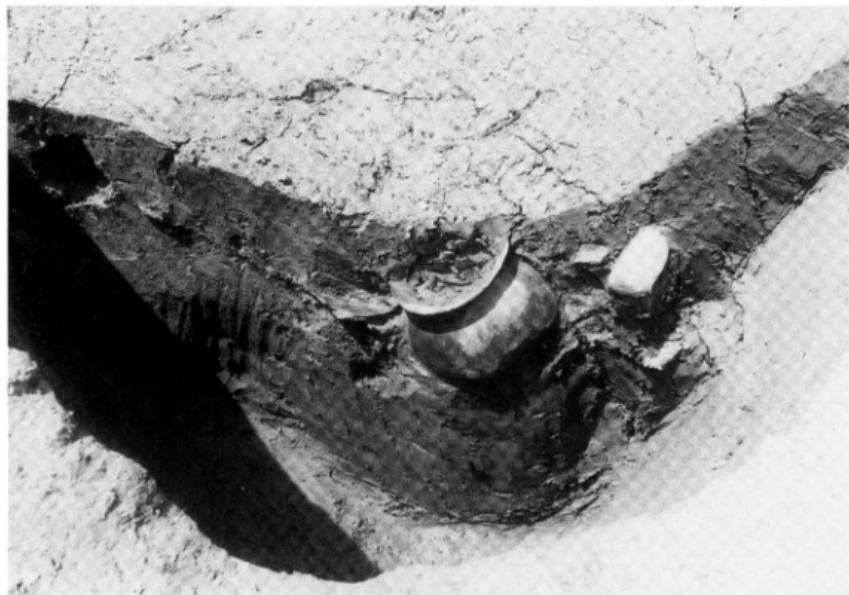
積穴住居 - 8



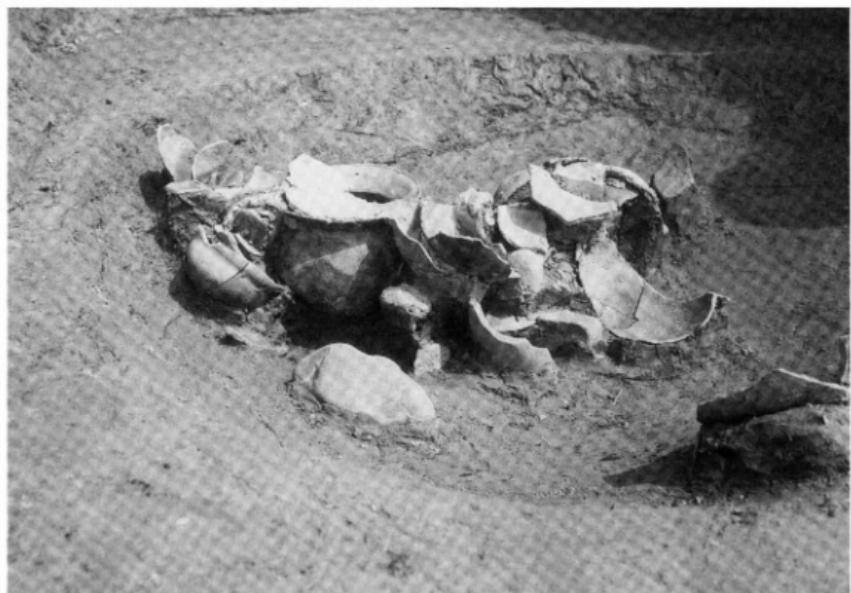
積穴住居 - 8



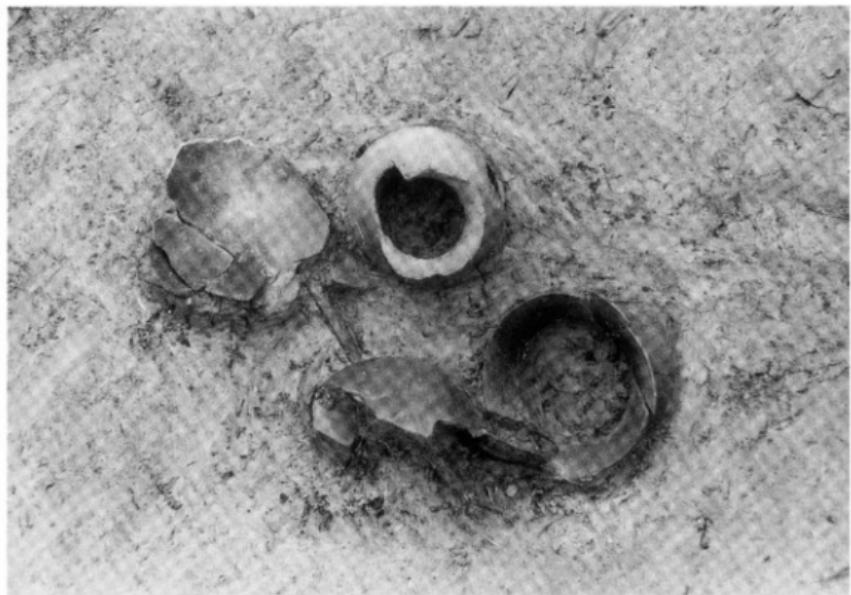
全 景



断 面



第 5 層上面遺物出土状況



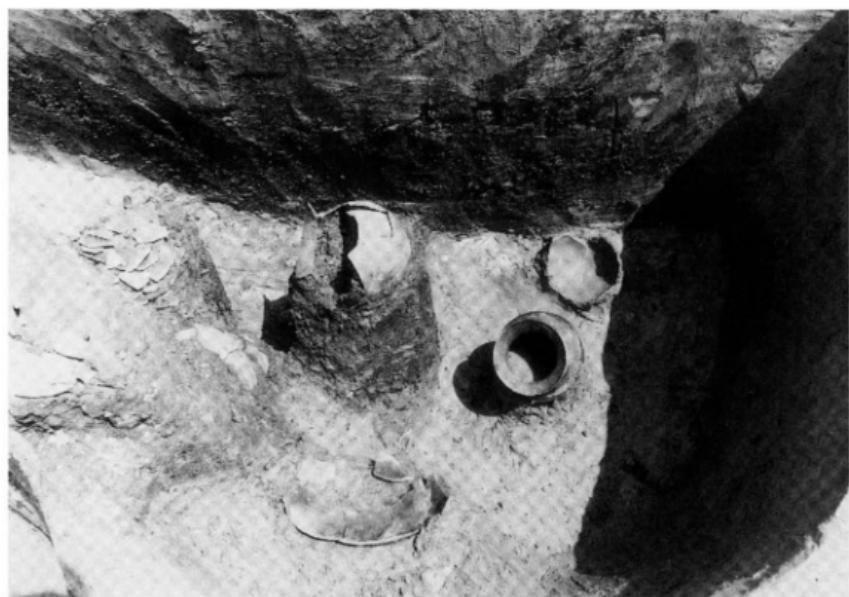
第 8 層上面遺物出土状況



断面



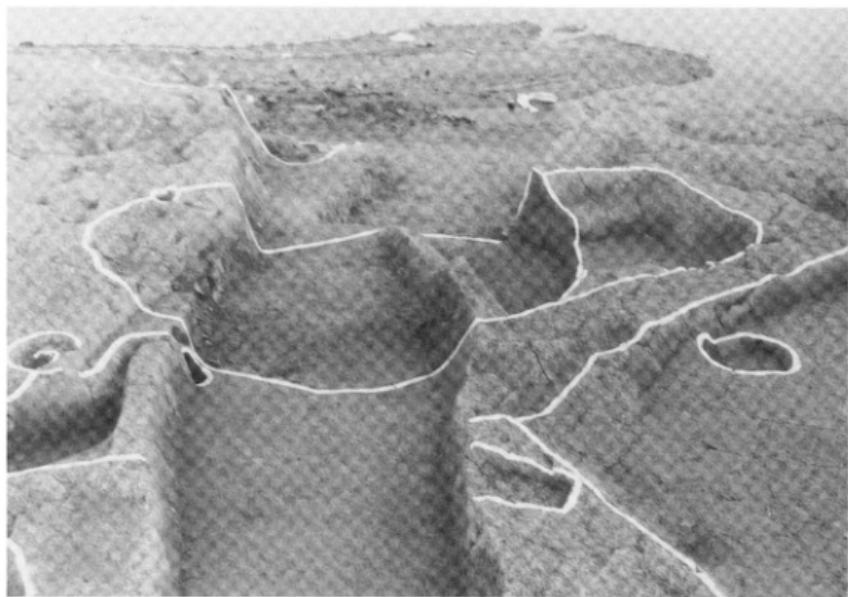
完掘後



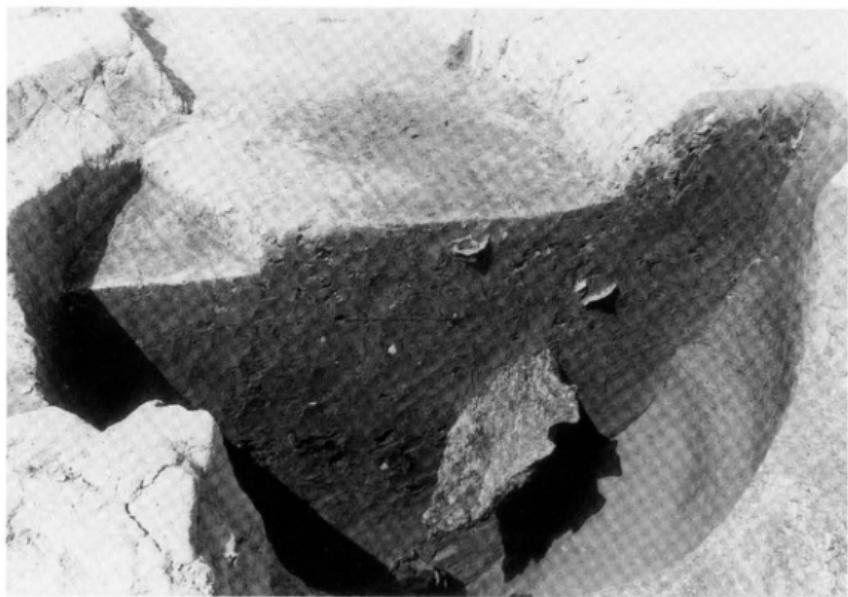
第4層上面遺物出土狀況



第4層遺物出土狀況



検出状況



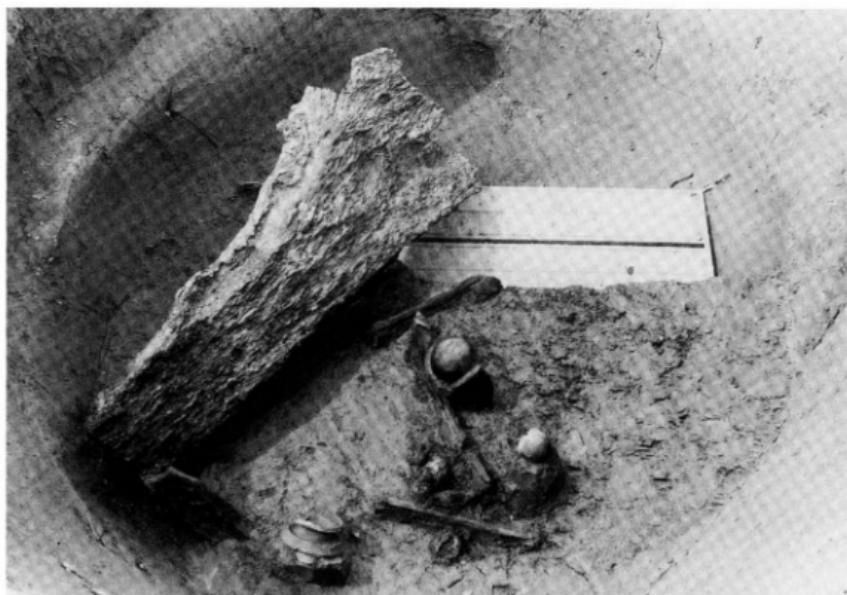
断面



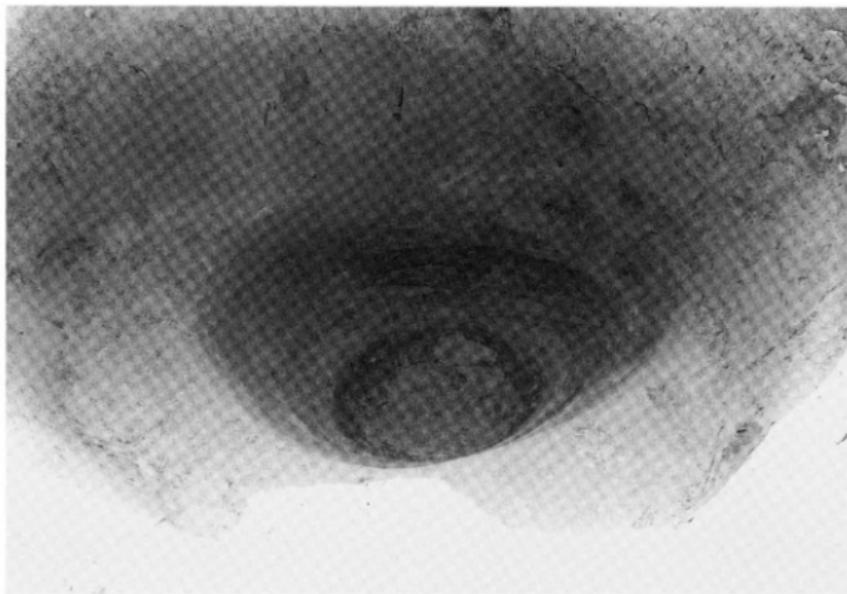
第1層遺物出土状況



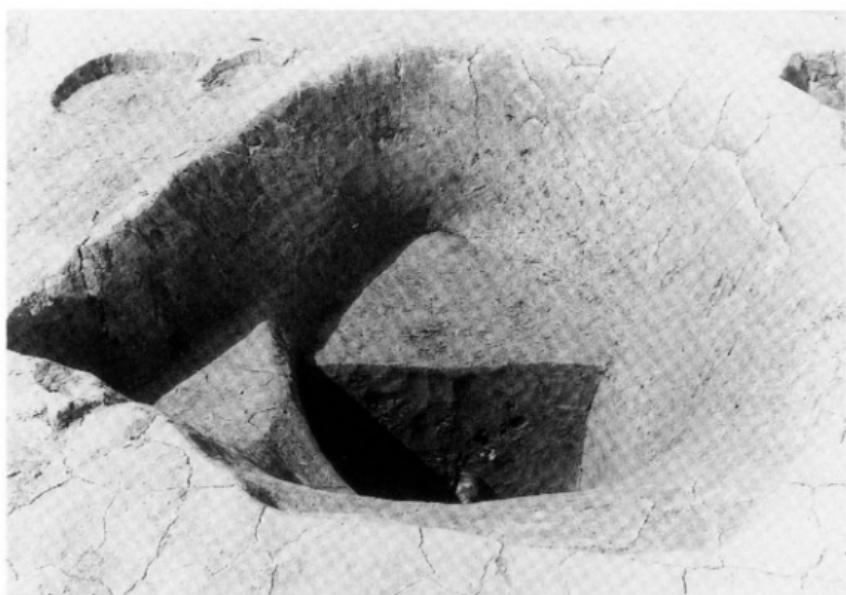
第3層上面遺物出土状況



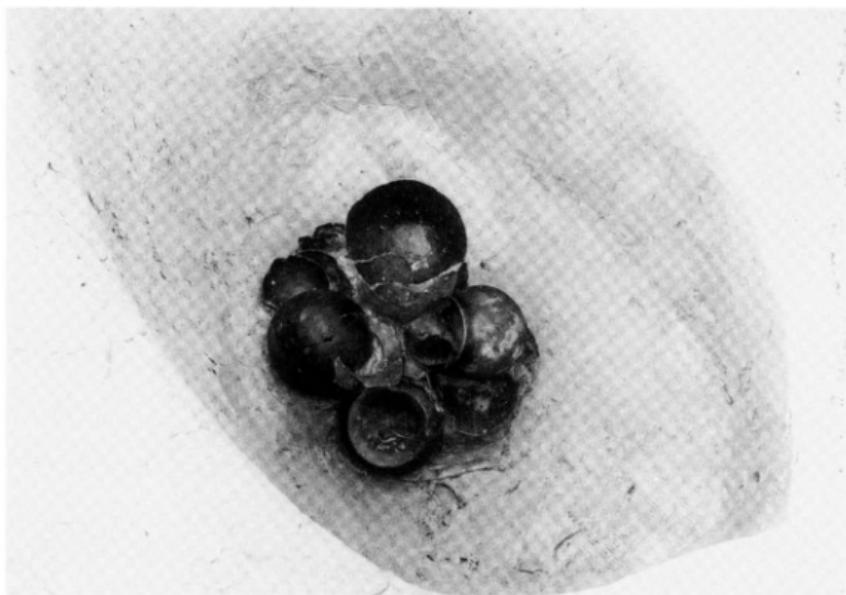
第5層遺物出土状況



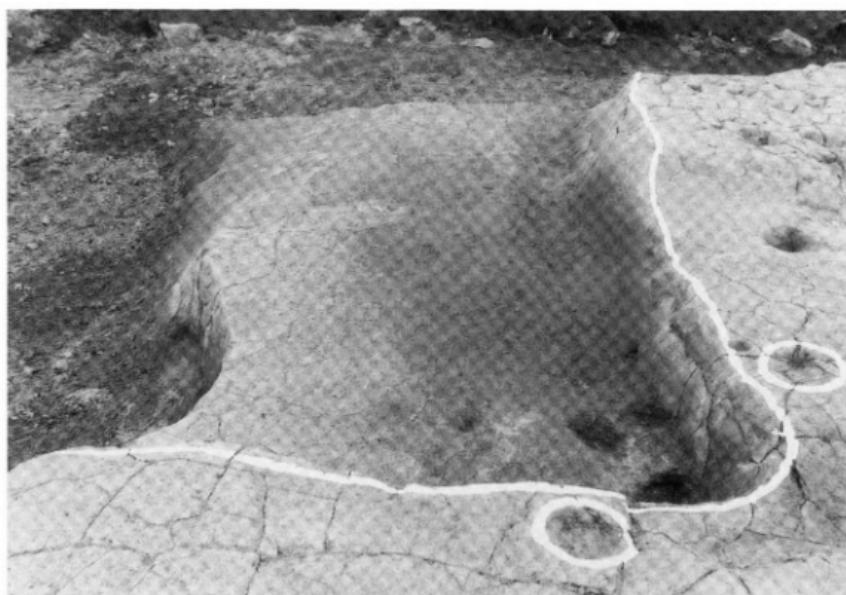
完掘後



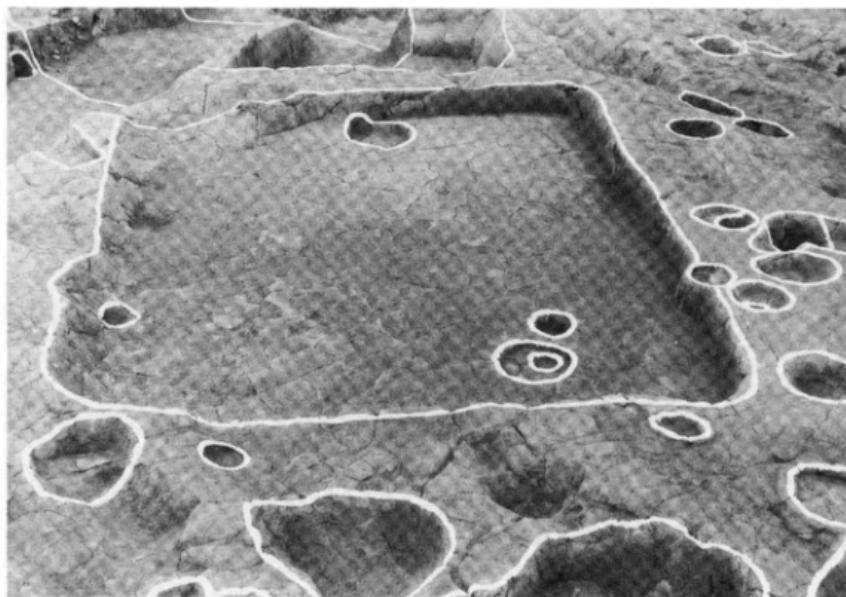
断面



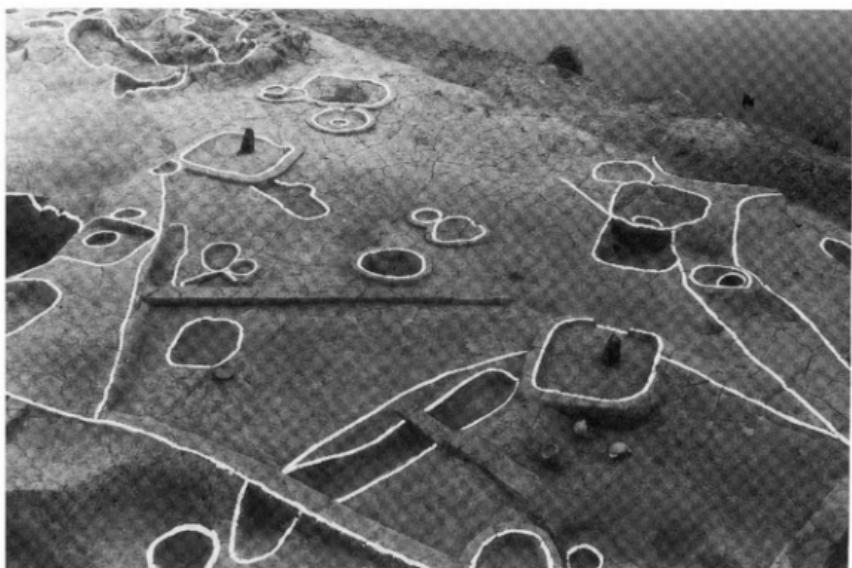
第 7 層遺物出土状況



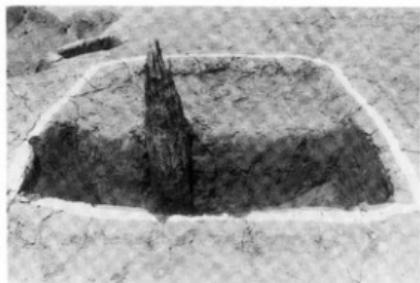
堅穴住居 - 1



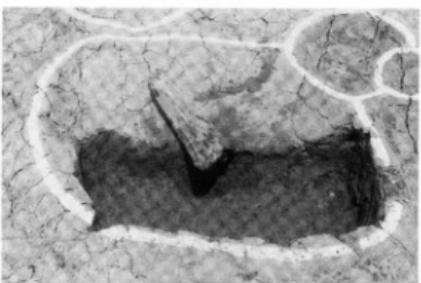
堅穴住居 - 2



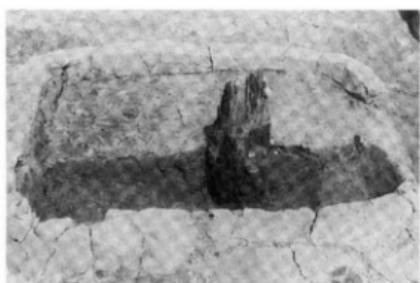
掘立柱建物-4



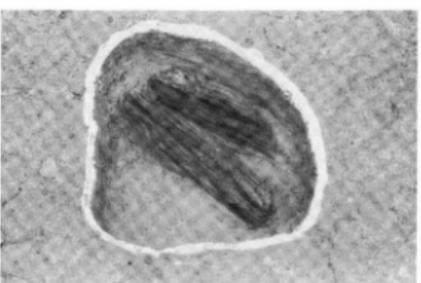
ピット-21



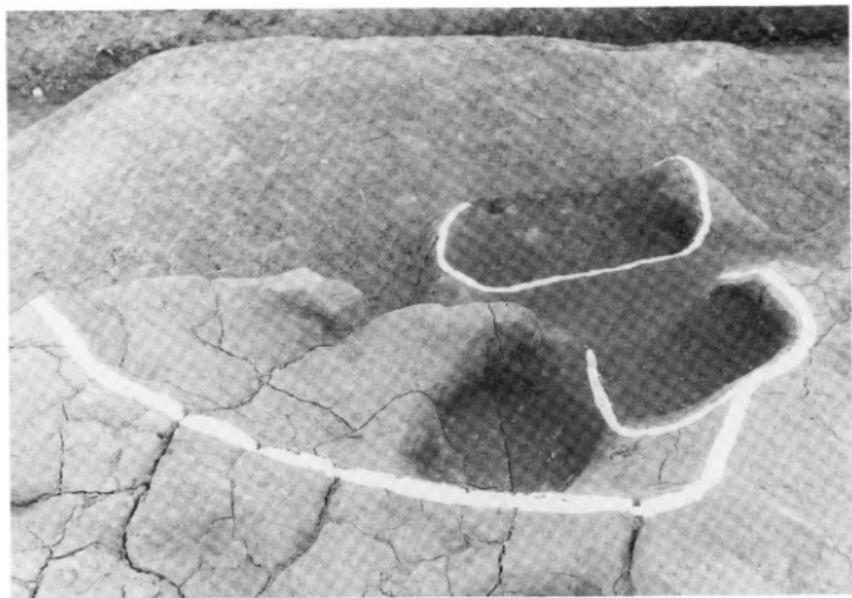
ピット-22



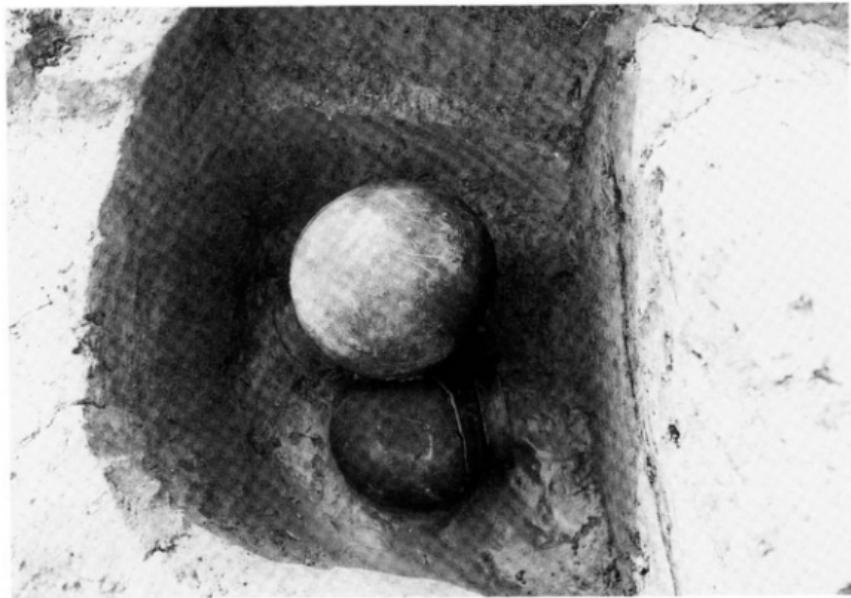
ピット-24



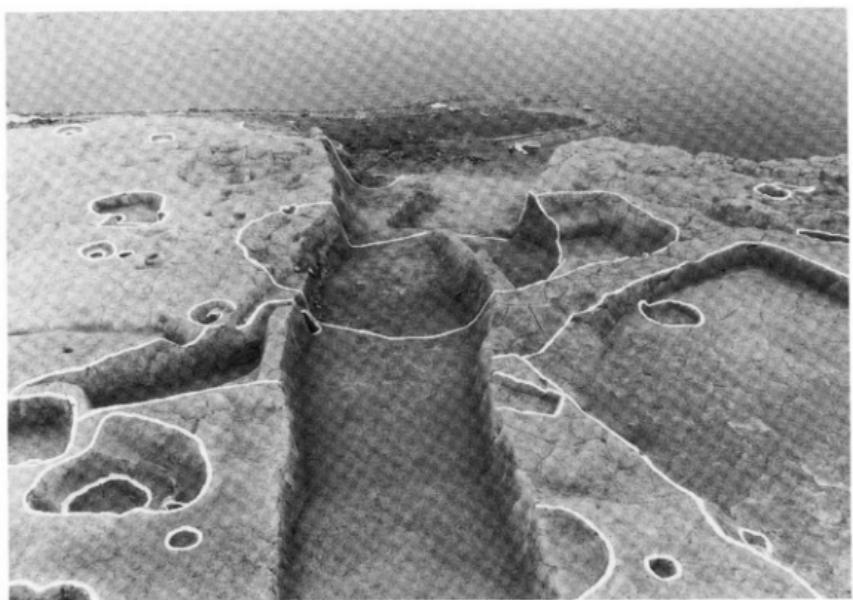
建物-3・ピット-16



土坑 - 1



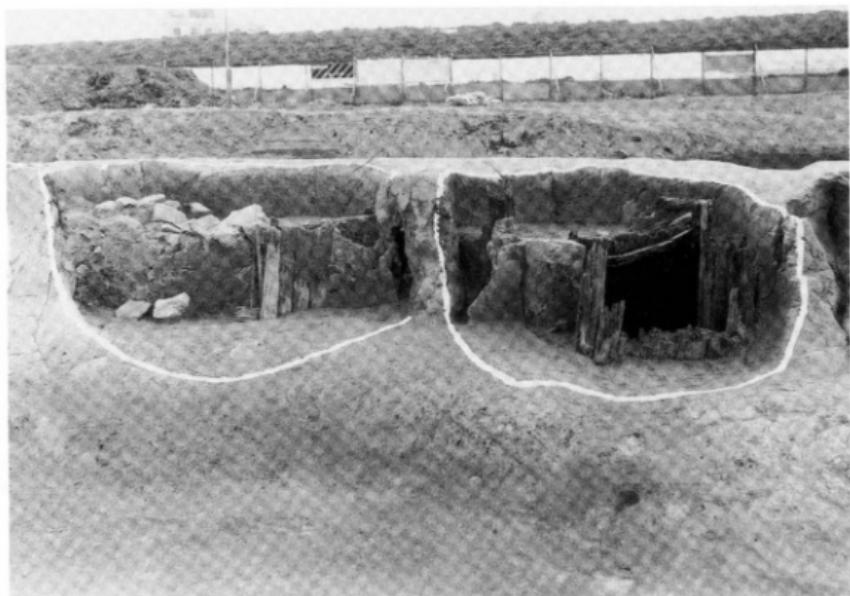
土坑 - 3



溝—1



柵—1と溝—1



井戸-1(右)・井戸-2(左)



井戸-1上層断面



全 景



南壁裏込め



南壁



南壁除去後



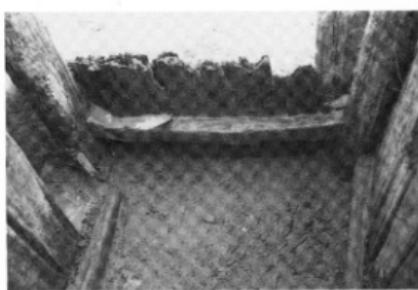
断面



北壁



北壁



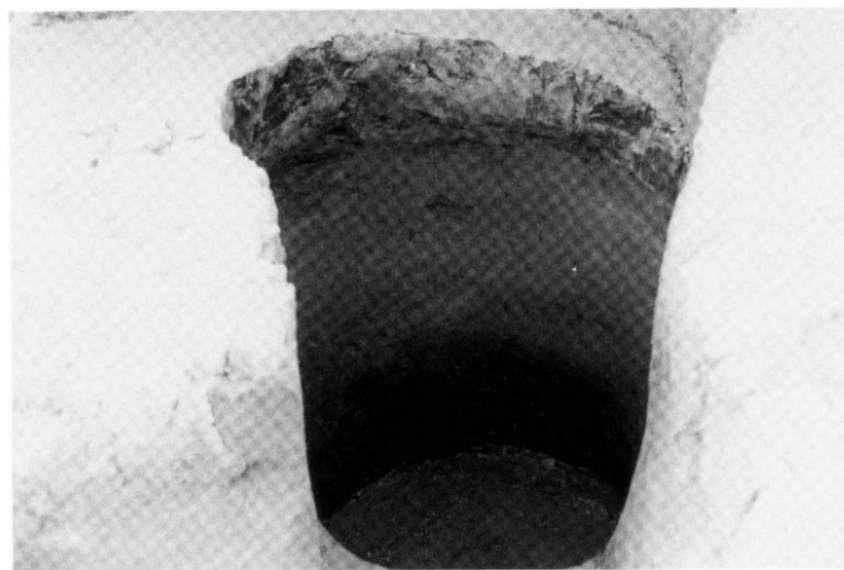
南壁



西壁



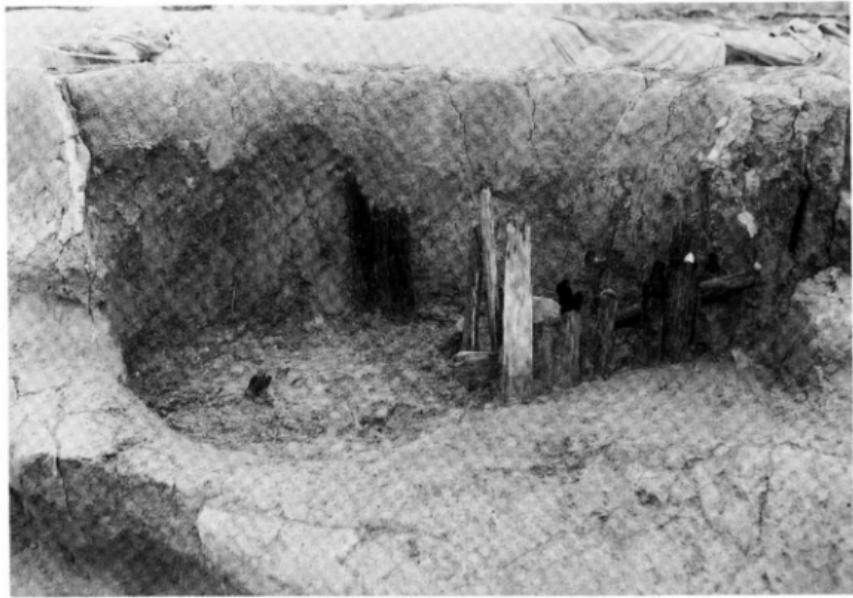
東壁



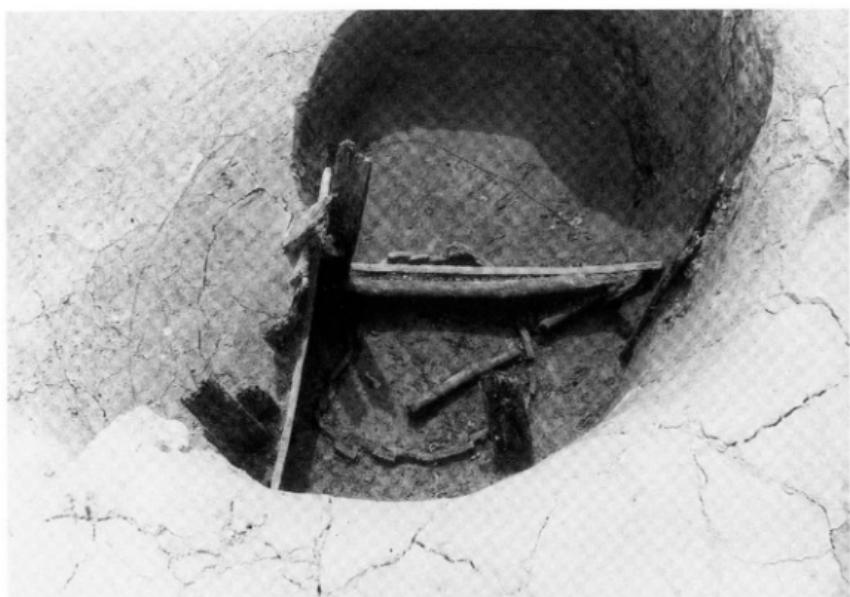
完掘後



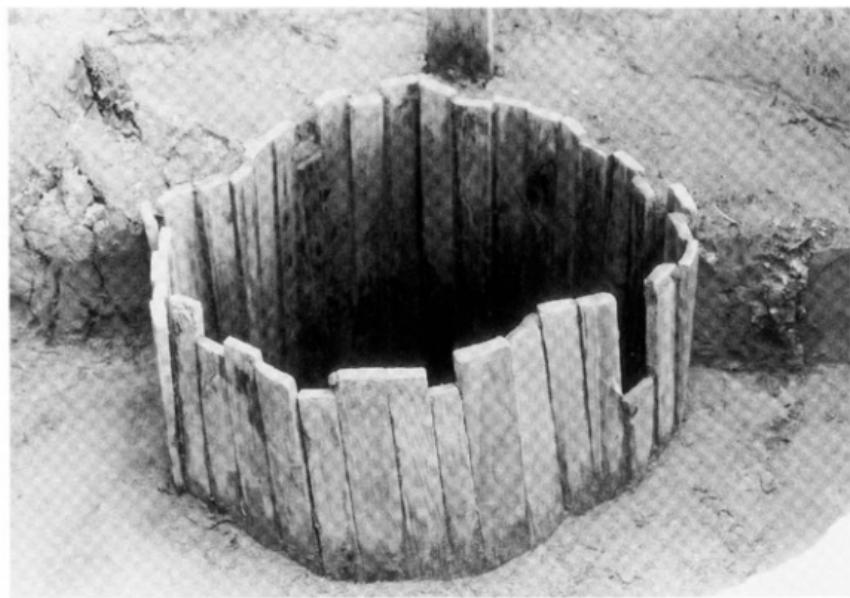
上層断面



上層



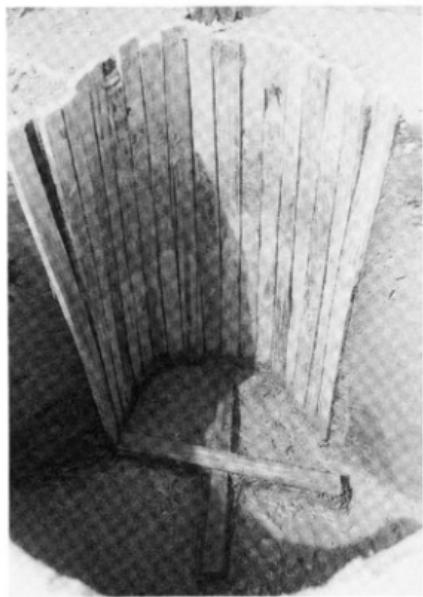
上層



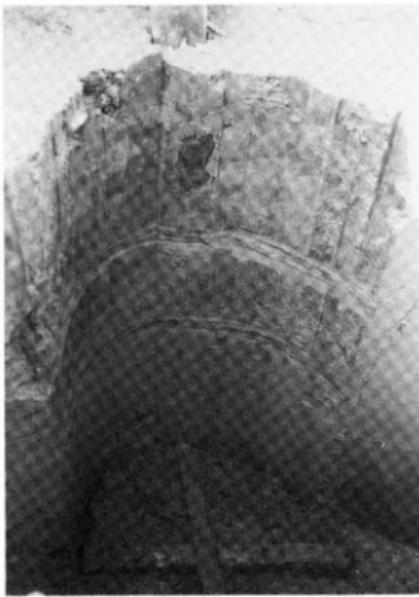
井戸枠



掘方断面

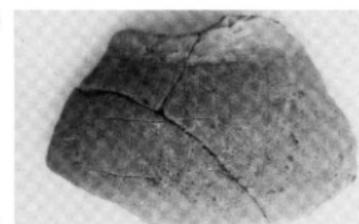


北半



井戸枠除去後

弥生土器



12

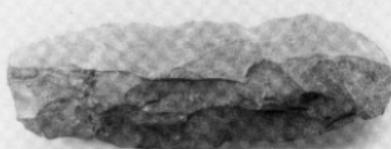
石製品



2



3



1



4



2



14



16



17



20

竪穴住居 - 3 • 5 • 8 出土遺物



1



5



4



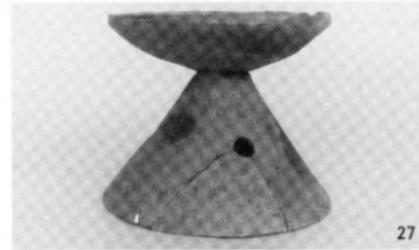
3



10



22



27



28



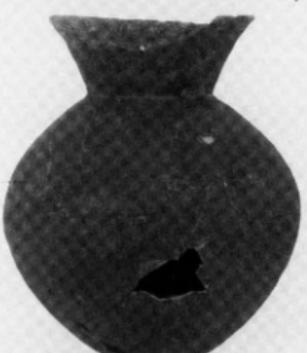
6



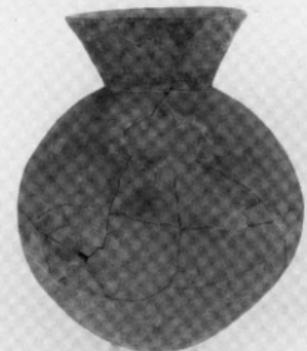
7



8



9



11



12



15



17



16



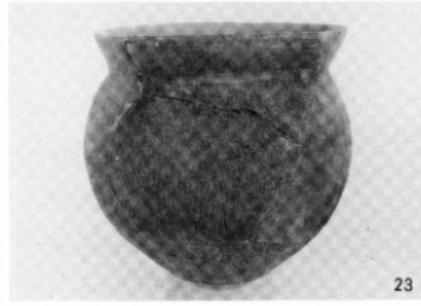
21



22



30





27



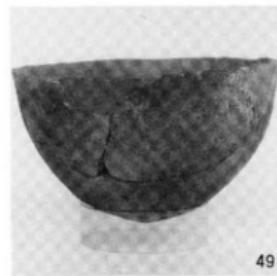
39



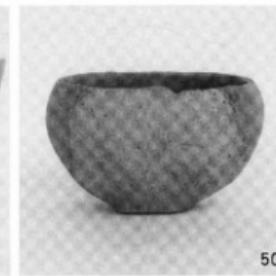
46



48



49



50



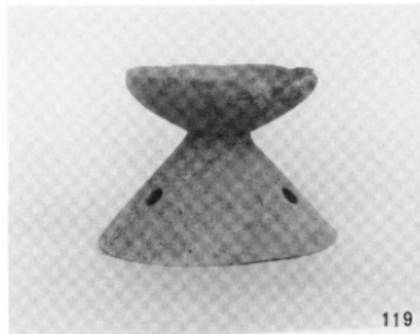
51



60



80





1



2



3



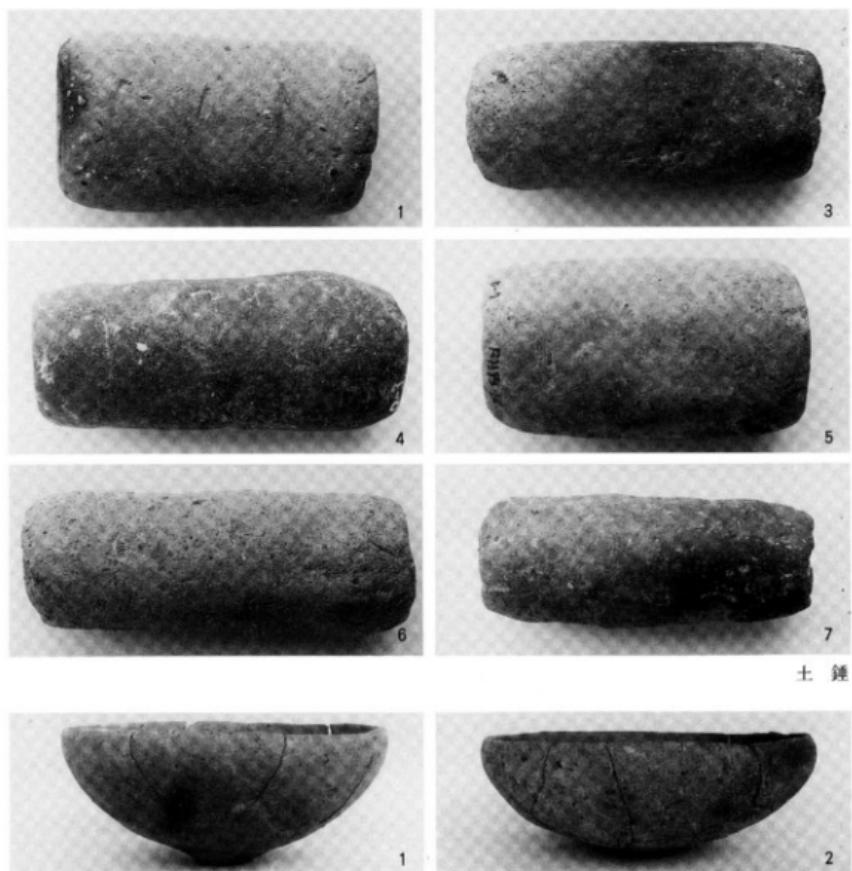
4



6



7



竪穴住居-2出土遺物



ピット-35出土遺物



1



2

土坑 - 3 出土遺物



2



5

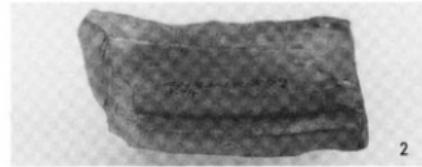
溝 - 1 出土遺物



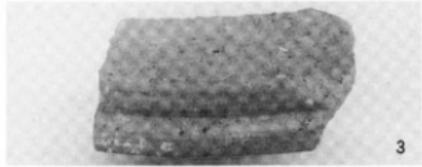
1



6

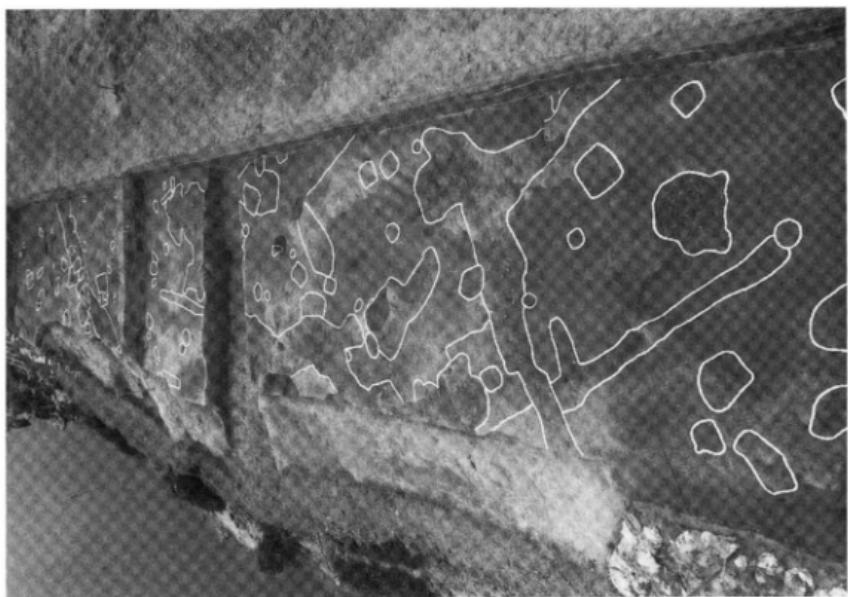


2

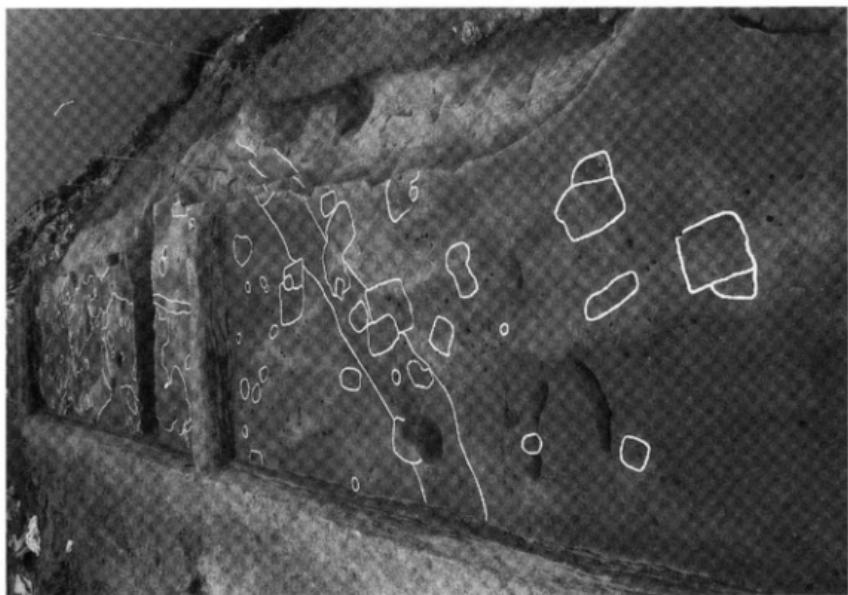


3

瓦



東半遺構検出状況（東から）



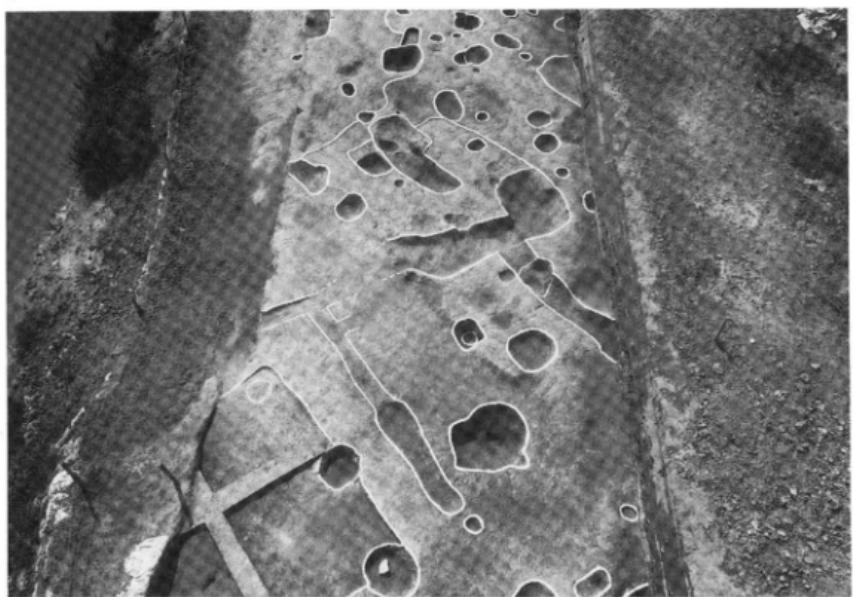
西半遺構検出状況（西から）



東半遺構完掘状況（東から）



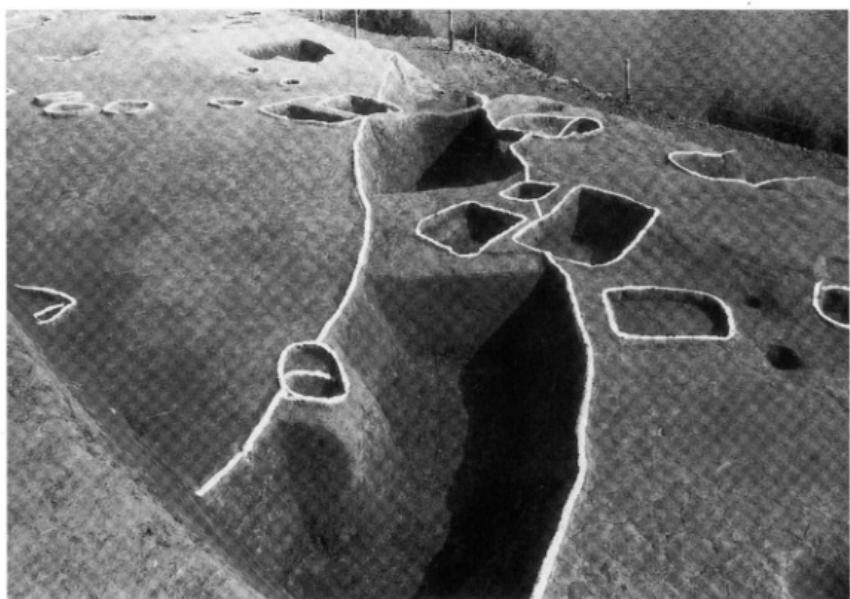
西半遺構完掘状況（西から）



（東から）



近景（東から）



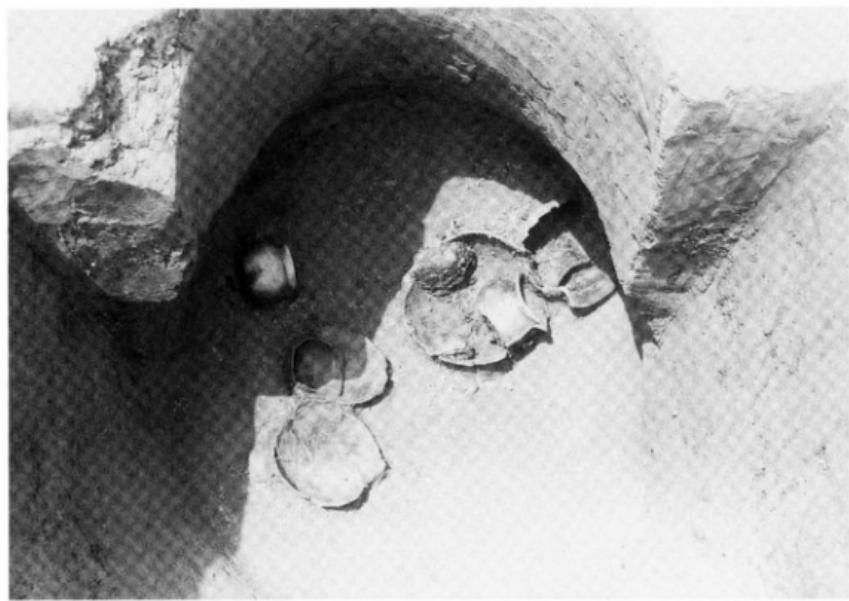
(北から)



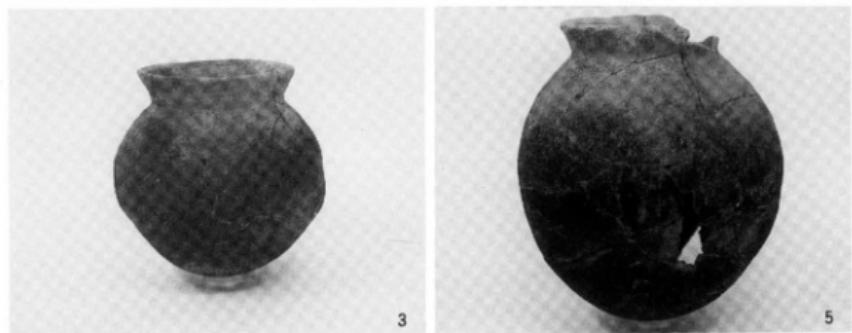
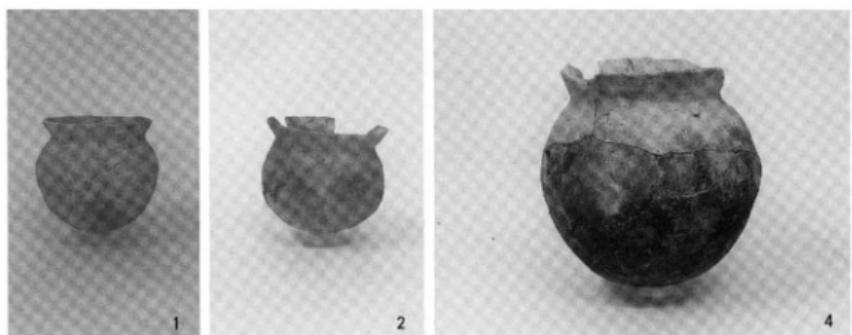
断面（南から）



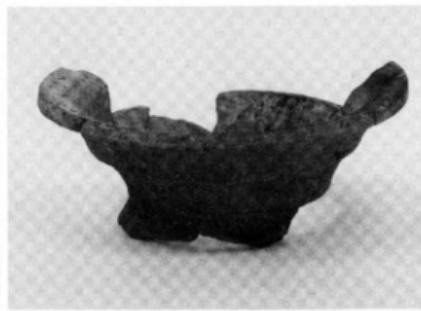
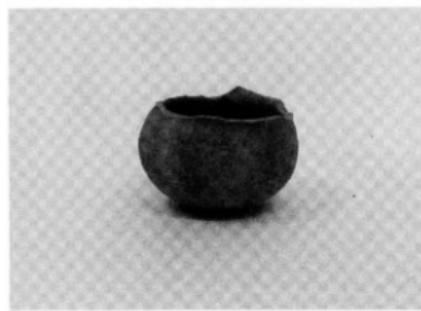
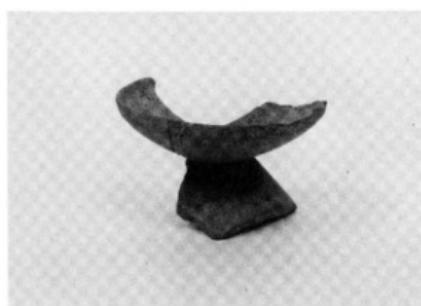
(東から)



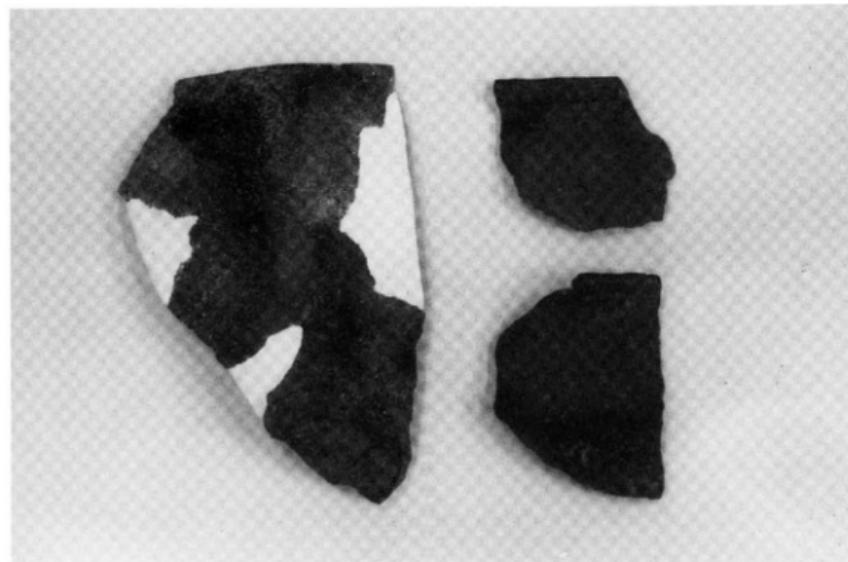
底部遺物出土状況



079土坑出土

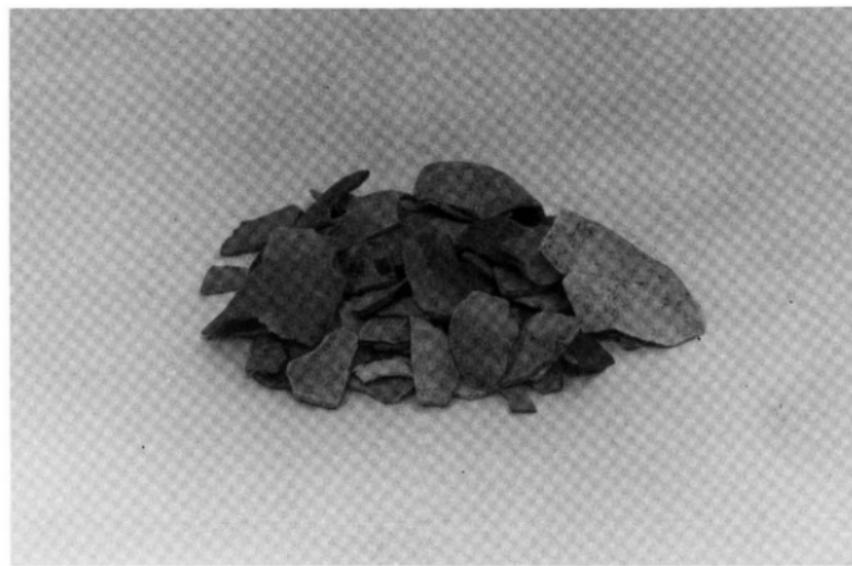


090溝出土

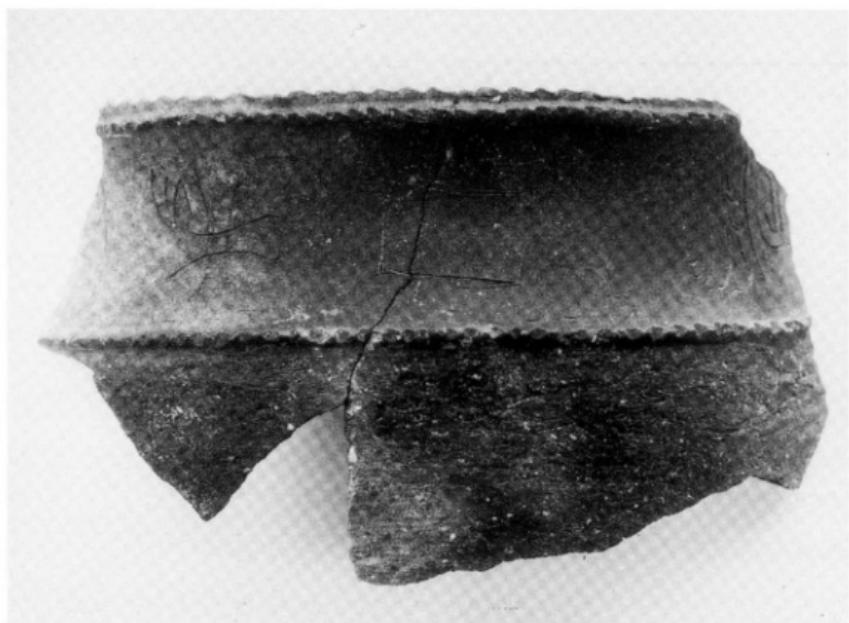




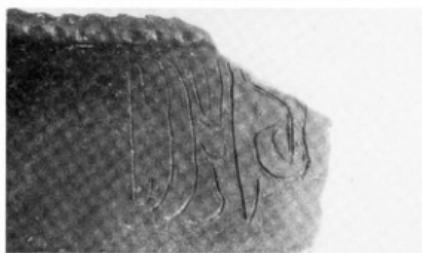
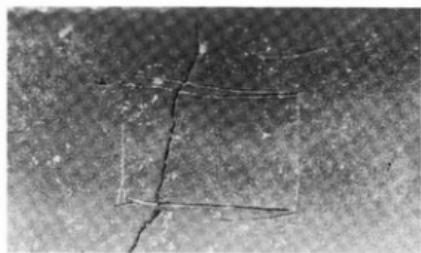
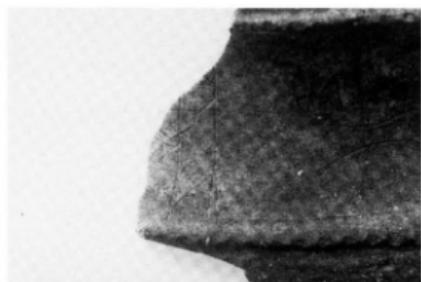
中世遺構出土



製塙土器



絵画全体



絵画部分



I区（西から）



井戸-1～3周辺（東から）

船 橋 遺 跡

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729)72-1501 内線5133

発行年月日 平成6年3月31日

印 刷 ハンカイ出版印刷株式会社

